
僕のAnotherStory

真野 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のAnotherStory

【Nコード】

N6680N

【作者名】

真野 優

【あらすじ】

僕は、どこにでもいるいたって普通の高校生だった。しかしある時、車に撥ねられかけた僕の命を助ける代わりに、異世界に行って来い……って、神様が。

はあ…どこにでもある普通の人生を送れば良かったのだが、魔法が存在して、自分がそれにすごい才能を持つてるってなれば、そうもいかないよね。

くそー。余計なことしやがって。今度会ったら神様とやらを一発殴ってやる！触れるのか知らないけど！

ブローグ1 old world side (前書き)

こんにちはー。完全に息抜きで始めた作品です。駄文ですが、読んでいただければ幸いです、そしてできれば感想等よろしくおねがいします

プロローグ 1 old world side

こんにちは。僕はどこにでもいる普通の高校生。公立のどこにでもある高校に通い、成績も平均的。運動神経も目立っていいわけじゃない。強いて言うなら、日本の武道、剣道が得意なぐらいだろう。ルックスも中の下つてところで、「平凡」という言葉を具現化したようなものだろう。

——一応、表向きには。

裏の顔はもつと平凡。パソコンいじって、自分で小説書いて、少々機械の改造を嗜むぐらいだった。

え？普通じゃないって？僕は普通でいたいんです、ハイ。小学生のころにいじめられたのが原因で、自慢じゃないが、クラスメートの約四分の三は、知らないか無視してるか、もしくは信用してないかだったね。

友達も少しはいるにはいるが、決して多くはない。むしろ他の人に比べて、少ない方だっただろう。

僕の趣味は、小説を読むこと。国語の成績はおかげで結構よかったのだが、その分を英語で補って余りあった。他の教科はほぼ六十点台だ。自慢にもならないが、担任に文句を言われるほど悪くもなかった。

ところで、こんな自己紹介してみた現実逃避を過去形でしているのにも事情がある。

今何と、僕は世界の神秘と対面しているのである。

——時間が止まってしまっているのを、神秘と言わないで何という。

僕は、図書館に行つて帰る途中だった。普通に青信号になつてから、右左右…とは言えないけどとりあえず確認した後、手を挙げるのは恥ずかしかったので、（しかも両手はカバンでふさがっている）そのまま歩いて渡っていた。僕は悪くない。なんてったって青信号だったんだからね。

ところが現実は厳しかった。

横から居眠り運転の大型トラックが、僕めがけてスピードを落とさずに突っ込んできたのだ。

で、今こんなことをしている暇があるのは、丁度目の前で、車が止まってしまっているからだ。しかも、運転手が垂らしていたよだれの雫が重力に惹かれて落ちるのも止まっている。

このままの状態が永遠に続くのか、と思つた時、静寂が破れた。

——はい、どうもどうもー。

この場に全くそぐわない（初体験だから詳しいことは知らないのだが。もしかしたらこれが普通なのかもしれないが、こういう時間が止まることが既に異常だ）能天気で軽薄な声が僕の不快指数を十ほど上げた後、突然自己紹介を始めた。

「煩い黙れ自己紹介要らん。カルシウムの足りない現代の若者の忍耐力舐めんなよ。何でお前はここにいた動いてんだとかまず常識的に考えて浮かぶ疑問にサッサと答えるこの軽薄なぺらぺら男」

「さりげなく全く自慢にならないこと行つたよね、今。まあいいか。じゃあ簡潔に自己紹介まとめます」

僕は、もう投げやりになっていた。この状態で冷静に対処しろという方が間違っている。

「要らんつつつてんだろ。早くこれについて説明しろ」

「いいのー？聞いとかないと後で知った時に後悔するよ。ていうか、あんたにこのことを教える義務は僕にないし、教えてほしい人の態度じゃないけどそれは置いておこう。僕はこう見えても寛大な男だからね、はっはっは」

……こんだけ長いことしゃべって、わかったのは彼の性別だけ。どんなに無駄な話かは分かってもらえるだろう。

彼の話はまだ続く。

「まずこの時間の停止についての説明だけどそれは省く。どうせもう関係なくなるし。ああ、自己紹介を忘れていた。僕は……」

——
神様だよ

「そうかそうか。じゃあ早くこれもとに戻してヴァルハラにでもアースガルドにでも帰りやがれ」

「無駄に詳しいねあんた。ちょっとは驚きなよ。ていうかここで元に戻してもいいけど確実に死ぬよ？それでもいいんなら別に止めないけど。ちなみに今後無礼な態度をとったら即この時間の停止状態を解く」

畜生、鬼め。神なんかじゃなくて、実は地獄の悪魔か鬼なんじゃないの。

「こっちに判断の余地なしじゃねーか！じゃなかった。すみませんでした非礼をお詫びします」

このくそ野郎め、という言葉は心の中で続けておく。

「平たく言います。あなたは異世界に今すぐ飛ばされるか、ここで死んで永遠に無の世界をさまようか、選択してください」

これには迷う必要なんてなかった。

「いいぜ、異世界だろうと何だろうと行ってやるよ。ここで死ぬよりました」

「決断早いねおい。そっちは死ぬより苦しいかもしれないよ？」

「わざわざお前に有利な方を獲ってやったんだ。その意志を挫くようなこと言って何の得があるんだ黙れ」

こんな状況で平然としていられるほど、僕は強くない。

「わかりました。一応軽い説明はしますが、いい加減力で時を押さえつけるのにも疲れてきました。そろそろ死後の世界に参ります」

「待て待て待て、殺す気か！死後の世界になんて行きたかねーよ！てか神様のくせに弱いなお前…じゃなかったすみません。全く反省してません」

自称、神の額には青筋が浮かんでいたが、うん、気にしない気にしない。

「死後の世界っていう言い方が悪かったねえ。天国や地獄じゃない、神様の世界のことだ。そこで軽く説明しますので。この世に未練はないですね？まああったとしても強制的に連れてくし、どの道時を解除するのは無理なので、なにもできませんがね」

ここまできたらもう何とでもなれ。どうせ未練が残るほどの人生じゃなかったよ。

「おっしや、とりあえず行ってやろうじゃないの、その神の世界とやらへ！」

ブローグ1 old world side (後書き)

これからも何とぞよろしくお願いします。できるだけ面白くしていきたいと思いますので、楽しんでもらえれば幸いです。

ブログ2 god world side (前書き)

こんにちは。ストックも何も準備していない、完全に成り行き任せの真野優です。

一日一話投稿を目指していますので、なにとぞお許し願います。え？何を許すのかって？一日一話投稿が最後まで続く人は珍しいのだよ。

ブローグ2 god world side

ハイどうもこんにちは。僕の元の名前はもう必要ないね。今後名乗る機会もないみたいだし。

今また現実逃避に入っているのは、二回目の転移の感覚を味わって吐きそうになっているからです。
少し前に遡ってみましょう

「う、ここは何処なんだ？」

僕は生まれて初めて体験する、コーヒークップを全力でまわされて（もちろん遊園地にあるやつだよ。ミルクと砂糖を入れるあれじゃないからね）しかもさらにスプラッシュマウンテンの数倍の速度で落下し、その途中に猛烈な吐き気と、満員電車の入口あたりに立ってた時の感覚を同時に味わったのだから、もう混乱して、さっき神の世界に行くとか聞いてたことは、ほとんど頭から抜け落ちていた。

（ムンクの叫びのような顔がチラチラと暗闇の中を落ちる際に見えたのが気持ち悪かったのもある）

それに比べて、今居るのは、なにもない真っ白な空間。

ほら、額に傷のある某少年が、学園生活の傍らで、非日常的な（非日常的な経験を毎日していると、それは日常的になってしまうのだろうか。そこはまあ気にしないでおう）生活を送るあの小説だよ。映画化もされて、つい最近完結した、ヴォルさんとハリさんの戦いのお話。

あれの最終巻を読んだ人はわかるだろうが、その中でも最後の方に出てくる、真っ白な空間とそっくりだ。（何の事だかさっぱりな人は、原作を読んでみてください）

「ここは、僕たち神のすむ世界の一步手前ってとこかな。神の世界に戻るのはちよつとまずい事情があるのでここで説明します」

「いやいやいや、このタイミングでそれ言われると滅茶苦茶気になるんですけど。明らかに僕のことに関わっているっぽいし、そんな拙い用事なのか、気になって当然でしょ！」

「……では説明します。あんなたは実はまだ死——」

「くらあ！無視するんじゃないー！」

「——ぬ筈ではありませんでした。これは私の上司で死と生を司る神のせいです。恨むなら彼を恨んでくださいね。そこで君を何かに利用……じゃなくて、君を生まれ変わらせてあげることになったんだよ。親切な神に感謝してね」

ここまで来ると、色々と突っ込まなければなるまい。もはや元の世界に戻るのはあきらめた。どうせこの神野郎に殺される羽目になる。

「今明らかに利用って聞こえたぞ。まあそれは置いておいても、どこの世界に生まれ変わるんだ？しかも何のために？そこで僕は何をしたらいいんだ？」

「今からそれを説明するんですよ、バーカ間抜け。素人のくせして口はさむんじゃねーよ」

「…はい、すみませーんでした——」

またまた全く反省の色すらない調子で返した。

いい加減にしないと地獄に落とされかねないのだが、どうもイラついてしまう。

こんなのが神様やってるなんてみんなが知ったら、宗教という宗教が全部壊滅するだろうな。

「今、とてつもなく僕らのプライドを傷つけること考えたね君。神馬鹿にしてるでしょ」

「いえいえ別に何もー？」

「チツ。じゃあ説明続けるぞー次口はさんだらマジであの世行きだからな、覚悟しとけよ」

もうすでにここも、「あの世」に入る部類だと思うのだが、それを口にするともまた面倒なことになりかねないので黙っておく。

「君の役目ですが、異世界にあるトラブルを解決してもらいに行きます。もちろん勇者として召喚されるわけではありません。そんなことしても君みたいな平凡な人間には何もできないもんね。ふっ。だから、チート能力付きで、生まれ変わってもらいます。前世の記

憶は有り無し両方選べます」

ここまで来るとさすがに狂言だとは思えない。前世の記憶？当然必要だろう。生まれ変わった僕の前に突然こいつが現れても、腰抜かすだけだろうし、記憶の力を馬鹿にしてはいけない。

しかし異世界全部のトラブルを解決するのはめんどくさいな。食い逃げとかそういう低レベルな犯罪ですらも取り締まるとかマジ無理だよ。

「ああ。その辺は大丈夫、向こうに着いたらわかると思うし、今言ったら行く気なくなるかもしれないし。ついでに言っておきますが、向こうで死んだら次はありませんし、向こうの世界のことはすべて現実にあることだと思っておいてください。くだらないドッキリ企画とかじゃないからね。

ちなみに言っておくと、向こうの世界では魔法もあるし、剣士とかもいる」

これは僕が一番気になっていた要素だ。本好きの僕としては、こういったことに憧れている時期もあった。十一歳になるまでは、本当に魔法学校とかあるのかもしれないと思っていた。

だって普通の日本人からしたら魔法なんて憧れだよ。

「マジで？魔法使えんの？よっしゃあああああ！」

「そんなに喜ぶことか？じゃあ君につけるチート能力は魔法でいい？」

「あーでも、RPGとかでは大抵HP低かったりするし、身体的な

能力も上げてもらえれば嬉しいかな。一応これでも刀は扱えるだろうし。あ、その世界刀ある？」

「ありますよ。じゃあもう、魔法の才能と身体強化でいいんですね。容姿はどうします？性別も」

「もちろん性別は男で、ルックスは上の中ぐらいで」

「わかりました。他に聞きたいことは？」

「え、他にもいっぱいあるよえーと……」

「じゃあ行つてらっしゃーい」

これには驚いた。まだ教えてくれるのかと思ったのに。

「くらあ！他にもあるって…ぎゃあああああああああ！」

床が抜けたかと思うと（というかここには床なんて無かったな。じゃあどこに立ってたのかな僕）

背筋に冷や汗が流れているのがわかる。この後、もしかして……

「朗報をお待ちしてますよー！」

僕は、ぐるぐると回転するような感覚と、ものすごい風圧、そして不快感に襲われながらどこかに落ちて行った。

| | | | |

「うつ…やっと着いたか…」

そう思って見上げた先には、とても綺麗な女の人がいた。

プロローグ2 god world side (後書き)

どうもー。これから一気に数年間飛びます。赤ん坊の時代なんて書いてても詰まらんです。しかもそんなのだらと読みたくもないでしょうし。

ではまた明日ー。

ブログ3 エルゲニアside（前書き）

ども。予約掲載を信用してないので、一日一話投稿はより難しいものとなりました。今日はおまけで二話連続投稿とさせていただきます。

プロローグ3 エルゲニアside

衝撃の異世界トリップから十二年後。

この間は、色々な意味できつかった。前世の知識や意識があるのに、赤ん坊のころは何もできなくてつらい思いをしてきた。

この世界の言葉も、意外と日本語にそっくりで、発音は英語、文法は日本語って感じだった。

この国の地理を覚えたりするのも、ひどく苦痛だった。一発で覚えてしまったのに、何度も何度も同じところを学ばせられる。

魔法の勉強もできた。七歳の頃、階段から落ちた僕は、危うく死ぬところだったのに、空中に浮いて止まっていたことから、魔法の才能があるとわかったらしい。（ようやくか、っと突っ込みたくなった）

さて、今の僕の自己紹介をしようか。

僕の名前はシレン＝エルフイム。まさか僕もこんなファンタジーチックな名前をつけられるとは思っていなかった。現世でこんな名前を名乗るものなら、即座に厨二病だと診断されただろう。

元の世界で得意だった剣道のおかげで、八歳から始めた剣の腕は、メキメキと上がって行った。（むしろ初めの頃は、手加減するのに必死だった。いきなり凄い技を使ったりしたら、みんなに正体がばれる恐れもある）

ルックスも随分良くなっていた。始めてみたときは、「え？これが僕？」って思ったほどだ。ナルシストにはなりたくないの、さつさと認識してしまう。

金髪碧眼で、短く切った髪と、普通より大きめの眼が印象的、という感じの顔である。身長はちょっと高い方かな。

僕の家族も紹介しよう。

意外にも高貴な家柄に生まれたく、名字持ちというのは、貴族の証だという。

でも、うちのお母さんでまとめ役の、ベガエルフィムお母さんは、いつも親切で、貴族にしては珍しく家事などを自分でこなす、いいお母さんだった。料理も上手いし美人だし、正直に言くと、前の母親がこんな人だったらな、と思う。

僕のお金髪碧眼は、彼女から受け継いだものだろう。そして魔法の才能が半端じゃなく高い。怒らせたなら、絶対に逃げ切れない。僕の魔法を指導してくれたのも彼女だ。

父親のアンタレスも、気さくで面白い人だった。何時もお母さんに怒鳴られてばかりで、それでもめげずに冗談を連発する、とにかくひたすら明るい人だった。落ち着いた印象のお母さんと、とてもお似合いだと思っている。こっちは武術に長けているが、教えてはくれなかった。本人いわく、「俺は剣を使うが、お前の場合は刀の方が向いているだろう。なら刀の師範に教えてもらえ」とのこと。

貴族にしては珍しいこの両親が、僕はすぐに大好きになった。元の世界の両親なんかより、ずっと素晴らしい人たちだと思う。

次に、僕の兄弟関係について。

まずは一番長男で、今は十八歳で軍隊で働く、エドワード兄さん。剣の才能があるらしく、二年で師範を超えてしまった、驚異の剣士だ。

彼は銀髪蒼眼？（そんな単語があるのかわからないけど、銀髪に

青い眼だと思ってくればいい）で、お母さんより、お父さん似だ。でも、家族に対しては何時も面白い話をしてくれて、少々厳しいところがあるものの、基本的にいい人だった。ただ魔法に関しては、七歳の僕ですら勝てるものだった。ま、僕はチート的な能力があるみたいだから当然とも言えるんだけど。

僕は、彼の名前を縮めて、エド兄さんと呼んでいる。もちろん、お母さんの鉄拳が飛ぶときも

「エド！待ちなさいこらっ！」

……って言われている。ちなみに今のは現実のセリフ。タイミング良く入りました。

次は、長女のマリア。

こっちはエドワード兄さんとは正反対で、魔法に長けている。

どっかの兄さんと違って、怒られることなく成績優秀で、頭脳派な人だった。特に姉弟喧嘩も無く、平和に過ごしている。意外にも明るい人なので、何というか、滅茶苦茶接しやすかった。

まだ若干十五歳で、六属性+それぞれの亜属性のうち、三つの究極魔法を覚えている。

ちなみに、普通は三〇年間きっちり修業を積んで、やっと一つの究極魔法が使えるようになる。まあ、戦時中でもない限り使いどころに困る技だが。

ところが最大の欠点は、料理が限りなく下手なくせに、自分では得意だと思っているところと、過保護の気があるところかな。その対象が僕というのを除けば、まあ特に問題はない。

容姿はお母さんそっくりで、その綺麗さ+魔法の強さから、一週間に三回は告白されているようだ。しかもそれはすべて速攻で断っ

ている。まだしつこく食い下がった相手に対しては、躊躇なく魔法を使う。本当に彼女の犠牲になった方々。自業自得とは言え、ご愁傷さまです。

「——あたしはまだ誰とも付き合いたくないわ。シレンの世話で手一杯だし」

あ、また誰かに告白されてる。しかしちょっと問題発言が聞こえてきた。

まるで僕のせいで付き合えないみたいな言い方ではないかなるほど。だから最近僕に喧嘩を売ってくる輩が多いのか。ま、ことごとく返り討ちにしてるからいいんだけどね。

最後は、妹のセルフア。

まだ八歳だから剣道も習ってないし、魔法も教わっていないけど、たぶんどっちかの才能はあるだろう。

妹はお父さん似で、銀髪に金眼で非常に見栄えがよろしい。そしてエド兄さんに溺愛されている。

以上が僕の家族構成だ。

貴族ならではの晩餐会などのイベントでも、注目を集める一家といえるだろう。

「シレン」。魔法の勉強始めるわよー」

「今行きまーす」

お母さんの魔法講座が始まるので、自己紹介はこれぐらいにしておこう。

僕の使える魔法はまた今度機会があった時にしよう。

さっそく 身体強化 の魔法で走力を高めると、声がしたところまで走って行った。転移の魔法はまだ教わっていないから、普通に移動しなければならない。

今日は、魔法専用の訓練所に行くことになっている。

威力の高い魔法とかを練習するときは、あらかじめ防壁の張つてある訓練所で行わないと、家が半壊する。

「さっ。今日は何を教えてもらえるのかな」

僕はまた新しい魔法を習得できることに喜びを感じながら、駆け足で訓練所に飛び込んだ。

ブログ3 エルゲニアside（後書き）

今回、ようやくブログが終わりました。

次回からは、世界の情勢も少し入ります。

国の名前とかあまり多くしすぎると混乱するので、他の方の作品より少な目かもしれませんが、大目に見てください。あと、連日更新とか言っておきながら更新できない可能性もございますので、あらかじめご注意ください。

感想お待ちしております。

第1話（前書き）

ども。さっそくお気に入り登録してくれた方がいるようで、嬉しい限りです。感想お待ちします。

第1話

「ふーっ。つつかれたー」

僕は、今十五歳。一年ほど前から、新しい刀術（剣道はこの世界でそう呼ばれているらしい）の師範についてもらって、厳しい指導をいただいている。

その師範がまた人間じゃないくらいに強い。兄さんでも勝てないだろう。必ず。

なんでも、古流刀術、星斬流の使い手で、その抜刀のスピードは、神にも近いといわれている。

そのことから、特にすごい普通の刀術とは違う技を、第壱ノ型、第拾ノ型まであるうち、第鉢ノ型まで習得しているという。

ちなみに、師範にその刀術を教えた人は第仇ノ型まで使いこなしていて、最終形態の第拾ノ型、「星斬」はこの刀術の創始者以外、誰も使えたことがないという。名前だけは伝わっているが。

僕は、第参ノ型まで習得しているが、到底師範には及ばない。ちなみにこの世界にも日本のような国はあるらしく、師範の名前はヤマト・ミヤモト。漢字に直すと、宮本大和ってところか。師範に気になって聞いてみたところ、自分はゼファンクの出身だと言っていた。

今日は、その師範と模擬刀で、全力勝負をしてきたのだ。疲れてもしようがない。

地面には深いクレーターができてたりして、必死にならないと命の危険すらある。模擬刀ではあるが、間違っても模擬戦だとは思わないのが、師範と戦うときのコツだ。

その後は、すぐにまた魔法の訓練。ヤマト師範は、僕に魔法と星斬流を組み合わせた刀術を覚えてもらいたいと思っっているらしく、新しい技を思いついたら即教えに来い、といつも言っているが、そう簡単なことではない。

魔法の訓練と称しては、（実は自分が後片付けをするのが面倒臭いからだと睨んでいる）地面にできたクレーターの修復をさせられた後、本格的に姉さんと今度は魔法の試合。

それが済んだら、ベガ母さんの、魔法講座が始まる。

僕の休日の生活はこんな感じだった。だから……

「宿題なんて終わるわけがないよな」

そう。僕も去年から学校に通わされている。

もちろん、普通の学校ではなく魔法学校なのだが、普通の授業、たとえば国語や社会もある。

そしてそこでは当然の如く、山のような宿題を出してくるのだ。

「えーい、諦めた！」

ぶっちゃけ、試験前になったら、身体強化の魔法で自分の記憶力を上げて必死で勉強すればいいだけだ。

ここの学校は魔法学校なだけあって、他の教科は宿題を出さな

くとも、授業態度と百点満点の試験七十点で、昇格できる。

魔法に関しては、新しい魔法は教わるものの、毎日といっていいほどベガ母さんの洗礼を受けていた僕には、これといって難しいものもなく、ラクラクこなすことができた。

魔法と体育を組み合わせたスポーツも習うのだが、二カ月に一度の魔法学校交流戦代表選手に選ばれ続けていれば、早々問題もないだろう。

というわけで、日々出される宿題の鬼を退けながら、（厄介なことに、普通のゴブリン程度なら普通に追い払えるのだが、この鬼には魔法があまり効かない）刀術と魔法の鬼と戦っているのだ。

何で僕の周りには、こうも鬼が多いのだろうか………

しかも、学校に行って帰ってきてても、またしごかれる。ま、元の世界に比べて、圧倒的に娯楽が少ないこの世界では、あまり苦痛にならなかったが。それに魔法を覚えるのは楽しいし。

明日になったらまた学校があるので、今日はもうゆっくりと休みたい。

僕は晩御飯を掻き込むと、そのまま寝室に向かった。

「うーん、久しぶりによく寝た―」

これなら清々しく登校できそうだと、ベッドの天蓋を眺めて、僕はそう呟いた。

昨日の夜、あけておいた窓から、気持ちの良い朝の風が吹き込んでくる。

「サイクロン
竜巻」

風属性の中級魔法を使って、さっきから吹き込んでいる風を材料とした小規模な竜巻を作る。

「スプラッシュ
水撃」

その竜巻に、今度は水属性の初級魔法で、水滴を送り込む。こうして作った水の竜巻をそっと顔に近づけて、顔を洗う。

「ぷふあ。やっぱこれは涼しくなるな―」

今の季節は夏。暑くて暑くてしょうがない。元の世界で言う猛暑日が、四六時中続いている感じ。

こうやって編み出したコンビネーション魔法を、（こんなくだらないことに）利用することによって、クーラーや団扇に慣れた僕は、ひそかに涼んでいる。

さっきの二つの魔法は、九歳の段階で覚えたので、それ以来、この洗顔魔法は、夏の季節に愛用している。

魔法には六属性とその亜属性があると言ったが、具体的には、火、水、風、土、光、闇の六属性に、それぞれ熱、毒、雷、重、聖、悪の亜属性だ。

僕は全ての魔法のうち、上級魔法までは使えるし、毒、重、聖、悪以外は、究極魔法までマスターしてるから、戦闘には向いている。

もつとも、空を飛ぶとかそういったこと以外は全部、攻撃か防御の魔法しかないんだけど。

この世界では、魔法を発動させるのに杖は必要ない。有った方が魔力が高まり、（あれ？消費する魔力を減らすんだっただかな？ま、どっちにしる変わりないか）それに自分が得意とする魔法に対応した宝石を埋め込むことによって、発動を容易にすることができる。

僕の場合は、ベガ母さんが僕の魔法の才能に気付いた時、よほど嬉しかったのか、全ての魔法に対応するダイヤモンドの杖を買ってくれた。（ちなみに姉さんはちゃっかりしていて、さらに格上のオリハコンの杖を買ってもらっていた。まあ僕も自分だけ優遇されるのは嫌いだからちようど良かった）

おかげで学校では（僕の容姿も手伝って）嫉妬の対象となりやすいのだが、それがいじめにまで発展することはなかった。何故か？調子に乗って喧嘩を売ってきた連中をことごとく返り討ちにしてるからだ。

魔法で生み出した光刀があれば、どこでも刀術を使えるし、魔法意外に能力のない一般生徒に太刀打ちできる術は無かった。

しかし一回追い払っただけではまた何度も来るので、面倒だから一回峰打ちで気絶させると、回復魔法でもう一度起こし、今度は重系魔法＋風属性魔法のコンビネーションで、高速の重力球を叩き付

けることにより、もう一度気絶させて、どこかにポイする。

それで恐怖心を煽られたのか、二度と攻撃してくることは無かった。それから得た教訓。それが「出てきた敵は二度倒せ」

ん？手加減？何それ美味しいの？

しかしこんなことばかりしていると、友達が少ないんじゃないかって？まあそうだけど、僕は自分につまらない嫉妬で喧嘩を売ってく
る奴とは、頼まれても友達にはなりたくないから問題なし。ついで
にそれを見ただけで怯えるようなのも、今後僕に与えられた役割か
らして色々と危険なことに首を突っ込まれそうだから、相応しく
ないかと判断している。間違ってもナルシストなわけではない。

しかし今日は、そんな僕にも何人かいる友達に、突然呼び出され
た。

……ああ。これで今日の平穏な時間は終わった。

僕はその話を聞いたとたん、何かが音を立てて崩れていくのを感じ
た。

第1話（後書き）

ふーっ。何とか今日も更新できました。
あと、ルビを振る方法とか教えてください。お願いします。

第2話（前書き）

どうも。僕の苦手な戦闘シーンに入るかもしれません。

何故か主人公が滅茶苦茶強くなってしまうのが僕のくせなので、それを治すように努力します。と言う訳で、駄文ですが、どうかお許しください。

第2話

今回厄介事を持ちこんだ僕の友達は、ガウス・アフタネス。
しかもその厄介事の内容が、また平凡じゃなかった。

「で、何でそっちのクラスで、生徒総出の殴り合い＋魔法の喧嘩が勃発してるからって、僕が止めに入ることになる？」

「だって、今日はもともと先生たちは出張でいないからって自習の日だぜ。忘れてたのか？ま、それは置いておいて、俺じゃ四十人も一度に止められないし、他のクラスが介入したら、二倍の八十人の喧嘩になりそうな気がするじゃん」

とまあこういう訳で、実は先生以上に攻撃魔法を扱える僕が選ばれたと。

「まあとにかく現場に来てくれ！」

もはや心の中では介入を決めていたのだが、それでも今居る位置は学校の校門。一刻も早く問題の教室に行かなきゃならないだろう。

「ていうか今回の喧嘩の原因て何？」

「女子と男子の些細な行き違いからだよ。ほんとなら男子vs女子になるんだろけど、男子の中に何人か裏切り者が出てな、それを咎めようとしたところで、女子がその裏切り者に加勢し、今に至ると」

うつわー。くだらねー。

本当なら、「勝手にやっつけ！」と言いたところだが、そうもいかない。

「これって、四十人全員討伐するより、どっちかの味方で戦った方が早いな。味方に付いた方は、今後何も嫌がらせも仕掛けてこないだろうし。うん。僕も当然男子だから、一般男子の方に加勢しよう」

「おう、俺も裏切り者じゃないし女子には見えないしな。それで何の問題もないだろう」

客観的にみると両方止めるべきだろうが、この時の僕はそんなことを考えていなかった。

どうすれば自分の使う労力を減らして、なおかつ大きなメリットを得られるか、それを模索していたのである。

「まあ女子と裏切り者を全員気絶させるのでいいか。じゃあ、ガウスは先に行って、男子人に退くように言うておいて。『新しい加勢が来る』とだけ言うてくれればいい。渋ってたら力づくで叩き出して」

「了解！」

ガウスがさつさと駆けて行った。

本当に単純な奴だ。このまま僕がいかなかったら、男子の負けで、裏切り者たちの勝利となるだろう。

そうなれば、僕は一番楽をできるわけだ。

「でもやっぱりそれだと後味悪いしな。久しぶりに暴れてみようか」

そうときまれば話は早い。身体強化で走力を高めると、問題のクラスへ駆けあがって行った。

そこは五階建ての建物のうち四階。まあ二十秒もあればつくだろう。

「よっしゃついた！男子全員そこから出て！」

「おお！シレンが来てくれたみたいだぜ。この勝負もらった！」

僕の姿を確認するなりそんなことを口走ったのは、僕の数少ない友人の一人、シリウス・エル・ダ。

「何っ！お、おいまずいぞ。一時撤退！」

空気を読んでくれたのか、僕が助けに来た方の生徒が叫んだ。

——あれ？シリウスは何で女子に囲まれてるわけ？

どうやら裏切り者の中には、別名女誑し魔のシリウスも入ってたらしい。

「おいシリウス。ちょーっと痛いかもしれないけど、我慢しててね」

「え？こっちの味方じゃないの？」

「おお！意外のもこっちの味方らしいぜ！でもいったん退避だ！」

さっきのは誤解だったらしい。で、今度こそ空気読んだ発言をしてくれた。

「黙れこのKYがー！」

重力の球を作りだし、当たったものを押しつぶさんとする、中級
グラビティ・ボール
重系魔法 重球

殆どのものを吹き飛ばしてしまう上級風属性魔法 シルフダンス 風精の踊り
いつものコンボに今回はほかの魔法も上乘せする。

高電圧の電流を相手に流し込む、中級雷系魔法 ライトニング
僕がこの世界に来て編み出した、竜巻を凝縮して相手にぶつける
魔法 バキクロス 元の世界では、確か バギクス だったはず
だが、一部改編。

「お前のせいで（他にも色々と原因はあるのだが）安らかな朝の休憩時間がつぶれたじゃないか！とくと反省しろ！」

僕が片手をシリウスに向かって振りおろすと、発動前状態で待機していた魔法が一気に飛んでいく。
その標的は言うまでもないだろう。

「ハッハー。何でお怒りなのかは分からないけど、僕にはこのたくさんの子たちの防御呪文がある！この程度では二十人分の防御魔法は突破できまい！」

恐ろしく空気を読まない発言に、僕たちノーマル男子一同は、みんなちよつとあいつを撫でてやりたくなった。

ちなみにこの場合の撫でてやるとは、「叩きのめす」と同義である。

「なあ、ここからならあいつめがけて魔法を打ち込んでもいいよな」

そういった声が聞こえてきたので、一も二も無く了承する。

「もう徹底的にやつちゃおうか。おい！この勝負負けた方が先生に怒られる＋後片付けでいいな！」

「ハッハッハー！そんなに君たちが後片付けが好きだったとは知らなかったヨー」

ああ、ついに切れた。

バイバイ、僕の良心。

「それは賛成と思っていいんだな！ならよし。いいみたいだぞ皆。一斉にやーっとおしまい！」

元の世界の某アニメの名台詞を叫ぶと、おう！という威勢の良い返事とともに、いろんな魔法が（シリウスを守っている女子たちに向けて）発射された。

おもにメンタル面で弱いうちの女子たちは、てっきりシリウスに攻撃が来ると思ってたのか、自身に防御を張るのを忘れていたみたいだ。

てことは当然、炎や雷、風などがモロにぶつかることになる。

「キヤツ」

そんな声が教室内に充満し、閃光が鎮まった後には、服を焦がしたり、頭にたんこぶを作っていたり、まだ感電してしびれている女子たちの姿があった。

まだ立っているのはあと十人。裏切り者五人、女子五人だ。

「よし、次は雷系魔法の準備、使えない人は風属性でよろしく！」

「おー！」「うん」「あー」「えー」「ふー」

こっちの十六人のメンバーが、それぞれ自分の使える最大の風、雷の魔法を準備する。

え？僕？当然のことながら、風属性の最強魔法を使うのさ。もちろんだいぶ威力弱めで。

本気で放ったら、周辺五百メートルは吹き飛び、ここにいる僕以外の全員が星になるだろうから。

「行くぞ！」

「
ウインド
風撃
！」

「サイクロン
竜巻！」

「ウィンドハンマー
風の槌」

「トールのつち
雷神の槌」

「サンダーブラスト
雷撃」

「シルフダンス
風精の踊り」

「紫電ノ蛇」

「雷神風神の怒り！」

「——ちょっと待て、今何個か致死レベルの魔法があったよ
うな。」

雷神の槌と、紫電ノ蛇、雷神風神の怒りは少々やりすぎじゃない
の？

特に雷神風神の怒りなんて、二種類の最上級魔法の合体版だよ？
そんなのを使ったら、今日一日、魔法は使えないだろうな、魔力切
れで。

「——
ト」と思いつつ僕が放ったのは、究極魔法、
ライトニング・バース
疾風の乱舞。
ハヤテのらんぷ

先の三つに加え、今僕が使った二つも、早々魔法学校程度でお目にかかれるものじゃない。

もはや戦地にでも行かないと見ることはかなわないだろう。

それだけ僕らが優秀なのか、人間怒るとんでもないことができるのか、少々疑問だ。

とりあえず、女子五人の防御魔法を突破した僕たちの魔法は、軽々と相手の十人を吹き飛ばすだけの威力はあった。

窓が割れ、グラウンドにまで落下する。

そろそろ浮遊魔法を使って落下を免れるはずが、一向にその気配がない。

「やっぱりあんなんでも死んだら後味悪いしな。 トルネード！」

言下に、大規模な空気の渦が生まれ、彼らをぐるぐると回し続ける。

僕が魔法を解除するか、自力で逃れない限り、ずっとあのままだろう。

「どうする？ あれ解除する？」

答えは大体わかっていたが、一応皆に訊いてみた。

「「「「「「「「いや、何も見なかったことにして自習に励もう」「

「・・・・・・賛成。さ、自習自習」

結局、シリウスたちが地面に降りられたのは、夕方近くになって、僕たちが帰る時だった。通るのに邪魔だからしょうがなく。

・・・・・・決して、雑談に興じて忘れてたわけじゃないからね。

ちなみに、気絶したりした女子たちが起き出したのも、同じぐら
いだった。

何でか？なかなか目を覚まさないんで、邪魔だからもう一度風属
性魔法で、トルネードの中に放り込んでおいたからさ。

ん？慈悲の心？ナニソレオイシイノ？

あ、あと、ガウスは後で喫茶店に行った。そこで一番人気のメニ
ューを注文すると、食わずにそのままお金だけ払って帰って行った。

じゃあそれは誰が食べたのかって？トラブルに巻き込まれた、シ
レンという名の哀れな魔法使いだよ。

第2話（後書き）

ども。何とか投稿完了しました。これからは土日頑張って行きたいと思います。

第3話（前書き）

よっしゃ、1日2話投稿できた！

感想お待ちします。

第3話

あれから一週間が過ぎた。

先生にも怒られず、約束通り怒られたのは、どう見ても被害者な二十五人だった。

それ以来トラブルも無く、平和に過ごしていたのだが……。

「ほらほら、魔獣退治行くわよ！」

今日曜の休息を味わっている、僕の袖を引っ張っているのは、幼馴染の馬鹿女、セリア・ストファンだ。

この世界には、ゴブリンやオーク、果てはドラゴンまでたくさんの魔獣が存在する。

そして今、下位の竜種、ドラゴンがこの近くに現れている。

それを討伐しようと、馬鹿で勝気な彼女は言っているのだ。

いくら下位とは言え、ドラゴンに一介の魔法学校の生徒が太刀打ちできるはずがないのだが。

しかしこの幼馴染、一度言い出したら、僕が言うことを聞くまで絶対に譲らない。

小さい頃、同じようにしつこく付きまとわれた挙句、トイレの中までやってきたから驚いた。

「何でそんなところ行かなきゃならないの？」

「んなっ！あ、あんたドラゴンに興味無いの？しかもこんなに被害が出てるのに、退治しようとか思わないの？それでも男か！」

「そんなに気になるんなら自分で行ってみなよ。そんなにしつこくて勝気で短気な女は見たこと無いよ。そっちこそ男なんじゃない？実は」

「うるさい！力づくでも連れてくわよ！」

こうして、僕の平穏な時間は、またもや終わりを告げた。

「で、どうして俺まで？」

そう、ガウスまで、無理やり一緒に行く羽目になった。（連れ去られた、と言えば分りやすいだろうか）

「人数は多ければ多いほど、勝率は上がるわよ。さ、行きましょ！」

「ちょっと待って、この森の中から、探し出すのは難しいんじゃない？ 今日中に見つかるとはとても……」

「大丈夫、女の運と勘を信じて！」

「だから、余計信じられないんだよ。だってここには女はいない……」

ドカツ

あたたたた……。師範の剣のスピードにも付いていけるようになって僕を殴るとは、どんなスピードだよあいつ。ますます人間離れしてるな。

「あわ、わあわわわああわああわああわわわああわわわわわわわわわわわわ」

「おい、どうしたんだよガウス。そこらにドラゴンでも見つかった……」

さっきから、僕、台詞を最後まで言えてない気がする。

そう、本当にドラゴンが見つかったのだ。

「おおおお！ニューハーフの勘すげー！」

「なにそれ、にゅーはーふって」

ああ、この世界にはない単語だった。危ない危ない。

「男のような女の人のこと………っていたっ」

また殴られた。そんなに余裕あるなら、ドラゴン殴ってこいよ！

「ダレダワタシノネムリヲサマタゲルノハ」

「ぎゃあああああああああ！」

こうして異世界トリップの定番、ドラゴンとの戦闘が始まった。
ちなみに今日は刀を持ってきてるので、もしかすると勝てるかもしれない。

でも……………

「やっぱりえ怖ええええええええええ！」

第3話（後書き）

あ、すみません、今回戦闘シーン入れたかったのですが、時間の都合上次回になってしまいました。

今回は幼馴染の紹介というようなことになってしまいましたがお許しくだ……いたっ

石を投げないで！ああああ！魔法の準備も止めて止めてー！ー死
ーん（笑）

シレン「ふー。やっと騒音がなくなった。ていうかかつてに異世界に飛ばすなこのやロー」

第4話（前書き）

こんにちは、駄文ですが楽しんでもらえたらな、と思います。

第4話

「ナンジ、ワレノアンソクヲサマタゲタ。ヨッテ、テキトミナシテハイジヨスル！」

えゝ、カタカナばかりで読みにくいので翻訳します。

「汝、我の安息を妨げた。よって、敵と見なして排除する！」

ははゝ現実？なにそれ美味しいの？

さあ、現実逃避の世界に入ろうじゃないか！

「こらっ！現実逃避してる暇があったら何とかして！」

「そっちこそ叫んでる暇があるなら何とかしてくれ！」

お互いに責任転嫁を続ける気も無いので、二人でさっさと飛び出していく。

「僕は死んだばあちゃんからの遺言で、危ないことには首を突っ込むなとぼぎやぶっ！」

また……また殴られた。

「ええい、ごめんなばあちゃん！」

ドラゴンには魔法はあまり効かない。

——
なら！

「刀術だけで（魔法と組み合わせるのもあるけど）勝負だっ！」

こっちをドラゴンがその真紅の眼で睨みつけてきた。
正直怖い。でもやらなきゃ死ぬ！

僕は 身体強化 で体全体を強化すると、ドラゴンを睨み返して
突撃した。

「はああああっ！」

——
星斬流第壱ノ型、突刀

これは、猛スピードで走りながら抜刀し、抜刀の勢いと体のスピードを乗せて、敵に刀を突き刺す技。

しかも今は魔法で強化してる分、走りも早くなっている。

だがまあ僕も、この程度で倒せるとは思っていない。

僕の突刀は、その硬い鱗に少し食い込んで傷を与えただけだった。

「ちっ」

そのままの勢いで地面をけって跳躍。風属性魔法で高度を維持する。

「次っ」

これは上空高く跳躍し、その落下時の加速＋自分の全体重で相手を切り裂く技。

しかしこれも、当たったのだが長くて浅い裂け目を与えただけだった。

「まだ駄目か。それなら！」

星斬流は、もはや並みの刀術とは違い、遠隔攻撃など、特殊な技を持っている。

その中で最も使われているのが

——星斬流第参ノ型、衝斬刀

抜刀時のスピードを極限まで上げ、その際に生じる衝撃波で相手を攻撃する遠隔攻撃。

技の威力は、元居た世界のものでたとえるなら、某小説の、最強

の主人公が使う「傾国の剣」の遠隔攻撃と似ているだろうか。

さすがに鋼鉄の鱗も衝撃波までは防げなかったらしく、すっぱりと裂け鮮血が吹きあがった。

「ぐがあがああああ！」

しかしそれでもまだ、全体のHPが千だとすると、今までの攻撃で五十は減りましたかね？という程度。

だが、下位とは言え竜種のプライドを傷つけるのには十分だったようだ。

すなわち、さっきまでの「誰を食べようかな」と品定めするような雰囲気は消え、明らかにこっちを敵として認識している。

それはつまり反撃が来るということ！

ドラゴンの得意技と言えば、普通に考えるとそのプレスが有名だ。炎を吐いたり、凍りつかせたりと、ドラゴンによって得意技は違うが、魔法で属性は変えられる。

さらに言うと、今日は僕は杖を持ってきていない。何故か？腰に差す刀で戦うつもりだったからだ。

そう、攻撃に対する防御の手段は無きに等しい。

「セリア！先に逃げてって言いたいけど、守りは任せた！」

「おい、俺はどうすればいいんだ？」

「ガウスは帰って連絡とって！」

「おい、俺だけ仲間はずれにしようなんてひどいぞ！……まあここにいってもできることはないだろうから、お言葉に甘えさせてもらうぜ。二人で仲良く戦ってくれ。あ、ドラゴンの鱗は高く売れるから、ぼろぼろにしたりしないで残しとけよ！」

こういうときまで必ず冗談を飛ばす、彼の神経はあまり理解できないが、見習った方がいいのかもしれない。

おかしい。何故攻撃してこない？今喋っている間が絶好のチャンスだったのに。

僕は嫌な予感にとらわれた。

まさか、魔力をためてもっと格上の攻撃をしようと考えていたりしたら……！

「サア、ワレノイカリヲウケテミヨ」

「おことわりだっ！」

プレスなら辛うじてセリアでも堪え切れるかもしれないが、それ以上は無理だろう。

風属性魔法第壱ノ型合体、疾突刀！

風属性魔法、風精の踊りを自身にかけ、さらにスピードを上げた突刀に、刀の刀身を風圧で覆う。

ピタツとさつき入れた傷口と同じ位置に疾突刀を放つ。

さらにコンビネーションは続く。これからが僕の本領発揮だ。

「行っっっつけええええ！」

重系魔法第二ノ型合体、重落刀！

重系魔法を自身にかけることで、さらに落下速度を上げた落刀。

基本的にさっきの疾突刀と変わらない。

「これが今の僕の必殺技だ！」

——風水雷火属性魔法第参ノ型、破刃衝斬刀！

炎と水、そして雷でできた刀と普通の刀全てで衝斬刀を三発ずつ放ち、さらに見えない風の刃、カマイタチによって敵を切り刻む。

「グガアアアアア！ガ………ア……」

もはや人語だとは思えない獣の断末魔の声を上げ、ドラゴンはその巨体をゆっくりと倒した。

だが今度は、さっきのドラゴン以上のプレッシャーを感じる。

恐る恐る振り返ってみると、泡を吹いて気絶したセリアと、体長百メートルはある、黄金色の上位の竜種、アドバンスドスリーと呼ばれるドラゴンが、こっちを見降ろしていた。

第4話（後書き）

セリア役に立たなかったですねー。初めての戦闘らしい戦闘シーン、少々長くなってしまって申し訳ありません。

第5話（前書き）

えー。さすがに今日同じ日に更新するのはつかれましたー。

第5話

「もうヤダ——！」

半ば自棄になった僕のセリフ。セリアはもう泡を吹きながら気絶している。

よって、頼りになるのは攻撃しかできない自分のみ！
ていつても、別にあまり防御魔法が使えないからって、防御が全
くできないわけではないのだ。

正直、刀を媒体に宝石ナシで魔法を使うこともできるのだが、防
御魔法はそれほど手馴れているわけじゃないからって言うだけで。

ま、そんな程度の防御魔法なら、発動したところでドラゴンには
効果がないってワケ。

僕の刀に、炎のプレスなら水、水なら火、といった相手の攻撃の
属性と反対の魔法をかければ、低ランクの魔法障壁でもプレスを防
げるってわけだ。

ところがこのアドバンスドスリー、魔力そのもののプレスを放っ
てくるから、防御の仕方がないのだ。

唯一防ぐことができるのであれば、星斬流の第碌ノ型、次元障壁し
かないだろう。

これは、別次元への裂け目を障壁のように作ることによって、相
手の攻撃をすべて消滅させるという技だ。

もはや刀術の域を超えているのだが、そこは突っ込んではいけな
い。そういうものなのだろう。転移魔法と組み合わせたのかもしれ
ない。

だから僕ができる防御は、元の世界の格言にもあることしかない。

『攻撃は最大の防御なり』

「うおおおお！先手必勝！」

言い訳のしようもございません。攻撃一筋の脳なしです。
これじゃあ、もし元の世界のRPGなら、攻撃力だけの、最強最弱の異世界魔法騎士と言われてもしょうがない。

「ちくしょー！まだ使ったことはないんだけどー！」

僕は、六つの魔法を発動させ、待機状態にする。

その六つとは、セラフレイズ 堕天使の業火 アトランティスの復讐 疾風の乱舞 ハルマゲドン 昇華の聖光 漆黒の闇。

ちなみに、全て六属性の究極魔法だ。

それを、トルのハンマー 雷系の究極魔法、雷神の猛槌 でつなぎ合わせ、重系魔法の上級魔法で圧縮し、熱系の究極魔法、絶対零度 で表面を凍らせる。

ちなみに、熱系魔法は、熱を奪って物を冷やすことも可能なのだ。

しかしこれらの魔法をすべて瞬時に発動した僕は、相当量の魔力の消失により、意識が闇に覆われかけたが、何とか踏みとどまったのだが。

当然、ドラゴンの方が待ってくれるわけが無いよネー

「愚かな人間どもよ。我には向かうとは、人間の愚行の中でも最たるものだ。我は力に以外屈しはせぬ。そして人間が我を屈服させるほどの力を持つことはまずあり得まい」

「なら・・・僕が・・・そ・・・の人間にな・・・ってや・・・るよ」

魔力を抑えるだけで精いっぱいなのだ。ドラゴンの口が開いて、その喉の奥が光り出しても、それを防ぐことはまずできない。

避ける方なら何とかなるかもしれないが、発動したこの魔法を解除しなきゃならなくなり、攻撃用の魔力が大きく減ってしまう。

それに、僕の後ろにはセリアがいる。避けたら、動けない彼女にぶつかる！！！！

そこまで考えると、一つの名案が思い浮かんだ。しかしこれは賭けに近い。しかも負ける確率の高い賭けだ。

でも、なにもしないで死ぬよりはましだ！

「さらばだ。愚かな人間。 魔力の息」

「受けてみる、僕の持つ魔法の中で二番目に最強の、究極合体魔法、

ラグナロク

神々の終焉　！

全ての属性魔法が混ざり合い、輝く虹の奔流となって、アドバン
スドスリードラゴンを襲う。

同時に、それを魔力の息が迎撃する。

純粹な魔力の波と、僕が魔法に変換した魔力。
はたしてどちらが上か――。

数十秒が経った。

「何iiiiiiii?」

僕の魔力の奔流は止まることがなかったが、ブレスの方はそうはいかない。『息』と付いているだけあって、いつかは息切れを起す。

その時まで僕の魔力は相殺されなかった。今回の勝因は、純粋な魔力としての強さと、相手の弱点を上手くつけたところだろうか。

とにかく、僕の魔法によってドラゴンの頭部は吹き飛ばされた。

そう、世界で最強と噂されるドラゴン相手に、僕は勝つことができたのだ。

奇跡が起きたとしか思えない――が。
世の中そう甘くはなかった。

またもや数多くの殺気に包まれてしまったのだ。

「もう！今度は何だよ！て言うか衛兵遅いな！」

最後は責任転嫁してみるが、それも虚空に空しく響くだけだった。山に跳ね返ってきた僕の声が、より一層わびしさを演出している。

改めて辺りを見ると、二百体ぐらいのフェンリルが、僕とセリアを取り囲んでいる。

アドバンスドスリードラゴンの心臓にある竜玉は、オリハルコン

よりも魔法との相性がよく、優秀な魔道具になるが、世界に三個しかないうえ、手に入れるのがこの上なく難しい。

一つの国家に売れば、一生娯楽と衣食住には困らないだろう。

だがそれを獲りに行くことすらできないようだ。

僕一人なら、ホントに最強の必殺技を使うこともできるのだが、今はセリアがいる。彼女まで巻き込んで殺してしまうのは本意ではない。

彼女を回収しに行きたいが、そんな隙はないようだ。

ということは……………

「全部倒すしかないってか！」

第5話（後書き）

ども。次話でひとまず区切りができますが、一章目はまだまだ終わ
りません。
なにとぞ、お付き合いください。

第6話（前書き）

どうも。これでいったん戦闘は終わるはずですが、
第一章目は終わりませんので、お付き合いをお願いします。
まだまだ

第6話

「あーもう！厄日だ今日は！」

どもー。只今絶賛戦闘中です。

僕が普通に刀を一回ふるっただけで、二桁に届くであろう数のフ
エンリルの首や手足が宙を舞う。
それぐらい密集しているのだ。

「トルネード！」

僕を中心とした、大規模な竜巻が発生する。

首や手足を失ったフエンリル達が、勢いよく天に上って行く。

「ハルマゲドン」

今度は、僕の足元を起点として、震度八ぐらいの地震とともに、
全方位の地面に亀裂が走る。

だが、それも飛び越えられたりしてあまり効果がなかった。

「一応これも究極魔法なんだけどな！」

しかし叫んだところで、魔獣であるフエンリルには届かない。
今までにかたづけたフエンリルはおよそ三百体。
だが、見た目的にははじめと同じぐらいいる。

「どんだけ居るのこの森には！」

少しでも隙を作ってくれば、セリアを回収して、必殺技を使えるのだが……

「うん、ここは……」

ラッキー！セリアが目を覚ましたようだ！

「何これー！全部フェンリル！？いやああああ死ぬつつつつ」
「！」

クラクラキューバタン

あ、また気絶した。

「どんだけ気絶好きなのあいつ！」

「ガルルルル！」

——愚痴を言っている暇もないようだ。

「何とかしてあいつを回収しないと！」

転移の魔法をあいつにかければ、そのまま家へ送り返せるのだが、少しでも攻撃の手を休めれば、即座に僕があのだ世行きだろう。

僕が知る限り、この状況を打破できる方法は一つしか知らない。
だがそれは、まだ僕も使えない――！

「だがやってみる価値はありそうだな！」

――闇系星斬流第四ノ型、人形分刀！

「おおっ成功した！」

「やったな！」

もうわかりだろうか。この技は二人に分裂する刀術。
本来なら、二つに分裂して見えるぐらいのスピードまで、己の速度を引き上げる刀術なのだが、今回はそうやってできた『分身』と

いう概念を、闇の魔法で命を吹き込んで魔獣化し、今僕がそれ操作しているわけだ。

分身だから、魔法の力量とかもすべて同じ。

「相棒！少しの間、ここは任せた！」

本体である僕は、フェンリルどもの相手を相棒に任し、セリエの元に駆け寄った。

「スプラッシュ
水撃」

バシャッ

丁度顔面にかかった水は、セリエを起こすのに十分な威力を持っていたようだ。

「つ、冷たっ！あ、シレン？あんたがやったの？」

「いいから早く覚醒しろ。寝ぼけてんじゃない！で、一つ聞くが、このままここに残って戦いたいのか、もう帰りたいかどっちだ？」

これを聞かずに勝手に送り返したりしたら、後でさんざん話をねだられた後に、何時間も説教を食らう羽目になるから、勝手に転移させるわけにはいかなかったのだ。

「決まってるでしょ！戦うわよ！」

こう答えるのも予想のうち。

「じゃあ、一定時間防御よろしく！全方向に、高さ、半径三メートル円柱状の障壁を張っておいて！」

「了解！」

セリエとともにもう一体の相棒の方に駆けていく。何で二人シレンがいるの？などと突っ込まなかった辺り、こいつも成長したなあ、なんて思ったりも……

「シレン！何であんたが二人もいるわけ？」

「……しなかった。」

「いいから後！味方には違いないんだから、説明している時間も惜しい。早くシールドを！」

「はいいいいっ」

後で聞いたのだが、この時の僕の顔はものすごく迫力があつたらしい。

あのセリエが素直に言うことを聞くなんで、珍しい……。

辺りにシールドが張られたのを確認して、僕は魔法の準備に入る。

この複合魔法を発動するためのレシピは以下の通り。

ハルマゲドン

グラビティ・ボール × 2

堕天使の業火

聖光の奔流

紫電ノ蛇

はい、約三分で出来上がり！

「もう戻っていいぞ相棒。行くぞ！ スターダストレイン 星屑ノ雨 ！」

ここから周囲三百メートルに、ハルマゲドンによってひび割れた地面の欠片を、グラビティボールで包んで宙に浮かびあがらせ、聖光の奔流とグラビティボールによって、下への落下速度を加速し、炎と雷を帯びた隕石として、近くの敵を一掃する範囲魔法。

神々の終焉が一定方向のみなのに対して、こっちは全方位的に敵を一掃することが可能。

ついでに、僕よりも三メートル離れたところにいる仲間も巻き込んでしまうのだが。

だからさっき、三メートルの範囲にシールドを張って、その中にいたフェンリルを始末した後、誰も近くによってこないようにしておいたのだ。

「さあて、帰ろうか」

もちろん竜玉を手に入れた後、下位のドラゴンの鱗を何枚か剥ぎ取って、何故か傷だらけでやってきた衛兵たちの先頭にいた、ガウスに渡す。

「なあ、この人たちどうしたの？」

「ああ、なんでもさっき隕石がバカバカと降ってきてな。それに運悪くあたりそうになって、慌てて飛びのいたら、仲間の剣にあたっちゃったりとか、馬に轢かれたりとか、隕石がかすっちゃったりして、それぞれに怪我を負ったんだよ。まったく。あのドラゴンがこんな魔法を使うなんてなー」

「あ、あはははははー。実はあの後、アドバンスドスリードラゴンにも出会っちゃってね。しかもその後にもフェンリル六百体の群れにも出くわしたしね。その魔法は、アドバンスドスリードラゴンが使ったやつでしょ」

セリエがジト目でこっちを見ているが、気にしない気にしない。

ちやつかりポケットに入れた竜玉を、杖に嵌め込んでいるのを見て、ガウスがまたぎゃあぎゃあと呼ぶだろうし、また嫉妬の嵐にさらされることになるのだろうが、気にしない気にしない。

「さ、帰ろうかガウス。衛兵さんにはもう用がないから、後始末でもしていつてもらおうよ」

何気にひどい発言をした後、僕は衛兵隊長と思われる人に声をかける。

「すみません、今回の事件を解決したのは、全てあなた方の手柄だということにしておいてください。僕たち二人だけで、フェンリル六百体と、ドラゴン二匹倒したなんて、無駄な噂を広めたくないの
で」

すると衛兵隊長は、何やら驚いたような顔をしていてが、「それが君の望みなら」と、引き受けてくれた。

「さ、これでここに用は無くなりました。この度は本当にお世話になります」

そういうと、僕はガウスとセリエにも魔法をかけ、学校に転移した。

いやー。やっとこれで平穏な日曜日に戻れる。

ところが、「こんな遅くまで、黙ってどこに行つてたの！！！！！！！！！！」と怒られる羽目になった。

人助けして怒られるなんて割に合わないな、と思いつつ、自分の手柄にしなかったことを、少しだけ後悔した。

でも、竜玉を見せたら、素直に納得して、大喜びで杖を作りに行ってくれたんだよね。

姉さんは、羨ましそうな目で見てたけど、二人分はないんだよね。だから後で、アドバンスドスリードラゴンの鱗で作った装飾品を、プレゼントすることしよう。

第6話（後書き）

いやー。自分でも書いててわかりますが、自分は本当に戦闘シーンとか情景描写とか、キャラクターの心情描写とか、普通のシーンとかが苦手ですね。

ですがこれにも深い事情が（以下の言い訳は省略）

ああああ、石を投げないで！魔法なんてもってのほかだよ！平和的に、解決しましょ・・・・・・・・

シレン「全く。もう少し僕をいい目にあわせてほしいなあ。困難ばかりじゃ身が持たない」

以上、こっそりもっとひどい目にあわせてやろうか、と思っている作者でした。

第7話（前書き）

ども。学校のPCから投稿しています。
いつもどおり駄文ですが、楽しんでもらえれば幸いです

第7話

あれから数日後。

僕は新しい杖を使って、有意義で平穏な毎日を過ごしていた・・・
・・・訳じゃない。

何でお前がこんなものを持つてるんだとか、やっぱりお坊ちゃん
は良いよな、とか、まさかお前が倒してきたんじゃないだろうな、
だとか、果てには「それよこせやー」といつてくるような人間ばっ
かりで、いい加減うんざりしているところだ。

そんなのは来る度に、新しい杖の使い心地を試す、実験台になっ
てもらっていた。

一人は、竜巻の中に放り込まれて、他の一人は炎に囲まれてもら
い、他にも光の奔流をぶつけたりとか、地割れを起こしてその罅の
中に閉じ込めて、その周りを熱して蒸し焼きにしたりとか、軽く感
電させたりとか、いろいろとやらせてもらった。

それだけやって誰も死ななかったのはまあ不思議なのだが、それ
は彼らも（低レベルとはいえ）魔術師だからだろう。

いくつか新しいコンビネーション魔法を考案して、今の時刻は夕
方。自宅で刀術の修練中。

もうすぐ開催の、「魔法学校対抗戦」の準備期間だから、選手以
外は早く帰れるのだ。

去年はまったく目立たずに過ごしていたから、出ることもなかつ
たが、今年はそうも行かないかもしれない。

ていうか、最上級生の姉さんが、二種目に出るということだから、僕も期待されてるのだ。

もっとうと、「お前も出るゝ我が家の名前に泥を塗るなゝお父さんは出てほしいなあゝ」ってな感じの目線で見てくるし、姉さんはなぜか僕を選手として推薦している始末。

行つ競技は三つ。

一つ目は、『スカイ・ボール』そのまんま、^{フライ}飛翔 を使って宙を舞い、バスケットみたいな競技をする。一チームは六人でリーグ戦。これは敵に重傷を負わせた時点で失格。

ルールは、筭のない『クイ。イツチ』って感じで、お互い宙に浮かんでいるゴールポストにボールを入れれば得点が入り、そのための手段は、アメフトみたいにボールをとにかく奪われなかったらOK。

一回のゴールで十点が入り、百点差がついたところでゲーム終了。

二つ目は、『アイスクラッシュ』。二つのテニスコート三倍分の陣地に、直径二メートル、高さ五メートルの円柱の氷を並べ、相手の陣地の氷を魔法で全部壊す、倒す、溶かすのいずれかをすれば終了。

自分の陣地の氷柱を^{ひくい}防御するのはありだが、一度置いた位置から動かすことは不可だ。個人競技のトーナメント戦。これは、相手を殺さない限り魔法をぶつけてOK。

三つ目は、『スペル・バトル』。これは三対三で戦う、チーム戦だ。とにかく、同じフィールドにいる全ての敵チームの中で、生き残った人がいたチームが勝ち。

要するに、魔法ありのサバイバルゲーム。バトルロイヤル形式で、

同時に六つ全ての学校のチームが戦う。

これは相手が死ぬこともあるが、全て自己責任。というものすごいルール。

だからといって責められる事がまったくないとはいえないので、防御魔法に優れているのと、攻撃、治療のパーティで挑むのが普通だ。

ま、僕には関係ないのだが。

そのとき、玄関に担任の先生がやってきていたのには気づかなかった。

だから、先生と両親が長い間話し込んでいたのも、この日は全く知らなかった。

もし知っていたら、確実に何としても会話を邪魔しに行くぐらいのことはしただろう。

だから次の日、学校に行って気絶するほど驚く羽目になった。

それは三時間目の魔法理論の授業が終わり、昼休みになったころ、僕のところに、担任の先生がやってきて、「シレン君。ちょっと来なさい」って言われて、内心冷や汗をかきながら、滅多に僕たちは入れない、「接客室その1」に連れて行かれた。

——誰だつてさあ、突然先生に、連れてかれたら驚くよね？べ、別に何も疾しいことをしてなくてもさ？

着くなり、僕は先生に頭を下げられた。

「すまん、お前を『アイスクラッシャー』と『スプリングバトル』の魔法学校対抗戦の代表選手として登録させてもらった」

……もし元の世界に帰ったら、今年が厄年じゃなかったか確認しよう。

そう固く決意した僕だった。

別に、この申し出事態は意外ではなかった。何故か？ここらでアドバンスドスリドラゴンが倒されていたのは周知の事実。

そして、その竜玉を使った杖を持った生徒が、その死骸が見つか

った三日後ぐらいに現れていて、その生徒が攻撃魔法に関してはぶつぎりの成績を誇っていて、ちょうど問題の日に不在でアリバイがなかったら、誰でも少しは疑うだろう。

んで、僕の両親に聞き込み兼、もともとそんなことが無くても大会に参加しないか持ちかけるはずだったのでその報告に行ったら、僕が出ていく直前にセリアが来ていたことを聞き、彼女に聞いたところ、ぺらぺらと喋ってくれたそう。

今度は内心、今日の四時間目の対人魔法の訓練と体育のスカイボールの時、懲らしめてやろうと決めた。

「———という訳だ。もう決まってしまったことだから、事後承諾で悪いが、出てくれるな？」

「ちょうど大会の日に病気になっていいですか？」

「この大会に出なかったら、お前の両親が、剣と魔法で徹底的にお前を扱う様だ。しかも、成績も滅茶苦茶下がるぞ。これは他の先生も協力してくださる。それでも良かったら病気に罹っていいぞ」

うっわ。容赦ねー。何かこの先生、あの神様に似てるような・・・

『ピンポン！僕がこの人に移っ』

第7話（後書き）

今日は試験がボロボロでした。

平均点が十点近く下がってしまい、落ち込み気味です。

文章に支障が出るかもしれませんが、もともと駄文なので許してください。

第8話（前書き）

どゝも。今の時刻は午後十一時。
ギリギリ間に合いました。

第8話

僕がまんまとインチキ神様（あれ以来勝手につけた名前だ。神様って言うには軽すぎる）の計画に乘せられたあと、数日が経って、大会まであと二週間を切りました。

僕と大会に出るメンバーは〇〇さんと、〇〇君。
さて問題。ここの〇〇に入る名前は何でしょう？

正解は、セリアとガウス。

はあ……あの時の騒動は今でも思い出すたびに頭が痛む。

僕が話を終えて帰るなり、さっきの二人に囲まれて、十分以上の尋問（もはや拷問に近かった……）を受け、ついに耐えかねた僕は、ついに口を割った。（さっきのインチキ神様、また乗り移ったんじゃないだろうな？）

そして、先生に相談に（自分たちを売り込みって言うかねじ込み）いって、僕と同じチームならってことで、許可された。

ただし、選手と対決して、だったのだが、二人だけで一瞬にして敵を打ち破ると、あっさりと試験に合格してしまった。

さっきの三人は、もはや完敗だったので、理不尽な二人に怒る気すらないらしい。

僕の方から後で丁重に謝罪して、何とか事なきを得た。

「よっしゃ！俺も試合に出られるぜ！」

「あたしも！今度はシレンばかりに良いトコどりさせないからね！絶対優勝よ！」

「頼むからやめてよ………迷惑だけは掛けないでね」

ちえ。やる気満々のこの子たちを追い払うのも難しいだろうし、最悪、僕一人で戦えばいいだろう。

セリフとセリフの間の不自然な間は、考えていたからで、決して二人の眼力に気圧されたからではない。

——
ホントだよ？

「「もちろんさ！」」

「……基本的に、僕が退けって言ったら退くこと。その他の指示もしっかり聞いてね」

「「はい」」

はあ……。あまり信用できないけどいいか。そこまで疑っていても楽しくない。もっと楽しもう。

ちなみに、この二人となら、あまり連携の練習とかも必要ではないだろう。

いや、逆に必要かもしれないが。

というわけで、色々と不安を抱えたまま、二週間が過ぎ。
とうとう大会の日となりました。

僕はここで、とある任務を果たさなければなりません。

なのに、お邪魔な雑魚二人が、四六時中後を金魚のフンのようについてきます、ちょっと、リアルエスケープしてもいいですよね？

—— おふざけはここまでにしておいて。

さすがの僕も緊張する。だってこの世界に飛ばされるほどの任務って言ったら、どれぐらい危険で、重大な任務ミッションなのか分からないだろう？

それには、誰も巻き込みたくない。自分以外に解決できる人がいるとは思えない。

だから、僕はこの普通なら一週間はかかるこの試合を、僕の手及び範囲全て、一瞬で片をつける。

この日のために、開発した魔法が、二、三ある。

それを使いまくってやろう。

ちょうどその時、試合会場の高台から、威勢のいい声が上がった。

「では、これより、第六十三回、魔法学校対抗戦を始める。皆、盛り上がって行くぜえええええええ！」

「おー！」

第8話（後書き）

今回は、閑話というようなものですだからとても短くなりました。

—— 言い訳じゃないですよ？別に時間がなかったから短くなったとか、そういう事情じゃないですからね？

すみません。完璧な言い訳でした。orz

第9話（前書き）

楽しんでもらえれば嬉しいです。

第9話

さあて、いよいよ始まった魔法学校対抗戦。

僕の出場するアイスクラッシュとスペルバトルは、明日予選があり、今日一日は、スカイ・ボールを観戦してられる。

姉さんが初めて出場するのは、午前十時から始まる予選の第二試合。

それまでは、大人しく観覧席で、作戦でも練りながら待っておこう・・・・・・・・・・と思ってたのだが。

大方の予想通り、あのガウスとセリアがおとなしく待っていてくれるはずも無く、今は練習用の闘技場で、模擬戦の最中だった。

闘技場と言っても、魔法によって、変化させられているから、見た目的には鬱蒼と生い茂った、森の中に立っているようにしか映らない。

で、そんな中で、『ガウス・セリアチーム』と対戦しているのだ。

こっちのやる気はゼロだし、向こうは異常にハイテンションで、騒がしいことこの上ない。

だから、今の状況は静かなだけマシとも言える。

僕にやる気がないのは、殺してもOKというルール上、無茶に突っ込んでいる輩が多いと予想され、僕の魔法ではそいつらを傷つけ

ずに撃退するのは難しいからだ。

風属性と水属性、そして光属性以外の火、土、闇の三つ、そして他の魔法では殺しかねない。

風なら球状に纏めて、ぶつけて吹き飛ばす方法が採れるし、水属性では溺れさせない限り死ぬことはないだろう。光なら目くらましに使うて、その後、手刀とかで気絶させて退場してもらうことができる。

が、そこまで精密なコントロールが僕に可能かと言うと、あまり自信がない。

そして、僕の魔法は基本的に相手を致死状態に陥れるような強さの攻撃魔法が中心だから、魔法で刀を作ったりして使うことは不能。

もともと刀などの持ち込みは禁止されてるので、万事、億事休すだ。

最近編み出した魔法で、何とか戦えるだろうが、心配は尽きない。

訓練できるのはいいのだが、失敗するかもしれない練習はできないからあまり意味はない。

嗚呼……もう今の時間が見える？九時五十八分だよ。

帰る時間も合わせると後五分以内に終わらせないと、姉さんの試合に間に合わない。

——何としても、後五分以内に終わらせる！

「出てこい！ 魔法探知！」

闇属性の探査魔法。魔法のかかったものや、魔法使いを探し出す。術者の魔力によって索敵範囲は変わるが、僕の場合、闘技場ぐらい余裕だ。

僕の眼には、はっきりと二人の姿が『視えた』。

「飛翔！」

言下に、僕の魔法に捕らえられて、ジタバタしている二人と、僕は宙に浮かんでいる。

「姉さんの試合があるんだよ。だからさっさとケリをつけようね？」

少し声に怒気をにじませて言い、新しく開発した魔法、ディゾルブシリーズのうち、第一ノ術 ボイス を発動する。

とたんに、二人の口がぴつたりと閉ざされ、声帯が震えなくなつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！（な、なによこれ？）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！（なに？ま、魔法が使えない！）」

「さてと、オシオキの時間ですよ？」

ディゾルブシリーズ第三ノ術、マジックパワー

魔力を奪うこの魔法は、滅茶苦茶効くと思う。

先ほどのボイスと加えて、この二つはいわゆる魔法封じの術。

その後、お仕置きは後ですることとして、（あ、ついでに彼女等に掛けていた僕の魔法も失われてしまったから、二人は仲好く地上に落下したせいでもある）僕はさっさと会場に戻って行った。

——この時、もう少しここに残っていたら、後に起こる事態は少しでも改善されていたかもしれないのだが、それはまだ誰にも分らなかった。

第10話（前書き）

ついに二桁突入！

そしてまだ、毎日掲載が続いている！

第10話

「ふっ。何とか間に合ったー」

地上に落下して意識を失っている二人を引きずって会場まで戻ると、ちょうど姉さんの名前が呼ばれて、選手の入場が行われているところだった。

僕の学校の選手団のユニフォームは紫色。金色に縁取られた、ドラゴンとフェニックスをモチーフにしたうちの校章がよく映えている。

メンバーも、皆容姿端麗で、全員女性だった。ま、これは女子スカイ・ボールだから当然だけど。

中でも一番観客の視線を集めているのが、なにを隠そう僕の姉だった。

とびきり目立つ容姿と、最上級生らしい堂々たる態度に、他の学校の生徒まで、手を振って応援している始末だ。

中には、即席の横断幕まで振っている人までいる。え？その隣にあるのは、光魔法で出した文字が。

『マリアさんLOVE』

うーん。何処の世界にもキモチ悪い人種っていうのはいるんだな

あ．．．．．。

「さあ、試合開始だああああっ！3、2、1」

蒼天に大きな笛の音が鳴り響き

「START！」

試合が始まった。

敵は赤色のユニフォームを着た、第一魔法学校（うちは第六だ）。分かるかもしれないが、第一が赤、第二がオレンジ、第三が黄色、第四が緑、第五が青、第六が紫だ。

それぞれの選手がユニフォームを翻し、蒼天に舞う姿は、結構見ごたえがあった。

そして、審判の笛とともに、ボールが宙に放たれる。

事実上、今から試合が始まるのだ。

「風撃！」

さっそく魔法が飛び出して、敵チームの一人を襲ったが、まだまだ初級魔法で倒されるほど消耗してはいない。

しかし本当の狙いは、相手が避けた先にあるボールを巻き上げて吹き飛ばす、というものだった。

そしてその先には、仲間の選手がいる。

「さ、頼んだよ！」

「まっかせてちょうだい！」

しっかりボールをキャッチしたその選手は、そのままゴールに突っ込んでいく。

「ゴオオオオオオオル！」

さあ一回目。

まだまだ気は抜けない。ま、僕はもうぐにやぐにやにリラックスしてるけれども。

だってあの二人を大人しくしたんだ。少しは休んだって罰は当たらないはず。

そんなことを考えているうちに、僕のチームが三回、敵が一回得点していた。

そして今ボールを持っているのは、先ほどから活躍している僕の姉さんだ。

もはやファンクラブができるんじゃないかっていうほどの人気ぶ

りだ。

しかし、今改めて見てみると、普段と比べて姉さんの動きが悪い。というより、他のメンバーも若干何か苦しそうだ。

だがそれは今日の気温とかのせいではないだろう。なぜなら、敵はいたって平然としているからだ。

僕はまたハリー・ポッターの小説を思い浮かべていた。そういえばあれでも、誰かが魔法をかけていた……。

何やら不吉な予感に襲われた僕は、選手を含めた第一の応援団の様子を見る。

すると、コーチと思しき人物が、赤い色の応援団の女の子たちに囲まれて、にやりと笑いながら、僕たちのチームを眺めているではないか。

「なあシレン。なんだか怪しい気配を感じるんだが」

声の主は、この試合を見学しに来た、エドワード兄さん。妹も来ているはずだ。

「僕も気づいてるよ。きつとあそこのコーチっぽい人が怪しいと思うんだけど」

探知魔法で彼の方に意識を伸ばしてみると、そいつの魔力の動き

はよく見えた。

使っている魔法は・・・・・・・・・・

――
侵蝕？

侵蝕は、上級毒系魔法で、複数の対象を選び、その体内を任意の効果を持つ毒が、体内を侵蝕していくという恐ろしい魔法だ。

今回の毒の狙いは 衰弱死 。体力や精神力をどしどし削り最後には死に至らせる、拷問や戦争の化学兵器の代わりに使われるようなものだ。

とても、他のことに集中している学生に掛けるようなものではない！

「これは見過ごせないな。ディゾルプシリーズ、魔力！」

これでそのコーチの魔力はゼロになり、僕に流れ込んでくる・・・
・・・はずだったのだが。

僕に流れ込んでくる魔力はなく、しかも対象の人物は、驚くべき行動をとった。

こっちを見てニヤツと笑って見せたのだ！！！！

おそらく、僕に解決してほしい問題っていうのは、あいつに
している。僕はそう直感した。
それと、紫色の何かが、地上に落下していった。

僕の学校のチームの選手だ！

慌てて空に目をやると、僕の姉さんはまだ可憐に浮かんでいて、
慌てて駆け付ける途中だった。

まだ試合中断のホイッスルは鳴っていない。ニヤニヤ笑いながら、
第一の選手が三回連続でゴールを決めているところだった。

得点は、第一が九十点、第六が五〇点。

あ、またゴールが決まった。

「試合中断！選手の型はいったん控室に戻って下さい！」

やっと審判も事情を飲みこめたようだ。慌てて笛を吹くと、選手に退場を命じた。

あの魔法は、すぐに対抗魔法を打ち込まないと、意識不明になって、そのまま死に至る。

命の期限は、意識を失ってから五分間。

それを超えると………終わりだ。

今、経過した時間はおよそ三分五十秒。僕が出しゃばって行くわけにはいかない。そうすれば、というつめられている間に、残りの一分なんてすぐに経過する。

だから僕は、ここで何もできずに他の多くの観客と一緒に、このイレギュラーな事態を眺めているだけしかできないのだ。

今頃あいつを殺しに行っても、もう魔法の進行は止まらない。

僕は無駄なこととはしない。しかもこの状況でそんなことをしてられない。

。 なんとか、此処から聖系の対抗魔法を打ち込めないだろうか……。

僕は、自慢じゃないが精密なコントロールが苦手で、破壊力重視

だから、そんな繊細な魔法は扱えない。

姉さんなら余裕だろうけど、今は取り乱していて、しかも控え室にいる。

どうすれば・・・・・・・・どうすればいい？

ここには確かに魔法使いが多い。でもあんな上級魔法に対抗できるほどの実力の持ち主はそうそういない。

やはり僕がやるしかないか・・・！

「蘇生 解毒 身体強化 デイズルプシリーズ 病毒 」

どれが効くだろうか。解毒系の魔法、死人や死にかけの人間を蘇生させる魔法、体の能力を強化して、もとの抗力を高める魔法も打っておく。

「頼む・・・・・・・・効いてくれ！」

数十秒が経ち、効果を表さないまま、タイムリミットを迎えた。

「く、くそ――っ!」

僕は、思わず泣きそうになっていた。

が、泣いている暇があれば、敵討ちに向かう。それがこつちに来た時に（赤ん坊の頃、することがなかったから）自分の知る限り、同じような立場人間の欠点を克服しようと心に決めていた。

そののひとつは、「何時までも仲間の死や重い病気や怪我に対しても、何時までも悲しんでいて、敵を逃がさないこと」

だが、さっきの男の姿はすでに消えていた。

「なんで、何で僕はこういうときにちっとも役に立たないんだ！！！！！！」

最強の魔法を与えられているはずなのに、肝心な時には役に立たない。

最強のくせに、これじゃあ最弱と変わりないじゃないか！！！！！！

僕はその場にいることができず、目を腕で覆いながら、自分に割り当てられて部屋に駆けこんで、しばらく泣き続けた。

第11話（前書き）

今日は少し短めです。明日纏めて更新します。
とりあえずな感じで、いつもより駄文ですが失礼します。

第11話

悲惨な夜が明け、また一時中断されていた試合が再開された。

もちろん、何も変化がなかったわけではない。

あれから僕は、即あのコーチを探しに行つて、暗殺しておいた。星斬流を使う人間にとっては、音を立てずに走ったり、部屋に忍び込んだりと言つたことも簡単なのだ。

一応、死体ごと抹殺しておいたので、当分見つからないだろう。粉末と化した成分を詳しく調べて、やっと判別できるかどうか。それもこの世界の技術じゃ無理だろうけど。

元の世界でも、これならDNA鑑定されたって分からないだろう。

それと、僕たちの学校を含めた全ての選手のユニフォームが、それぞれの色から漆黒の喪服に変わった。

もちろん、選手ではない僕たちも、その例外ではなく、黒以外の服は認められず、他の色のは、魔法によつて黒色に変えられていた。

そして最もダメージが多かったのが僕の学校の代表選手たちだろう。人数が一人減っただけでも、十分不利になるのだ。

そして代表選手の中に、スカイボールチーム以外に飛翔の魔法を使いこなせる女子はいない。

で、選ばれたのが……

「何で僕の妹なんだよ……？」

「だって、うちのリーダーの妹さんやん？ほなやつぱり才能もあると思うし、見栄えもいいし、飛翔も使いこなせるみたいだし、これ以外にいい人がいるわけないやんか」

全く、此処まで来て関西弁を聞くことになるとは思わなかった……じゃなくて。

「いや、それはわかるけどやつぱり心配で。昨日あんなことがあったばかりなのに、自分の妹が出ることになったらそりゃあねえ」

「あら？お姉さんも出るんよ？それに少しはうちらのことも心配してえや。立場的には、あんたの妹さんとおんなじやでえ？」

「今までに、対処法を練習しているか否かの違いが大事なんです！」

「今回は、今まで以上に警備も強化されているみたいだし、むしろ安全じゃない？いいやんか、な？大体、本人も出たと言って言っとるし」

「う・・・・・・・・・・・・・・・・」

ついに言い訳が尽きた。完敗だ。僕はハンカチをひらひらと振りたい気分だった。

別に僕は過保護でもシスコンでもない。が、あんな事故の後で心配するなと言う方が無茶だ。

「分かった。姉さんや兄さんもいいって言ってるんなら、いいんじゃない？ただ一つ条件が——」

「なんや？言ってみ？」

「競技場の警備には、僕も参加したい。一応、観客席よりも近い応援席で見させてもらってもいいかな？」

「別にええけど。でもなんでそんな？」

「昨日……」

それから、少しうつむき加減で、僕はポツリポツリと、昨日起こったことや僕にできなかったことなどを話し始めた。

もちろん、人を殺したなんてばれたら即刻、この試合が終わった後に行くのは、教室ではなく牢屋になるだろう。

だから口止めはしっかりしておいた。が、さすがに僕の小学校の時の友人、度量が大きい。

彼女の名前はエミリア。名字やミドルネームはない。この国では、そんなものを持っているのは貴族以上の身分の者だけだ。

ごく一般民の彼女はもちろん持って無く、でも魔法の才能だけは昔からすごかった。

セリアと並んで容姿も抜群で、黒目黒髪の、日本風美人だった。

しかし、何故か昔から大阪弁。理由は本人にもあまり分からないらしい。

そして、中断されていた試合が開幕。最後の得点、九〇対五〇のまま開始される。

最後の五分間に決まったシュートは無効にしろとの声もあちこちから上がったが、第一側はいたって平然と無視していて、『あんな状況でもプレイできるか、それは精神力における勝負と等しい。だから文句をつけられる筋合いはない』ってよ。

「おおりゃーーーーー！」

しかし、亡くなったセルフィー選手の思いを継ぎ、弔い合戦とするため、僕らのチームの士気は高い。

鬼気迫る表情で怒濤の攻撃をし、防御は捨て、第一校がひるんでいるすきに、さっさと同点を超え、五〇点のリードを奪った。

紫の線が走った漆黒のユニフォームが昨日から持ちこたえた蒼天を舞い、次々にゴールを決めていく。

そして、何やら敵の間で目配せや合図が交わされたかと思うと、最悪の事態がやってきた。

「きた！」

そう、敵選手の一人が空中で停止し、自分を起点に、全方位に短い雷を持続的に発生させる魔法を使ったのだ。

その名も、そつらんじいぐ葬電の地獄。雷系の上級魔法の一つだ。範囲は狭いが、そのままフライで飛び回って、誰かに抱きつくくなりなんなりして密着すれば、かなりのダメージを与えられる。

そして、その魔法の犠牲となったのは何を隠そう、僕の妹だった。

第11話（後書き）

なんとか、相応の長さのが書けた・・・！

第12話（前書き）

遅くなって済みません。いろいろと事情がありまして、投稿できませんでした。

——決して、忘れてたわけではありません。

では、どうぞ！

第12話

「やめる——！！！」

僕はそう絶叫して、魔法を発動したそいつに、攻撃を仕掛けようとした。

が、ルール上、まだ問題はない上に、この前の事件で、外部からの魔法を防ぐ結界が張られていて、手出しできなかった。

今回の大会からルール変更で、すべてのゲームにおいて、殺害はもちろん、重度の怪我を負わせただけでも、違反となるようになったが、まだ攻撃していない段階では、何の規律も犯していない。

ただあの魔法でダメージを受け、重症だと判断されてから救助に向かったも、間に合わないのが実情だ。

あれは連続して雷が襲うため、一秒の遅れが命取りになる。防御結界を逆手に取った、緻密な計画だろう。

おそらく、あの選手はまともではあるまい。誰かに洗脳されているか、この大会に紛れ込んだ何かかもしれない。

まだ正体はつかめてないが、今回僕に課せられた任務とも、無関係ではないだろう。

運のいいことに、相手の狙いに気付いた妹は、飛行を解除して、地面にストールすることによって、回避した後、迎撃に移る。

そのまま、自分に近づく相手の体感温度を下げ、コールド・スリープ冷凍催眠状態にする、ニブルヘイムを発動したセルフアと、葬電の地獄状態の女子が空中で交差する。

「やるわね！」

「あんたこそ！」

飛翔を使つて空に浮かんでいる二人は、下で行われている競技のことなど忘れ去った様子で、お互いに睨み合っている。

そして、弾かれたボールが自分たちのところに向かってきたとき、まるで示し合わせたかのように両者が同時に動いた。

――――

敵の中の一人…確かシルビアさんだった。

彼女が私の方を向いて、魔法を発動させていることには気づいていた。

葬電の地獄 が発動する前から、狙いは私だとわかっていたから、迅速な回避行動をとることができた。

そして今。

向かい合っているシルビアから、どこか人間離れした魔力の波動を感じる。

そう……まるで妖魔か何かのような。

「やるわね！」

そんな思考に氣を取られていると、突然声がかかった。

「あんたこそ！」

こいつの狙いは私一人。なんでかはわからない。相手が何者で、どんな力を持っているのかもわからない。

——それでも、私はこいつを倒さなければならない！私を推薦してくれたチームメイトに迷惑はかけられない。私一人の力で、退場にならない程度の魔法で、こいつを倒すには……

私は、おもわず齒ぎしりしていた。自分の持つ魔法の中で、重傷を負わずに敵を排除する魔法はない。

マリア姉さんやシレン兄さんなら何とか出来たかもしれないけど、最近魔法を覚え始めたばかりの私が勝てるような相手じゃない。

「くそっ！」

両手を前に突き出して、そこに溜めた魔力を雷に変え、シルビアめがけて打ち出す。

しかし赤い残像を引いて動く彼女には一発も当たらない。

「これでも食らえ！」

十本の指先から、小さな魔力そのものの弾丸を連続して打ち出す。

兄さんが言っていた兵器の話を、自分なりにアレンジして生み出した技だ。 ましんがんと言うらしい。

ズダダダダダダダ！

亜音速に近いスピードの弾丸は、全て命中したように見えたが、それはあくまでも彼女の残像にあたったにすぎなかった。

それを証明するモノ、それは残像が収束したところ、自分の目の前で葬電の地獄を発動した、シルビアの姿だった。

「——っ！ニブルヘイム！」

シルビアの纏う雷と、私が生み出し続けている冷気がぶつかった。

今のところ拮抗しているけれど、じりじりと押されている感覚がある。

——このままじゃ、あと十秒と持たない！

必死で打開策を考え始め、集中力が落ちたのが原因か、圧迫されるような感じはどんどん強くなっていった。

何か…何か忘れているような気がする。

「これで終わりよ！じゃあね、セルフアさん！」

そうやって微笑む彼女の顔を見たたん、打開策が思いついた。

自らの魔力の放出を解除し、電撃を食らう前に、さっと後ろに下がる。

『力比べをしているときに、ふいに力を抜くと、相手がバランスを崩して隙ができる。そこに追撃を与えれば、確実に勝てる』

剣技を極めたエドワード兄さんの言っていた言葉。

魔法でもそれは同じこと。

突然の魔法の解除により、風圧に耐えるようにして前傾姿勢になっていたシルビアはそのまま倒れ、その無防備な首筋をさらすこととなった。

「さっきの言葉、あんたにお返しするわ。じゃあね！よい夢を！」

ガッッ

シルビアの後頭部に手刀で一撃を与え、気絶したのか、彼女はそのまま落下していった。

そして、緊張が一気に抜けた私も、同じ運命をたどることになった。

第12話（後書き）

最近書いてなかったので腕がにぶってますねー。
さらに駄文レベルが上がりましたが、お許しください

第13話（前書き）

ども！。もう最近連日更新ができてませんね。
お気に入り登録、ありがとございます。できれば感想もよろしく
お願いします。

第13話

空中での戦闘が終わったのか、名前は知らないが、敵のほうの女子生徒が落ちてくるのを見て、妹に返り討ちにされたことを知った。僕は勇者でも何でもないのに、敵に勝ったら「ははっざまあ！」っと思ってしまう。

だが、そんな事を思う前に、まるで後を追うかのように妹が降ってくるのが見えた。

普段なら、敵も妹も飛翔で普通に飛べるのだから、気絶していると見て間違いない。

それは、地面にぶつかるまで妹には何もなす術がないということ。敵はこの際どうでもいい。どうしてもよくはないが、妹のほうが大事だ。

昨日までなら、ここから妹に飛翔魔法をかければ済む話だった。

しかし今日は、何度も言っているが、結界が張られていて外からの魔法は使えない。

「なんで僕はいつも、こういう肝心なところで役に立たないんだ！ちくしょおおおおおおお！」

そう叫びたいと思ったが、観客席にはほかの客もいる。そしてこ

んなところで叫びだせば、助けることはまずできない。

一瞬でその思考を張り巡らせたが、そんな必要はなかったのだとすぐに気付き、あとで思いっきり後悔した。

なぜなら、あそこにいるのはなにも二人だけではない。

チームのみんなが、黙っているはずがないのだ。

「セルトちゃん！今すぐ飛翔魔法をかけたって！他の皆はまだ試合を！」

「「「了解！」「」「」

今、得点は猛スピードで移動している。

が、既にうちのチームがリーチをかけていた。

一瞬で救出された妹を尻目に、敵の方は、そのまま落下していつて……

——鈍い音とともに、頭から地面に激突した。

もう命はないだろう。しかし哀れと思わない。だって僕は敵に憐れみをかけられるほど性格がよくない。

それより、妹が助かった喜びと、うちの学校が勝った嬉しさで、心がいっぱいだった。

——おかげで、もうすぐ自分の試合だということをすっかり忘れていましたです、はい。

こっぴどく先生に怒られ、予選前の準備が一切できない状態で、スperlバトルに挑む羽目になった。

妹落下事件（これは僕が勝手に命名したもので、セルフアが落下する前に、もつといういろあつたのだが、一番印象に残っているのが『妹の落下』だったから仕方ない）のおよそ十分後、僕はスカイボールを競技場を離れ、目隠しをされた状態で、どこかわからないフィールドに連れて行かれた。

殺すのはなし、重傷を負わせるのもなし、僕にとっては結構きついルールと化したこの競技の予選は、やや遅れて始まった。

「では、これより、スペルバトル、予選を始める！ルールは簡単、先に全員が脱落したチームから順にフィールドから撤退してもらい、残り三チームになったところで試合終了だ。ではいくぞ……」

— L e a d y、 f i g h t !

この瞬間、獰猛な野獣と化した生徒たちが、広大なフィールドに散りばめられ、一斉に牙をむいた。

第14話（前書き）

感想をお願いします

第14話

ゲーム開始から約三十分が経過した。

今、身を隠しているところ……なんてことはない。

絶賛戦闘中だ。

「おらあ！死にたくなけりやさつさと棄権しろや！」

そう言った言葉の嵐の中、続々と魔法が撃ち込まれる。

炎の玉も、雷も、ほぼ全てを、風の魔法で防いでいるが、いつまで持ちこたえられるかわからない。

——じゃあ、元いた世界では最強の防御と思われる魔法を！

「イージス
全能の盾！」

この前徹夜で編み出した、全ての属性、亜属性に耐性を持つ、最強の盾。

その分、魔力の損失も大きく、あまり実戦向けではない。

今回、僕の魔法の威力は見せない方向でチーム内で決めたので、僕は徹底して守備、他の二人が鮮やかに葬っている。

もともと、こういう敵を殺さない試合は、二人掛かりなら彼らのほうが強いぐらいで、ディゾルプシリーズがなかったら僕でも負けるかも知れない。

というわけで、防御に魔力が足りなくなったら、敵から吸収し、ひたすら守りに徹していた。

「試合終了！」

え？もう終わったの？遣り甲斐ねええええええ！

内心そう思っていたが、とにかく予選を勝ち抜けたので、そのまま部屋に戻って行った。

なぜか二人も付いてきたが、（ああ、暇だ、暇だ）て念を送つてきながら）きれいさっぱり無視することにした。

ドサツとベッドに身を投げ出し、そのまま睡魔との勝負に入った。

一秒と持たずに白旗を上げた僕は、深い眠りに就いた。

鳥の鳴く声で目が覚めた………と言いたいが、両隣の部屋のどちらかが、すぐく煩い歯ぎしりをしていて、まだ太陽が昇っていない状態で起こされた。

「何なんだよまったく。いい加減にしろよなー」

しかしもう一度寝なおすわけにもいかず、そのまま洗面台に向かって、顔を洗った。

「さて、何して時間を潰すかなーっと」

一応辺りに不審な気配がないか探ってみた。

すると、まあ当たり前の結果が出た。

ものすごく強烈な殺気が、僕の部屋のドアの前に立っている。

——あれ？これって普通当たり前じゃあないよね？

そう思った時、けたたましい音と共に、（今日は何か、音を司る神様ににすごく嫌われているみたいだ）この前僕が殺した敵のコーチと同じ気配を纏った、剣士風の男が悠々とした表情で入ってきた。

第14話（後書き）

今日はすごく短いです。見逃してね

第15話（前書き）

ども。また連載復活しました・・・！！
お気に入り登録してくださるのは非常にうれしいのですが、感想も
よろしくお願いします

第15話

「わやややや！」

説明しよう。こんな訳の分からないセリフから始まったのは、前回に引き続き絶賛戦闘中だからだ。

しかも相手が半端なく強い。

星斬流を使うものとしては、他の流派の剣士や武士？に負けるわけにはいかない。

だが、今回ばかりは押されていた。

——え、こんなことやってる暇あるのかって？ははは、リアルエスケープ、準備完了！

「・・・・・・・・」

さっきから戦っている相手は、黒い服に全身を覆われており、まるで忍者を思わせるような風貌で、この部屋に来てからずっと、一言もしゃべっていない。

身体強化 で生み出した俊足で、強引に間合いを取ると、（と

言っても、一般生徒の部屋なんて、そうそう広くもないのだが）彼、もしくは彼女に聞いてみた。

「なんで僕を狙いに来た？」

「・・・・・・・・」

「黙ってないで教えてくれ、僕は君に覚えはないし、生まれてこのかた、誰かに恨まれるようなことをしたことも（少ししか）ないぞ」

「・・・・・・・・」

「シカト？シカトデスカ????？」

「・・・・・・・・」

「なんかリアクションを！」

「・・・・・・・・」

「もう一度聞く、なんで僕を狙いに（以下略、十回ほどリピート）」

「…なんかリアクションを！」

「・・・・・・・・うざい」

「おお！喋った！しかもこの声は……女？」

「・・・・・・・・嫌い」

いきなり抜剣したかと思うと、一目散に斬りかかってきた。

黒い残像を引き連れて走ってくるが、僕の目はまだ捉える事が出来る速さだ。

「まだまだっ！」

右上から斜めに切り下ろされた斬撃を、後ろに身を反らすことでかわし、そのままの勢いでバク転して、一メートルほど後ろに着地。

すかさず来た、今度は同じ軌跡を逆にたどるような追撃を刀で受け、魔法で彼女を吹き飛ばす。

が、すぐにまた姿勢を直され、今度は魔法のお返しがきた！

「さっきのスペルバトルの相手全員と戦うよりも強いなっ！」

第16話（前書き）

どもー。感想お願いします。

最近、駄文が続出してます。そしてなかなか戦闘シーンに入れない

……

というわけで、大目に見てください。

第16話

今、部屋の中ではいろいろな閃光が入り乱れている。

僕の放つ、雷や熱の、深紅と紫電の光、敵の打つ闇と水の筋。

部屋がぐちゃぐちゃになったが、そんなことにかまっている暇はない。

——強い！

部屋中を、爆発音や、空気を切り裂く音、様々な閃光が駆け巡り、手当たり次第に物を壊していく。

ベッドの羽毛布団（季節描写が少ないが、今は一応冬に近いのだ。もつとも、日本と違って余り四季の違いはないが）が破れ、千切れた羽が当たりに舞い、きれいな花が飾られていた花瓶は、元の姿が想像もできないほどに破壊されている。

中に入っていた赤と黄色の花弁が、羽と一緒に宙を舞っている。

風の魔法も発射されているため、それに乗っているのだ。

「くっ！」

「ちっ」

彼女の放った（いまだに敵の正体、名前はつかめていない。わかったのは性別だけ）高出力の雷光が、僕の右足の肉を少しえぐり取ったかと思うと、風圧を纏い、切れ味がさらに増した僕の愛刀が、彼女の左頬を掠める。

もつとも、僕はおろか、彼女も見るからに戦闘慣れしているようだし、この程度では牽制どころか、相手をひるませることすら無理だ。

しばらく二人で激しい舞踊のような戦闘をしていると、敵の魔法が、明らかに弱くなってきた。

「ガス欠か！」

「……黙れ！」

ふと、僕は違和感を感じた。

しかし、それが何なのか、思考の中の糸を手繰り寄せる前に、そ

の糸はブチッと切れた。

目の前に、剣の切っ先が突然出現したら、誰でもそうなる。

——速すぎて、目の焦点補正が追い付いていない？

僕はあわてて上体を反らした。完全に不意を突かれ、勘にに沿った行動だが、どうやら功を奏したらしい。

ちょうど鼻先のわずか三センチほど上を、ぎらつく銀光が通り過ぎる。

「あつぶねえ！」

今までに滅多に使ったことはないが、目に 身体強化 をかけ、一時的に動体視力を上げる。

「よくもやりやがったな！お返しだ！避けられるもんなら避けてみる！」

最近使えるようになった、いわば切り札まだ残されている。

ここで第一のトラブルがあると知ったときから、魔法だけでなく、刀術も練習してきた。

——星斬流第四ノ型、鏡撃刀！

鏡に写っているかのように、同じ攻撃がほぼ同時に同じ位置に二回当たるこの技は、正直、余り強いとは思わない。

だから、この技を避けられるのはまあ予想通り。

「やはりこれは避けたか。だが次はどうだ？」

——星斬流第参ノ型、第四ノ型混合、火水土風闇光属性魔法強化、虹無限花吹雪！

「……ネーミングセンスから直せこの野郎ー！って声がどこから聞こえてきたが、いたって無視。自分でもわかってるよそのくらい！」

また時間があるときにでも、ネーミングを変えてみるか。

さて、この無駄に長い技の名前を持つこの刀術は、その名の通り、衝撃波を出す、鏡撃刀を、同時に何回も発動し、それに全ての魔法属性を付加したものの。

星斬流は、刀や魔法はもちろん、全身どこでも凶器になりうる。ゲ○ゲのオニ太郎さんみたいに、髪の毛飛ばして攻撃することも（理論上は）可能だし、高校生から一気に小学生に若返った探偵さんもびっくりするぐらいの速度で蹴りを放ち、音速を超えた物体が放つソニックブームで攻撃することもできる。

博士の発明品なんかより、こっちの方が圧倒的にすごい！……ちよっと脱線してしまった。

と、とにかく、全身を凶器にできるこの刀術では、武器を使った攻撃を二倍にする鏡撃刀で、全身を一時的に二倍にし、それをネズミ算式に増やし、水の魔法で鏡のような水面をいくつも生み出し、闇魔法にある、実体化の魔法で、それらを人間に変える。

結果。

数千人にも増えた（実体が元々はなかった奴らだし、発動者以外のおそらく心を持つ生き物すべてにとって、実体と同じ意味を持つ幻影か何かなのだろう。同じ位置に何人も重なっていることが可能だということが、それを証明している。ま、もともと魔法なんてほぼ何でもありだしね）僕たちが、それぞれ違う属性（色も違う）の衝撃波を全く同時に放つ。

「……………受けてみる！……………」

気の弱いものだったら、その声だけで震え上がるだろうという大音響で鳴り響いたその叱声は、音の振動で彼女にダメージを与える

という意外な攻撃力を持ち、そのあとにまるで虹色の桜が吹雪いているかのように、彼女のいるあたりを乱舞している。

今すぐにもカメラを持ってきて、「はいチーズ！」なんてネズミが聞いたら喜ぶであろうセリフを吐く暇も惜しんで、写真を撮りたいぐらい綺麗だったが、そんなことはもちろんできないし、敵からしたら、それこそ見とれている暇もないだろう。

そして衝撃波を魔法で変形させ、不規則に舞わせていたが、そろそろ芝居もフィナーレ。

「せめて、名前ぐらいは知りたかったな……じゃあ、あの世でまた会ったときに自己紹介よろしく」

僕が腕を振りおろせば、勝負はつく。

が、僕はやめておいた。

完全に自分の負けを認め、武器を手放し、目を閉じて「さあ、止めをさしてくれ」と言わんばかりの相手に、そこまでするほど冷酷な人間じゃない。

僕が、自分で出しておきながら、言うことを聞いてくれない花弁たちに怒って、同じことをもう一回やって全て相殺したり、そのときの爆風で、さらに部屋が見るも無残なことになったりしたが、それを差し引けば、万事穏やかに解決した。

「・・・・・・・・私の名前は、シエル。苗字はない。」

数十分後、かなり寡黙な女戦士も無事、仲間に加わった。

第16話（後書き）

いやー。久々の長文つかれましたねー

第17話（前書き）

感想をお願いします。

第17話

戦闘の後、シエルが仲間に加わってくれ、自分の身の上を話した。

その前に、どういついきさつで、シエルが仲間になったのかを話すことにしよう。

| | | | |

「なあ、話してほしいことがある。安心して、命を奪う気はない。これ以上僕たちを狙ってこないのなんね」

「……もちろんだ。一度私を打ち負かしたものを、もう一度襲うことはない。いくら主に命令されても……」

言いくいのか、いまだに口数の少ないシエルだが、ひとつ情報が手に入った。

「その主について、いくつか質問してもいいかな。なんで僕が狙われているのか、いったい何者なのか、どれぐらいの勢力なのか、つていうことだけだ」

遠回しに探るのは苦手なので、いきなりズバツと切り出したわけだが、以外にも収穫があった。

「……口封じの魔法が掛かっているが、話せる範囲で話そう。まず、私に命令していたも奴は、貴方と同じように、剣と魔法、両方を極めた戦士だ。違うのは、剣か刀という部分のみかもしれない。」

それぞれの分野だけでも、勝てる人間はほばいない、二つ合わせると無敵……そういう奴だ」

「ああまで、貴方なんて呼ばなくていい。シレンでいい、シレンで」

「……りよ、了解した。シレンが狙われている理由についてだが、私もよく知らない。が、数年後、自分の地位を脅かす存在だから、今のうちに消しておこうということらしい。今接触しなければ、シレンにその存在を知られることは未来永劫無かったと思うのだが」

おー。珍しく長文だー。．．．じゃなくて、なら何か？その謎の人物Aは、未来を予知する能力でもあるのか。

うわー。戦うことになったら、すごい厄介そうだな。

「最後に、彼の勢力についてだが．．．．．申し訳ない、不明だ。彼自身も把握していないのではないのか、というぐらい多いとも言われている。が、三万の軍勢を、わずか千の兵力で撃退したこともある。それで数年前の話だ。今は途方もない数になっているかもしれないし、みんな死んだり脱退したりで、減っているかもしれない」

なるほど。．．．．．他人を見れば泥棒と思え、な状況だな才イ。

「じゃあ、最後の質問。．．．．．君は、今の状況で満足しているのかな？」

「．．．．．いや、いろいろあって、できることなら抜け出した
い。が．．．．．」

「……出たら、口封じに殺されると」

「そういうことだ」

「なあ、それなら……」

――僕の仲間にならないか？

「っていつても、今は僕一人しかないけど、目的はその謎の人物を倒すこと……だと思う。僕の後ろにも、少々大きい人物がいてね。その人からの依頼なんだけど、あまり詳しくは話せない。でも、口封じの魔法は解いてあげること可能だし、普通の戦士が千人仲間になってくれるより、シエル一人でも仲間になってくれる方が、よほど嬉しいよ」

「……わかった、ありがとう。ついさっきまで殺し合いをしていたというのに、本当にいいのか？」

「なんの問題がある？もう僕を狙う気もないし、利害も一致しているし、実力もあるし、全然大丈夫さ。それにこっちから誘ってるんだ。文句なんて全くないよ。ただ……」

——その黒い仮面のようなものは外しておいてくれないか。

「だって、ずっと仮面付けたままじゃ息苦しいでしょ。それとも何か、魔法か何かで強制的に付けられてるとか」

「ご推察の通りだ。……外してくれないか？自分では取れない」

「分かった。行くよ」

何の抵抗もなくスパツと外れたその仮面の下には、まるで日本人のような、漆黒の髪に吸い込まれるような黒眼の、まだ高校生ぐらいの女の子……ってというか女戦士の顔があった。

第17話（後書き）

どもー。このシエルさん、余り美少女設定にはしたくないし、そういうキャラは今後ほぼ必ず出てこないといってもいいので、そのあたりはご了承ください。いろいろと事情があります。

第18話（前書き）

今回ののは少し短いです。

ちなみにこれから文化祭の時期に入るので、更新できない日もあると思います。ご了承ください。

なお、人物の容姿についての描写が駄文レベルマックスなのは、お許してください。慣れてないもので。

第18話

そんなわけで、仲間が一人できた僕は、ひとまず安心ということ
で、とりあえず寝ることにした。

あ、部屋の中がグチャグチャなのは、「とりあえずこれ何とかし
として、お休み」と即、反論の暇さえ与えずにシエルに頼んで（命
令して？）おいた。

「このために仲間にしたかったのか………？」

少々落ち込んだ様子だったので、フォローはしておいたが、手伝
う気は粉微塵もなかった。

アハハハハ。

次の朝、ご飯に毒入ってたらどうしょ。

………考えるのは止そう。うん。

——— あんな戦闘の後で、すぐに寝られる人間はそうそうい
ないだろうね。

僕もその例外ではなく、寝よう寝ようと思っても、結局朝まで起きている羽目になりました。

そして今日は、アイスクラッシュの予選と、スペルバトルの本選があるんですね。そんな中、寝られる時間もなく。

……今日こそは寝る。いざとなったら頑丈なシールド張って、戦闘中に堂々と寝てやるんだ——！

「おはようシレン。眠れた奴はいいよな」

ちょ、マジで殺気を感じるんですが！そんな怖い眼で睨まないでください！て言うか僕だって寝てないし！そんな充血した上に隈が出来てるような形相でにらまれるとめっちゃ怖いですから！どす黒いオーラが見えてる気がするよ！

「ちょ、やめ、危な！あ、うわああああー！」

「まったく。少しは反省しろ」

「がphぐsghs pk jがえpるgはjk rgくくハ」

ああ、きれいな川の向こうに花畑が広がってるよ

うん、すっきりした。

『さつきからずいぶんとご立腹のようだねえ』

『・・・・・・・・』

突然、心の中に今最も聞きたくない神物（人物じゃないから合ってるだろう）の声が響いてきたが、無視。いたって無視だ。聞こえなかったことにする。

『無視するなよ。君にいいお知らせを持ってきたかったんだから』

なぜ過去形そして如何にも悪いお知らせの雰囲気させているのか
気にもならない。放置だ放置。

『ふん、返事なんているか。勝手に捲し立てとくからな』

『・・・・・・・・』

自分で捲し立てるとか、普通言わねえよ。言語力ねえなこの馬鹿
神。

今思ったけど、声に出さずに会話してんだから、今考えてること
すべて伝わっているわけだな。まあいいか。口に出しても大差ない。

『君の推測はあってるけど・・・・・・・・なんて言つかないかな。ああもう
いい。とりあえず要点だけ言おう。おめでとう。君はまず一番目の

依頼を完了した。さっきのシエルさんに勝てる戦士は、この世界にはほばいないからね。次の任務は、まだ先だと思う。じゃま、がんばりなよ。ちなみにこの大会で負けたら、後々大きく影響すると思うから必ず勝つように。あとそれから……」

さりげなくプレッシャーをかけてきた気がするが、聞こえないことにしてるんだ。なんの問題もない。

『ブチッ！ツーツーッ』

心の中でそう叫び、長ったらしい馬鹿神との会話（一応、『心話』という名前にしておこう）を遮った。

剣道でさんざんやらされた、心を無にする修行っていうのが今はじめて役に立った。

さて、どうやら心話をしていた、まったく現世のことに注意を払ってなかったので、立ったまま寝てたと勘違いされたいらしい。

「……レン、起きろシレン！遅刻するぞ！」

「ん？あ、ああ………ってもうこんな時間？朝御飯も食べてないのに！」

「我慢しろ。ほら、さっさと行って来い！」

——チクショウ、今度会ったらあの馬鹿神一度殴り飛ばしてやろう。

パン切れ一枚加えて走ることすらできなかった僕は、空腹に睡眠不足という絶不調な状態で、戦いに挑むこととなった。

今日、もし元の世界なら、『星座占い。蠍座、第12位』って出てきてただろうな。そして仏滅の日に違いない。

ついでに、厄年でも入ってるんじゃないの？

そして、ユニフォームを着ていなかったから、コーチに怒られて、部屋までまた逆戻りさせられる羽目になった。

はあ………こんなんでいいのかなあ？

第18話（後書き）

感想をお願いします。本当に。できればポイント評価もお願いします。

第19話（前書き）

ついに評価ポイント3ヶタ突入！

感想、ポイント評価お願いします。さんざんにこきおろしてもかわないの、感想お願いします・・・・・・
お手間を取らせてすみません。

第19話

今回の任務はこれで終わり？ いやいや冗談でしょ。さっき神様が言ってたことも、全然当てにならないな。

今は、アイスクラッシュの予選を順当に勝ち上がり、スペルバトルの本選に出場しているところだ。

試合開始一時間が経過し、二人が脱落した。

そして、今僕の戦っている相手は、なんとあの僕が殺したコーチャ、あつたときのシエルと同じ殺気を纏っている。

——明らかにまだ任務終わってないよね？ もしかしてここでやられちゃってオーケーな訳？ ならさっき『ここで負けてはだめ』って言ってたのはなに？

しかも誰にも相談できないからなお煩わしい命題だ。『僕は異世界から来たんです』なんて口にした時点で、おかしい奴だと思われること間違いなし。

「戦闘中に考え事か、情けない」

「君ぐらい、本気を出すまでもないね」

実際、僕が本気を出したら、たぶんこの周囲にいる人全員死ぬ。
はっきり言って、誰も止められないだろう。

ほぼ全属性、系統の究極魔法を同時に防げるようなパーティは、
そうそう簡単に作れない。

だからさっき言ったことは、決して嘘ではないのだが、真実とも
言いづらい。

「可能」「実行」に繋がらないからして、できるけど僕にはそ
んなことはできない。やりたくない。

おかげで、苦手とするチマチマした魔法で戦うしかなく。

結果、物凄く手加減しているのに相手が増長し、不愉快な気分になって怒りが爆発寸前なわけだ。

「いい加減手を引いてくれないかな？」

まあ、防御魔法に制限はないわけで。

僕も得意と言うわけではないが、自分の身体能力の内、反射神経と反応速度、動体視力と身体捌きを極限まで上げているから、氷の槍や、風の刃なんかも全く効かない。雷や炎の球は、全てシールドが守ってくれている。

「無理だ。わが主の命令に背く訳にはいかない。お前自身に恨みはないが、今ここで死んでもらおう」

「だから、君じゃ無理だって。いい加減にしないと、心の広い僕でもさすがにキレルよ」

「口先だけなら何とでも言える」

「そつくりそのまま君にお返しするよ」

面倒になってきたので、一気に片をつけます。

「ディゾルプシリーズ、戦意」

たちどころに戦闘意欲のなくなった某敵キャラは、数秒の後、ディゾルプシリーズの意識により、失神したところを捕獲された。

だから別に、難しいクエストではなかったが、神の言っていたことと反しているのが問題なのだ。

『あの馬鹿神、今度会ったら問い詰めてやろう。血反吐吐くまでね』

いつたい、僕はこの世界で何をすればよいのか、まだ具体的に聞いているのだが、大体想像はついた。

——要するに、その未来を予知できる謎の組織のリーダーをぶったおせばいいわけね。

それをしたからと言って元の世界に帰れるとは限らない。でも、他に採れる方法はない。

「はあ………先は長いな」

ストレスのたまっていた僕は、次なる獲物を見つけ、打ち倒すために、また駆けて行った。

|
|
|
|
|

一時間三十分後、僕一人で他の2つのチームの全員を討ち果たすと、スperlバトル本選は、呆気ないほど簡単に、圧倒的な勝利で終わった。

「お疲れ〜。お兄ちゃん、明日のアイスクラッシュも頑張ってね」

幸い、病室に止まっていたため昨日の騒動を知らないセルフアは、優勝トロフィーと最優秀選手賞、そしてお見舞いの花束をもって病室に現れた僕を、何の裏もない笑顔で迎えてくれた。

「もちろん、負けるわけがない。これで刀術が使えるれば何の文句もないんだけど」

今回、前代未聞の事件があったせいで、全ての種目のルールが多少変更を余儀なくされ、そのせいか、もともとだったのかは忘れたが、武器の使用はすべての競技で禁止になった。

星斬流第四ノ型、花吹雪が使えるば、フィールドに立てられた6本の氷柱全てを一瞬で壊せるのに、残念だ。

まあ、時間がかかるだけで、魔法だけでもこれぐらいは朝飯どころか睡眠前だが。

「……兄さんってさ、ときどきさりげなく自分のことかなり褒めるよね」

この世界には、「ナルシスト」という意味の言葉がない。もしあったら確実に認定されていただろうが、異世界まで来て、自分を卑下してられるかってんだ。

「とりあえず、いってらっしゃい。——怪我だけはしないでね」

自分も怪我を負っているのに、あくまで僕を心配してくれる妹に微笑みながら、僕は手を振って病室を後にした。

——結果、約束を破ってしまうことになるとは知らずに。

第19話（後書き）

これから先、どうなるかは私にも全く想像つきません。主人公シレンが走るままに、僕が付いていく感じです。

このままだと、100話で終わりそうにないので、スピードがアップしますが、気にしないでください。

第20話（前書き）

何とか更新完了。第一章のエピローグ的な部分です。気楽に読んでください。

次回から、冒険チックなものがはじまるかもしれないので、よろしくお願いします。

第20話

「アイスクラツシュ、予選開幕！」

そういう風に書かれた横断幕が張られ、魔法によって生み出された色とりどりの光が、空を彩っている。日本の花火と違って、昼間でも鮮やかな大輪の花が楽しめるところがいい。爆発音はなく、BGMの音楽が流れているのだが。

快晴の空のもと、ただでさえ寒い冬に、わざわざ氷なんて見たくないが、予選が始まってしまった。

「・・・・・・・・がんばれ、シレン」

ちやつかり応援席に座っているシエルから浴びせられた、相変わらず口数の少ない応援に、軽く手を振ってこたえ、病室の窓から響いてきた、セルフアの「がんばれ兄さん！」という特に何の変哲もない声援に盛大に手を振りまくって応えた後、僕は試合会場に悠々と足を踏み入れた。

「では、第一回戦を始める。レディー、ファイト！」

審判の持った旗が揚がると同時に、10ほどあるコートから、同時にいろいろな音が聞こえてきた。

氷の融ける音、何かの砕ける音、雷や炎、風の音などなど。

ちなみに僕が放ったのは、幾つかの 風の刃 と、巨大な プロ
ミネンス と呼ばれる火球、熱系統の ファランクス で、敵は面
白いほどにあわてていた。

プロミネンスが直撃すれば、一瞬にしてすべての氷がとけるので、
(もちろん自陣は防御してある) それを防ぐのに必死なのに、他の
風の刃まで防ぎきれはるはずもなく、開始十秒を待たずに、敵陣の二
つの氷柱に亀裂が入り、倒壊した。

「攻撃は最大の防御なり、って言っても分からないかな！」

敵は、僕の陣地に向けて攻撃を放つ余裕すらないのか、額に汗を
浮かべながら、(この寒いのに、よっぽどきつかったんだろうねえ)
障壁を展開している

僕の方は、一時も攻撃の手を緩めることなく、平然と、口以外の
部分を一切動かさずに、次々と風の刃を送りこんでゆく。

「これで決まりだ！」

正直に言います。僕は調子に乗ってました。

じゃなかったら、熱系統の究極魔法、地獄の大釜なんて使いません。

数秒後、寒天のはずが、一気に真夏の最高気温を更新し、相対していた敵陣の氷はもちろん、自分のフィールドと結界の張られている観客席以外のすべての氷が溶けた。だした。

「えー、ゆ、優勝者はシレン！でいいのかな？」

審判も、判断に困っている様子。

客席の皆さんがポカンとしている中、シエルとセルファの苦笑だけが、僕の目に映っていた。

第21話

「・・・・・・・・怒ったらいいか、喜べばいいのかわからんな」

恐る恐る選手控室に戻った僕を迎えてくれたコーチたちのセリフは、皆揃ってこうだった。

たしかに、優勝はしたし、二冠達成したのだから誉められてもいいのだが、あの終わり方はだめだ、ということなのだろう。

もう、全ての試合を消化したので、帰るしかない。

毎年一番の熱気を誇るこの試合がこうもあっさり終わってしまうと、みな期待外れだと感じるのだろう。

「すみません、つい調子に乗ってしまいました・・・・・・・・」

「いや、優勝したんだから怒ってはいない。ただ、褒めるべきなのかはわからんな」

そんなこんなで、試合の方はすっかりしないまま、僕たちは帰る準備を始めた。

妹も無事に回復し、新しくできた仲間には、
転送の魔法が掛かったイヤリングを渡した。

結構高価な魔道具で、今でいう携帯電話の超劣化版っていう感じだが、それでもこの世界ではすごい珍しいものの部類に入る。

まあ、携帯よりもいいところがいくつもあるので、使いやすいのだが。

「こんな高価なもの、頂くわけには……………」

そう言って遠慮していたが、目が「え、ラッキー！めっちゃ欲しい！」って主張している。

爛々と輝く目で、嬉しそうに（貰うのが決定しているかのように）しながら、形だけ遠慮している姿は、あの寡黙なシエルとは似ても似つかない。

が、もちろん僕はこっちのシエルの方がいいと思う。

昔のシエルを否定しているわけじゃないが、今のほうが似合っている気がする。

「いいんだって、連絡とる手段がこれぐらいしかないし、手紙だと誰かに盗み見られる可能性もあるし」

「じゃあ、遠慮なくいただきます」

早いなおい、しかも両手を突き出して、「早くくれ！」顔に書かれてある。……いや、たぶん意識してのことだろうから、「書いてある」のほうが正確だ。

「どーぞどーぞ。じゃあ、また何かあったら連絡するよ」

このときはまだ、すぐにこのイヤリングを使う日が来ることになるとは、まったく思ってもいなかった。

第21話（後書き）

みじかつ！まあ、明日から第二章に突入します。
感想お願いします。

第22話

対抗戦から数週間後。

また僕は早朝から、半強制的に、不愉快な声を聞かされる羽目になっていた。

『……というわけで、君には今すぐこの家を発ってもらいたい。仲間は何人連れて行ってもいい』

『ちよつと待て！わけわからん！なんでいきなり！まったくもって話にならない！』

どうやら、謎の人物に新たな動きがあつたらしく、それを阻止しに行くのが、第二のミッションらしい。

しかし、うちの両親に言い訳するのも大変だし、セリアとガウスに見つからないように逃げることもしなければならぬ。

どんだけ大変か、まるで理解していないに違いない。

『まあ、いいじゃないか。早ければ早いほど、君はこの世界で自由にすごせるんだから。この世界には、大規模な戦争もなく、凶悪な犯罪もない。平和な世界だ……。謎の人物さえいなければ』

『まだ僕は、その謎の人物が何してるのか、詳しく知らないんだけ

ど?』

そう、まだ僕は、このミッションについて詳しく知らない。

なのに、命を狙われて、そいつと戦わなければならないなんて・
・・・

うん。だんだんと腹が立ってきたぞ。（おもに無能な神に対して）

しばらく沈黙が続いた後、ペシンと額を叩く音とともに、神の返事がきた。

それは、僕をム力つかせるのに、十分すぎるものだった。

『あれ?まだ話してなかったっけ?』

『・・・・・』

怒りや呆れを通り越して、失望とム力つきしか感じない。

こんな無能な神が、僕たちの世界を治めていたのかと思うと、世界中の宗教組織に事実を暴露して、反神運動を起こしたくなる。

もともと神なんて信じちゃいなかったが、それでもこんな事實はあつさりと見過ごせるものではない。

『今から説明するから、怒らないで聞いてね。まず彼らの組織は・
・・・』

——自分たちの勢力を拡大し、大陸を征服したあと、この世界に存在する古代の秘術、異世界転移の術を探し出し、現存する五つの世界全てを、支配下におさめるつもりだ。その世界の中には、もちろん地球も含まれている。

よし、OK。なるほど納得。・・・・・するわけないだらうー
——！！

『もっと詳しく、この世界・・・・・その、五世界の話について詳しく話して！』

『そこから？ああ、しょうがないなあもう。実は、君の元いた世界、ここ、のほかに、3つの世界が存在する。エルフたちの住む世界、魔物たちの住む世界、神々の世界という風に。君のいた世界は、はるか昔、魔法を嫌った一族が、作つたとされている。

世界を作る方法は、異世界へ渡る方法と同じく、まだ見つけれない。

そして、さっきの謎の人物の組織だが、彼らは、自分の目的を邪

魔するものは、一片の情け容赦もなく、無慈悲にたたきつづす。

異世界にわたる方法を覚えたものは、神になれる。そして永遠に生き、他の生き物を操ることも可能になる。

僕も、そんな神様の一人だ。

ちなみに、僕の正体は、君もご存じだろう。イエス＝キリストだ』

第22話（後書き）

ああ、予想してたのと全く違う方向に進んでしまった。

きつと、それに近い本を、読んだのが原因だろう。

まったく違う方向に進んでしまいますが、お付き合いください。

第23話（前書き）

キリスト教徒の方、誠に申し訳ありません。

第23話

やあこんにちわ。

皆さんの中に、キリスト教徒の方はいらっしゃるでしょうか？

今、僕は、イエスキリストと話している最中です。

羨ましい？そんなことを言うのは、実際に話してみたらにしましょう。

『で、理解できた？』

『したくなかったけど、出来てしまった……』

『これで君も少しは、僕に対する態度が変わるかな？』

『変わるわけないだろ。大体僕はキリスト教なんてこれっぽっちも信じてないし（クリスマスは楽しんでたけど）w』

『可哀そうに。君はきっと極楽には行けなばぎやぶ！』

何が極楽だ。そりゃ仏教の考えだろうが！

頭の中で、神様を殴って見たらどうなるか、と思ってやってみたら、見事成功！

『な、なんで殴られなきゃゴベボフツゴハッアギヤベチーン』

調子に乗った僕は、これまでの恨みを晴らさんばかりに、頭の中で檻褸ボロ雑巾になるまで、イエスをしばき倒した。

放送禁止の数分が過ぎ、モザイクがかかりそうな姿になったイエスは、それでもまだ僕に心話を送ってきた。

『ふ〜。ずいぶんと手荒なまねをしてくれたね。まったくこれだから今どきの若者は』

『キレやすい現代の若者なめんなって言ったはずだぞ』

『確かに言ってたねえそんなこと。まあどうでもいい。じゃ、これから頑張ってくれたまえ？』

『待てコラ逃げんな！』

しかし、既に頭の中のイエスの姿は揺らぎ、言い終えるまでに消えてしまった。

「ちっ」

もうちょっと殴りたかったのに。

まあ、おかげで現在の状況はすべて呑み込めた。

分かりたくなかったがしょうがない。

「またセリアとかに怒られそうだな」

頭の中ではもう、次の長い長い旅行計画を練っていた。

第23話（後書き）

文化祭で更新遅れました

第24話（前書き）

大変お待たせいたしました。今からようやく旅が始まります。

きび団子持たせる予定はないので、途中でメンバーが大幅に増加することはないと思いますが、初めの方のPTがどうなるか、まだ前書き段階では分からないので、（主人公暴走するので）そのあたりご注意ください。

なお、魔法の組み合わせが難しいとのご指摘があったので、これからは複雑なものが出てこないようになります。

第24話

「で、なんでいま旅に出なきゃならない訳？」

「夢でカミサマノオツゲガアツタンデスヨ」

今、両親が前に座っている。

そして、旅に出ると僕が言ったら、こういう風に尋問が始まった。

さすがに黙って行くのは悪いだろうと、声をかけて行こうとしたら（すでに荷物も準備していた）目に見えない力で引っ張られていて、父さん登場。

まだ学校に行っている妹と、仕事に行っている兄姉は、この場にいる。

いたら確実に「やめときなさい」「俺もついてくぜ！」「頑張つてね」って言われるに決まってる。

……よく考えたら、最後のは別に問題ないような。

神様のお告げっていうのは嘘じゃない。夢じゃなかったけど、実際にあれは（信じたくもないが）神様だということだし。

まああまり効果ないかな〜って思ってたら、予想外の反応があった。

「神様のお告げ？ならしやうがない」

これが父さんの反応。

「そんなもん知ったこっちゃないわよ！」

これが母さんの反応。

「ちょっと、何認めちゃってるの！何か言ってあげて！」

「分かった。頑張って任務を全うするんだぞ」

「そうじゃなくって！」

父と母の即席コントが十分間ほど続いた後、結論がついに出了た。

「五年以内に戻ってこい。戻ってこなかったら、お前が生きてようがどこかで骨になってようが、死んだものとして墓作つとくからな」

「何気に酷くないですか！連絡入れてもダメ？終わらない可能性の方が高いんだけど！」

「そうか………今から墓石の注文に」

「行かなくていいから——！」

ゼーゼーゼー。

「とりあえず頑張つてこいよ。はいこれきびだ」

「分かったいつてくる！」

きび団子は欲しくない。次はセリアとガウスに会いに行く羽目になるんだ。

マジで「セリア（イヌ）」「ガウス（サル）」を連れていくことにはなりたくない。

あ、でもシエルは誘っていかないと。だいぶ戦力になる。二人で千程度の軍隊は目を瞑っても滅ぼせるね。

は。もう会わずに行つてやろつかいっそのこと。

第24話（後書き）

出発編上終わりました。

ここから本格的に第二章の開始です。

第25話（前書き）

ちよつと用事があつたもので、更新遅れました。
これからどんどん急展開にしていくつもりなので、駄文は治らない
と思いますが、よろしく願います。

第25話

結局、こっそりと出て行くことに決めた僕は、家族以外に旅立ちを知らせることなく出ていくことにした。

もちろん、大事な戦力であり、情報源でもあるシエルは連れていくが、他には誰も……

「あゝれゝ？何してるのかなあゝシレン？」

今最も聞きたくない声が背後から聞こえてきた。

ギイイイッと錆びついたロボットの首が動くような音こそしなかったが、それに近い動きで恐る恐る後ろを振り返ってみると、予想した人物ではなかった。

正確に言うと、声の主だけではなく、もう一人、Gで始まる少年の姿が。

「な、何でいるのかな？お二人さん？」

セリアとガウスの返事は、僕を落胆させるに十分なものだった。

「あんだ、ご両親に口封じして行っただ？」

「……はい。僕がバカでした。」

これからは、魔法とか刀術にだけ頼ってないで、頭も鍛えないといけないな……。

「何もかも聞いたわよ。神様のお告げ？そんなのウソでしょ。何か、話せない事情があるのね？」

すべてお見通しですか。恐ろしいなこいつ……。

ゴツッ

あ、口に出してたか。

「それはそうと、そんな事を聞いて、あたしたちが、黙ってると思っただ？」

「………思いたいけど、駄目だろうねえ」

「よくわかってるじゃない。さ、あたしたちも支度してくるから、ここで待つてなさいよ」

そういうと、また僕の家・・・つまり、セリアの家の方に駆けて行った。

「まったく、黙って待つてるかっつての。さっさとこのすきに逃げ・・・」

僕は走り出そうとした。身体が前に傾く。

なのに、足が動かない。そのまま前に思い切りこける。

そして顔面をしたたかに打って、固定された足首は、変な方向に曲がる。

――結果、動けないままその場にいるしかなかった。

え？魔法で何とかしろ？むちゃくちゃだ。そんな状態でどうやって杖振り回せと？

杖なくても何とかできるんじゃないか？そんなこと、既に試したけど無理だったんだよ！

後ろからドタドタと足音が聞こえてきて、二人が戻ってきたのがわかった。

「あゝあ。その場にいろって言ったのに。魔法は解除してあげるから、一緒に行くわよ」

「ヤダ」

「文句言わない！一生その場に固定してあげることできるんだからね」

解除してもらった瞬間、逆にお返しして逃げようかとも思ったが、負けは負けだ。潔く諦めてやろう。

それに、人数が多くて困ることはない………たぶん。

「さ、はは早く行きましょう。早く！」

「何慌ててんの？」

「気にしない！さ、早く！」

追い立てられながら、僕の頭にあったのは、二つのことだった。

一つは、シエルのこと。どうやって紹介すればいいんだ？

そしてもう一つは、何でこんなに慌ててるのか。

突然、一つの考えが頭に浮かんだ。

あのおばさんたちのことだ。大騒ぎするに違いない。

シエルの住むところにだいぶ近づき、少し休憩することになったとき、こっそり聞いてみた。

「……もしかして、勝手に家出てきた？」

「う、うるさい！おそろしいこと思い出させないで！」

やはり凶星だったらしい。

それから十分後。

「……誰これ」

シエルに会った二人は、呆然と立ち尽くしている。

何でも厄介事に巻き込まれやすい体質なのかな僕は……

ということで、メンバーが二人増えたのであった。

第25話（後書き）

結局出発できませんでしたね（笑）

昨日は申し訳ありませんでした。

部活の試合とかいろいろあったんです。

第26話（前書き）

ここで皆様に一つお知らせがございます。

連日更新は、まず無理なので、不定期更新とさせていただきます。

ですが、何とか週2ペースでの投稿を頑張りますので、お許しください。

もち、それ以上のペースになることもあります！不定期ですから！

第26話

「えーっと、あれがこれでこーなんで……」（略）

すみません、期待してた方には申し訳ありませんが、はしよらせていただきました。

げんこつ交じりの長ったらしい会話なんて書いてたら、本当にアレなことになってしまう。

で、今の僕の風貌について記しておこう。

まず、骨折した腕をつついて、鼻には魔法による治療痕。頬にはガーゼが張ってある。

右手の指は、3本が負傷してまったく動かず、左足の感覚がない。

肋骨も3本は折れていると思う。

なぜそんな瀕死の状態なのかって？聞いてくれない方がありがたい。

思い出すだけでも、鳥肌が立つ。

僕は愛と勇気以外に友達のいない寂しい人ではないので、勇気なんて（そういう名前の奴はいたが）友達にいない。

だが、自分にある猫の額、雀の涙、塵も積もれば山となる前の状態ぐらいの量しかない勇気を振り絞って、簡単に説明しよう。（猫

の額って関係なかったような)

初めに、自己紹介した時に「よろしくな、おばちゃん！」発言をしたガウス(「だって、黒髪の若者なんて見たことないじゃん！年寄りの黒髪なら見たことあるけど」)が、フルボッコにされそうになり、(「あたしは一切助けないわ。今のは確実にあんたが悪い」byセリア)それを止めに入った僕がなぜか逆ギレされて、たこ殴りにされて、(その時何気にガウスが攻撃していたことは、当分忘れないだろう。あとでガウスには、「お前に最近恨みを持ったやつがいないとも限らないから、背後には気をつける」とでも言っておこう)そのあと僕が潰えて、初対面の二人の争いになり、セリアに意識だけ回復してもらった僕が止めに入ったら、魔法の直撃を受ける羽目になった。そこで階段から転げ落ちた僕は背中を強打し、立ち上がったらふらついて、バランスを整える前に今度は前に転倒。鼻がへし折れたに違いない。

そのまま僕が起き上がれないでいると、戦場が移動してきて、僕は三人に踏まれまくり、肋骨をやった。

二人が組み合って、とりあえず落ち着いた状態になって初めて、襪襦雑巾と化した僕に気付いたらしい。

「まったくひどいな。君たちはいったい何がしたいんだ。邪魔するだけなら帰れ、特にガウス」

「……………ハイ、すみません」

「声が小さい！」

「すみませんでしたっ！」

「うるさい！怒鳴らんでも聞こえとるわーーーーー！」

あーすつきりした。哀れなガウス君は今、僕の目の前でびりびりとしびれながら、体中にやけどを作って地面に突っ伏している。

まあシエルには特に処罰はない。そもそもこの起こりはこの馬^{ガウス}鹿^スだし。

「ったく・・・セリアがまともに治療してくれなかったら、どうなってたと思ってるんだ。しまいには置いてくぞコノヤロー」

Q、出発前から満身創痍で危険な旅に出るアホがどこにいるんだ。

A、ここ。

仲間のチームワークはお世辞にもばつちりとは言い難いが、（性懲りもなく）しつこく「おばちゃん」扱いするガウスにいい加減慣れたのか、冷静な対応で受け流しているシエル。うん、明らかに後者の方が大人だ。

それに突っ込みを入れるのがセリアで、その方法は毎回異なるが、何とか人間関係の図式が出来上がったというところか。

今は出発して一週間。いい加減傷も治ったのだが、（僕とセリアの渾身の治癒魔法のおかげだ）イライラはまだおさまらない。

傷が治ると同時に、また悪ふざけを始める。それがガウスという生き物だ。

そういえば、最近なにか気になることがあるのだが、それが何かはわからない。

頭の中に何かモヤモヤと漂ってはいるのだが、それをつかむことができずにすり抜けていく。そんな感じだ。

「おい、そろそろメシにしようぜ」

「りょーかい。火でも起こすか」

元の世界で野宿しようものなら、ライターとかの発火装置がなければ焚火にも困るところだが、ここでは簡単な炎系魔法で事足りる。

たちまち夜の帳は取り払われ、魔法によって生み出された、普通より明るいマジックファイアがあたりを照らしだしていた。

それから、ひたすら焼いた獣の肉を食べることに専念した。

誰もしゃべるものがない。

ガアアアアアアアアアッ

突然、静寂を破ったのは、狼っぽい獣の咆哮だった。

セリアと僕は、このまえのアドバンスドスリーとのあるので、そうそう驚かなかったが、残りの二人はそうもいなかったようだ。

「ひゃいつ」

「のわっ」

普通のシエルからは想像もつかない、いわゆる「女の子の叫び声」が漏れたのはかなり意外だったが、そんなことにかまっている暇はない。

「炎があれば獣は寄ってこないっていうけど……」

「と、とりあえず撃退するか？」

「相手の居場所と数がわからないのにどうやって？」

「う．．．．．」

「ま、そろそろ何か起こるころだとは思ってたしね。僕が死にかけた一件はあったけど、そのほかに何事もなく順調に旅が進むわけがない」

なんとなくバツの悪そうな顔をしているシエル。

我関せずといった顔で、遠い目をしているガウス。あとでちょっといじめ．．．じゃなかった。修業をしてあげた方がいいな。

そして、ひたすら肉を食べまくっているセリア。口元に肉汁や、まだ生焼けの肉から垂れた血なんかがついていて、ちよつと女の子としてはどうかというような風貌になっている。

それはともかく。

三人にはもう僕の任務のことは話してある。まだ異世界から来た事までは知らせてないが。

だから、この度には危険が伴うってことぐらい分かっているはず。
(それを理由に追い返そうとして失敗したのが、ついこの前の話だ)

「そうだな、よし派手にやるぞ！」

なぜかガウスの号令をかけた。

それに続いてみんなで拳を突き出して「えいえいおー！」……
・というわけにはいかなかった。

だ―れもガウスの号令に続かなかったからだ。

「ゴホン。じゃあ行くよ！」

「「オー！」」

「……おー」

うん。拗ねたガウスにはあとで嚴重に罰を与えておこう。

それはともかく、久しぶりの戦闘が幕を開けた。

第26話（後書き）

久しぶりの更新です。すみません。ちょっとどころじゃないスラン
プに陥ってました。

今後、もう一つの方の作品と一緒に、頑張ろうと思います。

第27話（前書き）

更新遅れました。

文化祭に体育祭に試験のおかげで忙しかったです。

第27話

「あー懐かしいわね。あのドラゴンと戦った時のことを思い出すわ」

「セリアはただ気絶してただけじゃ!？」

そう反論すると、キツと睨まれたので、さらに続けようとした僕の口は閉じた。

「うっさいわね、参加することに意義がある!」

「そもそも参加すらしてなかったような!」

でもつつい突っ込みたくなってしまうのは、お笑いの文化が根付いた日本人ならではのだろう。

「・・・・・・風の刃!」

風の刃は、決して攻撃力の高い魔法ではない。

でも、其れなりの使い手が放つと、魔力のこもった見えないナイフが連続して飛んでくるようなものだから、かなり役に立つ。

究極魔法がすべてというわけではないのだ。

「風の刃風の刃風の刃風の刃ーーーー!」

とはいえ、ここまで大声で唱え（喚き？）ながら暴れているのは
ちよつとどこか頭の回路が切れた人に見える。

「風の刃風の刃シレンのボケ風の刃風の刃風の刃失せるシレン風の
刃風の刃！」

……見えるだけじゃなく、実際に頭のおかしい人なのだろ
う。て言うか絶対そうだ。

そのうち、こっちに魔法が飛んでくるんじゃないかと思ってたら、
本当に耳のそばを掠めていったよ。

「全く、落ち着け。 フラッシュ
閃光」

セリアの目の前で、眩しい光がはじける。

光の奔流がセリアの視界を埋め尽くし、意識を奪った。

その場に倒れ伏したセリアを見て、やっとため息をついた。

「こいつってホント何考えてんのかわかんないよな」

「《サンドマン》」

もう夜だし、一応催眠の魔法も掛けておく。

「ん、風のはああああ」

・・・夢の中でもまだ唱えとんかい！

しかもそれで魔法が発動してしまうのだから、恐ろしい。

間一髪で飛びのいた僕は、そのまま刀を抜いて後ろへ突き出す。

手ごたえとともに、狼が一匹、刀に刺されて死んでいた。

「あと100匹程度か」

再度刀を戻し、身体強化を使い、高速で抜刀したことによって生じた衝撃波で僕にかみつこうとしていた狼5匹を冥界に送る。

さらに右へ刀を一閃し、7体ほどの狼を閻魔様の裁きにかけ、あちこちに乱射した魔法で30匹ほどを屠る。

ガウスも、ナックルという手袋にとげをつけたような武器に炎を纏わせて、身体強化で底上げた筋力を持って次々に狼をなぎ倒し

ている。

「面倒だ！全部かたづいてしまえ！」

本当はガウスに手柄を取られたくないという、幼稚な競争心もあったのだが、そんなものはおくびにも見せず、自分の重心を起点に、闇の魔法を展開する。

「グッドナイト、アンド ハブ ア ナイス ドリーム！ 常闇の夢」

前半部分の英語は関係ないのだが、其れはそれ。

おやすみなさい、よい夢を、という意味だ。

これは、近くにいるふつうの獣以上、人間以下の知性を持つ生き物すべてをことごとく眠らせる魔法だ。

失敗する確率の低い、安全な魔法のはずなのに……

僕の首筋に、狼の爪が迫ってきていた。

それ自体は別に避けられない攻撃ではないが、自分の魔法が失敗したことに驚いていて、とっさによけることができない。

「馬鹿かお前！こいつらは魔物じゃない。ただの狼だ！もつとも、何者かに操られているようだ。だからそ……の魔法は効か……ん！」

……そうだった。

人間には無害のはずの魔法で眠りに落ちようとしているガウスに諭されるなんて！

また別の意味で精神にダメージを受けたが、そんなことより、残りの狼だ。

「遅いぞシレン。遊んでいるようだから、私がすべて始末しておいた」

返り血をつけたシエルの笑顔が、焚火の炎の影で揺らめいていて、かなり怖かった。

第28話（前書き）

試験終わりました！。

これでもうやくゆつくり遊べ・・・じゃなかった更新できる。

そしてモンハン3rdやってる人、この「小説家になろう」サイトでサークルを作って、また一緒に狩りでも行きましょう。すでにメンバーは何人かいます。

第28話

「おしゃべりに興じて、目の前の戦闘を忘れてるようでは、目的を達成できないぞ？そもそもあいつの前では、一瞬の隙に付け込まれて倒される。二度とこういう醜態がないようにだな・・・（以下略）」

割愛させていただこう。

ただ僕の足が、痺れて感覚を失うまで長い間座らされていたことは記しておいたほうがよさそうだ。

近くでフクロウっぽい生き物が、僕を憐れむように鳴いている

「・・・・・・・・・・ということだ。おい、聞いているのか！」

「聞いてます。はい、すみません」

だから顔に血をつけたまま凄惨な笑顔で言わないで・・・・・・・・・・。

めちゃくちゃ怖いものがある。

僕も昔、懐中電灯を顔の下から当てて、夏休みの肝試しなんかで怖い顔をして驚かしたことがあるが、それをされて漏らした幼馴染の気持ち、よく理解できる。

うん。今となつてはもう二度と会えないかもしれないけど、すみませんでした。

あれ？なんだか頬が濡れてるよ？

「な、泣かなくても。ベベ別にそこまで怖い顔してはいないだろう？???むしろにっこりと笑っているつもりだったんだけど。つぎからき、気をちゆけてくれればいいのだ。しかしもつと精神を強く持たないと・・・ってなにを言ってるんだ私は！と、とりあえず泣きやめ。な？」

うわあ。途中噛んだし。普段冷静な慌てぶりもなかなか面白い・・・なんて思っているのがばれたら、多分照れ隠し交じりに殺されかねない。

多分落ち着いたら、なんて恥ずかしいことをしたんだ、って

しかしふつうの状態なら非常に微笑ましいのだが、顔に返り血をつけた美少女がそんな様子だと、なんだか妙な気分になる。

「悪い。ちょっと全く違うことを思い浮かべてた。昔の思い出だよ」

ガコッ

僕は、突然天から降ってきた衝撃で、頭が割れそうになるぐらいの痛みにさらされた。

見ると、どうやらシエルの「照れ隠し必殺かかと落とし」が発動したらしい。これが初めてだが。

天地が逆転し、僕の頭の中にきれいな川が流れている。

「ああ・・・きれいな川と花畑が見える。川の方こうで死んだ祖母ちゃんが手を振ってるよ・・・」

なんてテンプレな、なんて言わないでほしい。

「何だそれ！じゃあ何か？私は無駄に恥をかいたって言うのか！」

いやあ、完全にそっちの誤解だよ。僕に落ち度はない！・・・
・なんて言うほどKYじゃないから心の中で叫ぶだけにしておいた。

しかし今のやり取りで、すっかり元の調子が回復した。

「さ、気を取り直してさっさと行こうか」

「もう夜だぞ。ここで野宿していく予定だった」

あそつえばそうだった。

正味、まだいけると思うんだが、シエルはいつもこのぐらいの時間になると眠いと言いつ出す。

「そだったそだった。じゃあお休みー」

「「どんだけ立ち直り早いんだよ・・・」」

セリアとガウスがボソツと呟いた。

「すごい！台詞がぴったり揃ってるー！息ぴったりだなー！」

「「揃ってないし！」」

セリアとガウスは自分の隣から発せられた自分と同じ台詞に、思わず一瞬顔を見合わせた。

そして

「「真似するな！」」

「「そつちこそ！」」

「ぶっ・・・つくくくく。こ、こ、これは、笑ってもいい・・・の
だろうか」

ガウスやセリアのものとは違つかすかな笑い声が耳に届いた。

あの場をごまかすために、ワザととぼけた発言をしたのだが、隣を見るとシエルが肩を震わせながら俯いている。

笑うのをこらえているのが明白だ。

「笑うのに誰の許可を貰うんだ？」

「そうか。なら遠慮なく笑わせてもらおう」

……数秒間、何も起こらなかった。

「こ、ゴホン。どうやら話していたせいで笑いは引っ込んだようだ」

だろうね。笑っていいか、って聞いた後に爆笑する人なんて現実にはめったにいない。

ふつうはこういう場合、誰にも許可を求めずに笑いだすか、笑いながら訊くか、事後承諾になるだろう。

「なぜに笑うのに僕たちの承諾がいるの？」

僕がそういつた瞬間。

「……今までこんなに笑えるような面白いことや、笑っていい機会なんてなかったから」

第28話（後書き）

あれ？シエルに全く考えてもいなかった過去ができちゃったよ？伏線も何も張ってないし、次の展開どうしよう・・・！！

第29話（前書き）

まったく、困ったもので、データが4回もとんでしまいました。
同じ話をかくのもう5回目です。

更新が遅れてしまったことをお詫びします。
それでは、どうぞ！

第29話

「……今までこんなに笑えるような面白いことや、笑っていい機会なんてなかったから」

「ごめん、悪いこと聞いちゃったな」

そういえば、もともとシエルは10年ほど、「彼」の陣営に属していたという。

そして人を殺しまくるような組織にいて楽しいはずがない。

彼女の見た目からして、年齢は最高でも20には達していない。

つまり、今までほとんど楽しいことを経験することがなかったのだろう。

「うん、ごめん」

「悪かったな」

セリアとガウスも、頭を下げた。

「き、気にしないで。さ、さっさと寝ましょーうよ」

僕は、せめてこの旅の間だけでも、楽しいことをいくつも経験してもらいたいと心から思った。

だからというわけでもないが。

「・・・キャラがおかしくなってるぞ？」

「す、すまない。さつさと寝るぞ」

「なぜに命令形？」

「うつ！・・・寝よう」

「単語だけ？文になってないよ」

「う。うるさい！」

さて、そんなバカなやり取りをしているときに、あの最も聞きたくない不快な声が鳴り響いた。

『やあやあこんばんわー』

『・・・何の用だ』

『相変わらずつれないねえ。実はいい情報？を持ってきたんだよー！』

『そうかそうか。？マークが付いている限りなくあやしい情報だが

さっさとおいて帰れ』

『グスツ・・・北から、あの「彼」の組織の人たちが近付いてくる。あと10分以内には到着する』

『了解。で、そいつらは強いのか？』

『元国軍の剣術師範とか、宮廷魔術師とか、
特殊能力 スベック 持ちとか』

『分かった』

どこがいい知らせだ、と思った僕は、一方的に心話を切つてやった。

「もうすぐ敵が来る。北の方角から。臨戦態勢に入つて！」

僕が叫んだ途端、みんなの目の色が変わった。

「人間？モンスター？」

「両方！並の人間じゃないのは確かだね！」

と言いつつ僕は、両手に魔力をためる。

せつかくの睡眠時間を削った罪は重い。

あと、シエルの昔の話も聞きたかった。

何か有力な情報につながるかもしれないのに・・・！

「この恨み晴らさずにおくべきか・・・！」

右手には 墮天使の業火 左手には 昇華の聖光 をホールドし
てある。

「そろそろ行くか・・・！」

まずは右手を突き出す。もちろん北に向かって。

その瞬間。

およそ2キロ先で、表面温度が太陽と同じの、握りこぶし程度の
火球が数十個出現した。

そしてそのまま・・・

スガアアアアアン！

地面に一齐に爆着した。

2キロも離れてたのに、爆風がここまで一瞬で届き、近くの草木
はすべて熱風でからからに乾いてしまった。

そしてもうもつと上る煙が晴れた先に広がっているのは、辺り一
面の焦土。

そこには人がいたかどうかわからないぐらいに何もなかった。

それでも、僕は乾いてパサパサな唇を開いて、また新たな魔法を行使した。

「まだだ！次はこれで・・・！」

そして左手を振りおろし、昇華の聖光が発動した。

キュイイイイイイイイ

機械的な音がして、目の前がホワイトアウトした。

僕はあらかじめ目を閉じていたからよかったものの、セリア達には目が焼けるように感じたことだろう。

後で謝っておこう。

数十秒後。

前方には、隕石でも降ってきたのかと叫びたくなるような大きな

クレーターができていた。

「・・・・・・・・」

「ふむ、シレンにしてはまだ甘かったのでは？私相手のときはもっとひどかったぞ」

「いや、これ見てまずそんな風に言う人めったにいないって！」

この場合、ガウスの突っ込みのほうが正しい。珍しいことだが。

「やれやれ、やっと眠れる」

こうして僕は、遅めの眠りについたのであった。

第30話

「ふわ。よく寝た―」

あれだけの戦闘の後に、（悲惨なものを見た後に、という意味だ）ぐっすり眠れるなんて、元の世界じゃ考えられないな、とつくづく思う。

「おはよー。一つ聞いていい？」

目が覚めるなり、セリアが質問してきた。

「ん？どうぞ」

「私たちこれからどこ向かうの？」

「ん、敵の本部がある方」

「それってどっち？」

「シエルに聞いて」

「本部は・・・北の方角にあるぞ」

「・・・え？」

「北の方角は、まだ地面が熱を持って暑苦しいぞ・・・大変だな」

はあ・・・。。。

実際に歩いてみる。

・・・あつつつ！

「夏のプールサイドだ・・・」

思わずそう呟いてしまった。

自分の迂闊さに内心頭を抱えていると・・・

「『プールサイド？』」

やはり三人に真顔で聞き返された。

「あ、いや何でもない」

「しかしあれを歩くのはきついわね」

しょうがない。

「魔法使うから、泳ぐ準備してね」

「はい！」

数十秒後。

「こんなことのために究極魔法使うのももったいないな。少しランク下げて… ウォーターハザード」

言下に、僕のすぐ後ろから、膨大な量の水が現れた。

その水は流れのまま、僕たちを北側に押し流していく。

各自氷の板とかを作って、サーフィン気味に一気に進んでいく。
のだが。

「ばだs j g べぐおいべりがばぎゃばげ」

・・・あれ？ガウス泳げなかったんだっけ。

「おい、誰かガウス助けてあげて——！」

あいにく、僕はずいぶんと前方にいる。

「しょうがないわねえ。この貸しは高いわよ」

ガウスに言ったのか、僕に言ったのか分かりにくかったが、セリアがガウスを脇に抱えて、華麗に滑って行った。

こうして僕らは、旅を始めて初めての「彼」の組織との遭遇を、こんな感じでやり過ごしたのだった。

第31話（前書き）

どーもこんにちわ。

前回の投稿を、少し修正させていただきました。（内容が1話分抜けてまして）

誠に勝手なことをしてしまい、申し訳ありません。

それにしても、1話を補うのに増やせるのが一行程度とはなかなか難しいですなw

あ、この次はまた新しい章が始まります。

第31話

「ふーっ。死ぬかと思った・・・」

かなり遠くまで続いていた焦土が途切れて数分後、結局セリアが水に落としちゃって、何度もおぼれかける（むしろ溺れて死にかけ）悲惨な目にあったガウス君は、ようやく目を覚ました。

その第一声が、まあすごく妥当な上の台詞。

「ま、死ななかつたんだからいいじゃん」

今はみんなでしゃべりながら、ゆっくりと北を目指して歩いている。

「なあ、前から思ってたんだけどさ、何でシレンってあんな強いんだ？一回真剣勝負してみてえ」

なんの前振りもなく、唐突にガウスが言った。

「生まれつきかな？」

「やめときなさい、死ぬわよ」

「まず私と戦って、勝ったらいいだろう」

3人の声が重なった。

「そっだ、3対1で戦ってみようぜ！」

ガウスが、ポンと手を叩いて言った。

「なんで？面倒くさい」

「あたしはまだ死にたくないわよ」

「なぜに仲間同士で戦う必要があるのだ？それで怪我でもしたらどうする」

「………ノリのわりいやつら……」

3人に真顔で反論されて、ふてくされるガウス君。

地面にしゃがみ込んで、いじいじし始めた。

しかし僕らは、まだ調子に乗って続けた。

「『ノリで怪我したくないよ！』『』」

なのに、なぜか今度は僕が僕が睨まれて、

「あんたは怪我させる側でしょうが！どちらかといえば！」

「お前は怪我なんてしないだろう！」

と言われてしまった。

うつ・・・僕でも怪我することはあるんだけどね・・・。

「とにかく暴れてええええ！暇なのは性に合わねえ！」

うわー。何という乱暴なセリフ。

周りを見ると、セリアが耳に指を突っ込んでいやいやと首を振っていて、シエルが両手を肩の高さにあげて、完全に呆れた、という仕草をしていた。

しかし、一度口から洩れてしまった言葉は戻ってこない。

たとえば、数十分後、かなり後悔することになっても。

日が傾いてきたころ、僕たちはようやく歩き続けていた足をとめた。

「着いたぞ！ここが今日の宿、レシディアの街だ」

ガウスが、声高にそう宣言した。

ここまでではかつこよかったのだが、手にはしつかり、観光用のマップが握られている。

「うん。僕たちもその地図貰ったからわかるよ」

白けた空気になる前に、あわててそこに突っ込みを入れた。

「ちょ、ちょっと試みてみたただけだ。さ、さっさと泊るところを探そうぜ」

そう言って歩き出そうとするガウスをしり目に、僕たちは手にした地図で、宿の位置を探した。

僕たちが、出発するころには、走って行ったガウスの姿が見えなくなっていた。

「疲れた――」

あちこちの宿を探し、格安でなかなかいい所を見つけるのは、至難の技だった。

ようやくよさそうなところを見つけた時は、もうすでに辺りは真っ暗。

「とりあえず中に入ろうよ」

セリアが急かす通りに、僕たちはその宿のドアベルを鳴らした。

ふと看板を見上げると、

『ギハイオの宿』

と書かれていた。

結局、ガウスとは合流できなかった。

宿の数は、20ぐらいあるのだ。しかも町の面積が結構広い。

探しきるのは難しいだろう。

「いらっしやい！」

中に入ると、そこはもう食堂らしく、いかにも傭兵っぽい感じの

男たちが、酒を酌み交わしていた。

もう、食堂というより酒場といった方がいいかもしれない。

「今日は泊まりで？」

「え？あ、はい」

訊かれて思わず返事をしてしまった。

まあ、そろそろ時間も時間だし、ここでいいよね？と眼で合図すると、ほかの2人はうなずいた。

第32話（前書き）

少し遅いですがメリークリスマスそしてよいお年を！

謹賀新年 あけましておめでとうございます！

それでは、どうぞ！お年玉、クリスマスプレゼント代わりに、ポイント評価とかいただけるとうれしいです。

第32話

「美味しい！」

金を払った後、（これで手持ちのお金は残り500円程度になった）通された部屋からは、きらびやかに輝く、夜の街並みが見えた。

元の世界の銀座とかには及ばないものの、この世界でみた中ではトップクラスの夜景だ。

そしてそんなのを眺めながら食べているのは、こんがりと焼けたチキンに香辛料がかかっているもの、白身魚のムニエル風の料理、一応金持ちの部類に入るのであるうちでもめったに食べられなかったフィクサスという動物の肉料理、なぜかゆで卵、などなど他にも豪華な品が山盛り。それを自由に食べていいという。

「どう考えても、僕らが払った宿泊料ではこんな料理は一品も食べられなかったはずなのにね」

かすかに疑問に思ったが、それはすぐに別の料理のおいしさがとってかわった。

「……私は食べなくていい」

「シエル？どうかしたの？おいしいのに」

「いい。私の分も食べて」

そういつて、さらにいくつかの皿が僕の前に置かれた。

「じゃあ遠慮なく！」

そして今後の方針なんかを話し合いながら、数十分は食べ続けていたのだろうか。

「ふう・・・なんだか眠くなってきたな」

「あたしも・・・きつと腹が膨れたからね。あれだけ食べれば眠たくもなるわよ」

そうして僕が完全に眠りに就く最後の瞬間に目に映っていたのは、戦闘姿勢を取って、キツと部屋の入り口をにらむ、シエルの姿だった。

|
|
|
|
|
|

「よしよし、ぐっすり眠ってるみたいだな」

「今のうちに荷物を奪って・・・」

3人の男が、こそこそと何やらよからぬ相談をしている。

「やっぱりね」

シエルは目を開けて、ゆっくりと立ち上がった。

「あの食べ物の中には、眠り薬が仕込んであった。この宿の値段が格段に安いのは、こうやって泊った客を殺して、その荷物を奪っているからだ。おそらく、あの食べ物も魔法で生み出された幻覚なんだろう？」

「くっ・・・」

まさに凶星だったらしく、男たちが一瞬言葉に詰まった。

しかし、相手はかわい女の子一人だと思いだしたのか、

「分かったところでおめーみたいな細っこいガキに何ができるんだ？」

「この宿の名前、『ギハイオの宿』だったな。逆に読むと『追い剥ぎの宿』。少々意味合いは違うものの、やってることは追い剥ぎと何にも変わってないな」

「う、うるせえ！やっちなえ！」

あー。テンプレな悪役の台詞ご苦労さん。

「お前たちに私は倒せない。今ならまだ憲兵に突き出すだけで終わらせてやるが？」

「ほーう、お嬢ちゃん、この人数相手に勝てるっても？」

ひげ面の男がそういうと同時に、部屋のドアから、6〜10人ほどのいかついおっさんどもが現れた。

男たちの体臭で、一気に部屋が臭くなった。

それに顔をしかめたシエルの様子をどう勘違いしたのか、ひげ面は「むしろせめてその仲間たちを起こしてやったらどうだ？それぐらいのハンデはやってもいいぞ」

と言い出した。

シエルは、それを聞いて静かに告げた。

「やはり、手加減はしない。仲間の力も借りない。私一人でお前らを地獄に送ってやろう」

そして、男たちに向かって剣を抜いた。

第33話（前書き）

冬休み中に40話ぐらいまで行きたいなーと思ってます。

更新早くすると中身が今より悪くなる可能性も出てくるのですが、
ご容赦ください。

第33話

「やはり、手加減はしない。仲間の力も借りない。私一人でお前らを地獄に送ってやろう」

そう言っ、剣を抜いたその瞬間、一人目の男の首が落ちた。

抜剣と同時に、風の刃を発動し、抜刀術のように見せかける。

シエルの思惑通り、男たちはきれいに勘違いしてくれた。

「なに！今の見えなかったぞ！」

わざわざ自分のほうが弱い証拠をしゃべらなくてもいいもの、と思ったシエルだが、それを口には出さない。

「うるさい。しゃべってる暇があったら手を動かせ」

今度は、体を前に倒して疾走する。

残像が尾を引いて見えるような速さで、右下から肩口へと切り裂かれて、ひげ面が倒れる。

「バインド！」

敵のおそらく魔法使いだとにらんでいた男が、拘束の呪文を唱えた途端、シエルの両手両足に、生み出されたロープが巻きついた。

強度は本人の力量によるのだが、このロープはそこその強度だった。

「ほう。なかなかやるようだな。ではこれでどうだ？—— 風の刃 葬電の地獄」

風の刃を小さめに発動して、ロープを切断。そして切ったロープを鞭代わりにして、葬電の地獄を発動する。

ふつつより多めに魔力を注ぎ込み、より高電圧となった葬電の地獄を纏った鞭が、男たちを襲う。

「グハッ！」

「ガッ」

魔法をかけた男が慌てて、自分のバインドを解除する。

ヒュッと音を立てて鞭が消えたときには、既に8人ほどが葬られ

ていた。

残り、30人ほど。

「ではもう本気で行くぞ」

男たちは、「あの仲間らしき人たちは、なぜこの状況でも起きないのだ!」と思うが、シエルが催眠の魔法をかけてあるからだ。

さすがに魔法は使えない。

使った瞬間、この宿が吹き飛び、周りに被害も出るだろう。

——私も、シレンのことを悪くは言えないな。

シエルは、内心そう思った。

「魔法は使わん。感謝しろ。いつそのこと、今のうちに降伏でもすればどうだ？慈悲深い私は、一回だけチャンスをやろう。3・・・2・・・1・・・」

数人が、両手をあげて降参の意思を示した。

が、その瞬間に違う元仲間からめった切りにされる。

「やれやれ。無駄な人殺しは好まないのだが、やってやるとしよう」

閃光が幾筋か煌めいた。

それが神速で振られた剣が光を反射してるのだと気付いた時には、男たちの首が数個地面に転がっていた。

ふつつ、こういう勝負では剣と剣が打ち合う音が聞こえるものだが、そういう音は一切しない。

つまり、防ぐこともできずに、すべて一撃で絶命してるということだ。男たちの方が。

はっと我に返った一番年長らしき壮年の大男が、素早くシエルにきりかかる。

さらに一人、血の海に沈めていたシエルは、手首を返して斬りかかってきた男の剣を弾き飛ばす。

「もう終わりか？」

「くそっ・・・」

最後まで残っていた6人の敵が降伏した。

「さて、私も寝るとする…ぐっ！」

「甘い！」

何やら若い人の声がした途端。

突然飛んできた何かが、シエルの脇腹を貫いた。

第33話（後書き）

あれ？あつさりとシエルに勝たせるはずだったのにな？

第34話（前書き）

最近更新速度を上げてしております。

おかげでちょっと反動が出るかもしれませんがよろしく願います。

第34話

「甘い！」

何やら若い人の声がした途端。

突然飛んできた何かが、シエルの脇腹を貫いた。

「なっ・・・」

決られたシエルの脇腹から、大量の鮮血が吹き出し、男たちの血で赤くなった部屋中をさらに真っ赤に染める。

血を失う痛みで薄れゆく意識の中、シエルは自分に攻撃を仕掛けてきたもののほうを見る。

「おまえはっ・・・ネルタ！」

ネルタ——シエルが最も出会いたくない相手だ。

魔力を固めて打ち出すという、一風変わった魔力の使い方のできる相手。

防御シールドとか何か全く役に立たないぐらい破壊力が高い半面、範囲が狭い。

しかし剣で攻め込めば剣先がその体に届く前に撃ち抜かれ、魔法で戦うにも何の予備動作もなく撃ち出せる弾丸相手には分が悪い。

「よう。久しぶりだな、シエル。そうだなー。一年ぶりぐらいになるか」

そして彼とシエルの最大の共通点であり、違う点。

『彼の陣営に属している（属していた）』

「彼」の手下は、すべて何かしらの特殊能力を持っているものばかりだ。

魔法が使えたり、剣の達人だったりするほかに、シエルみたいに毒物などを見分けられたりする。

ネルタの場合は、魔力そのものを操る能力だったってことだ。

「ふんっ。お前といつ会ったかなんて記憶にないな！」

ドシュドシュッ！

空気を切り裂くような音とともに、シエルの肩と足に穴が開いた。

「うっ！」

「お前な、負けを認めておとなしくするとかしたらどうだ？」

あちこちを被弾して、倒れ伏したシエルには、あきれたような声
が、天から降ってくるように聞こえた。

「な、何でお前が．．．こんなところに。しか．．．もこんな屑どもに加勢するなんて．．．．．」

「別にこいつらについたわけじゃないぞ。レイル様からの命令で、この街に来てたんだ。『もうすぐ、シエルとその連れが現れる。見かけたら即殺せ』ってな。そこで寝てるのがお前の連れか？男2人に女1人って聞いてたんだが」

「どこからその情報を．．．」

シエルの問いを聞いたネルタは、大声をあげて哄笑した。

「このまえ、そっちにおれたちの仲間が行ったろ？お前かその連れの魔法で辺りを焦土にされた時だ。あの部隊は、敵対するものの情報を得るための部隊。あの中には、瞬間移動の能力持ちも混ざっててな。焼き尽くされる前に転移したわけだ。．．．．．部隊丸ごと」

「なっ．．．．．」

自分がいた時は、そんな能力者たちはいなかった。

そんなシエルの心情を読み取ったのか、またネルタは哄笑した。

「お前はな、要注意人物としてマークされてたんだ。そんなのに内部の詳しい情報を与える馬鹿がどこにいるんだ」

なるほど。言われてみれば道理である。

自分が裏切られると思われていたことなんて、今更どうでもよかった。

「ぐっ……なるほど」

「ところで、この転がってるガキ達は？殺していいのか？」

とたんに、シエルの顔色が変わった。

「やめろ……」

シエルのあせった声を聞いて、男は満足したようにくっくつと笑った。

「ほう、じゃあやっぱりこいつらか。人数が足りないってことは、もう一人どこかに隠れてんだな。それがわかればお前にもう用はない」

これまでネルタは魔力の弾丸を、出血多量で動けないシエルのまだ無傷な手足に撃ち、痛みに苦しむシエルを見てあざ笑っていたが、ついに殺すことに決めたらしい。

——もうこれまでか………

「その通り。もう一人は隠れてたんだぜ！」

ドオオオオオオオ

轟音とともに、ネルタが吹き飛んで壁にぶち当たった。

そしてネルタを殴りとばした張本人は、両手にナックルをつけ、腕に炎を纏わせた、ガウスその人だった。

第35話（前書き）

どうも。お久しぶりです。

実は今年も正月には帰省することになってまして。

更新できないと思いますが、よろしくお願いします。

そしてよいお年を。+ あけましておめでとunggございます。
と言わせていただきます。w

第35話

シエル said

ネルタを殴りとばした張本人は、両手にナックルをつけ、腕に炎を纏わせた、ガウスその人だった。

「あれ？意外ともろいおっさんだなおい」

そう呟いて、今気付いたかのように眠っているシレンとセリアの方を見る。

「！・・・・・・起きろよおい」

ちよつといらついたかのような声音で、そういつが早いのか、どこからか持ちだした水を浴びせかける。

「つめたっ！！！！！」

「きゃっ！！！！」

さすがにいきなり冷水を浴びれば目も覚めるだろう。

催眠魔法が掛かっているとはいえ、掛けた私がここまで衰弱して

いるのだ。簡単に破れてもおかしくはない。

「やっとお目覚めか」

「・・・シエル？なぜにそんなにズタボロ？んでなんでここにガウスがいる？そしてこの部屋のこの惨状はなに？」

「ふっ」

シレンの慌てぶりが面白くて、つい笑ってしまった。

そして全身に激痛が走り、笑いが引つ込む。

セリアの方はというと、せつかく起きたというのにまた寝てしまった。

気絶・・・といった方がわかりやすいか。

「ここの宿、泊まった客から金やら何やら、全部奪い取って繁盛しているらしい。んでお前たちが催眠薬で眠らされた後、ここに押し入ってきたんでそいつらと戦ってたら、『彼』の手下の強力な奴が混じってな。そいつとは相性が悪かった故、こんな目にあつたというわけだ」

とりあえず、こうなった経過を説明する。

・・・ふう。なんとか滑らかに説明できたな。

本当は口を開くだけでもつらいのだが。

「ゴバッ」

そろそろ本当にまずいな・・・。自分では治癒魔法も使えない。

「そ、そろそろ私もね・・・とする・・・か」

そして、目の前が真っ暗になってゆき、私の意識は闇に墜ちた。

シレン said

「そ、そろそろ私もね・・・とする・・・か」

そう言って、シエルがゆっくりと眼を閉じた。

「お、おい！大丈夫か！？」

一瞬、あの世に行っただのかと思って大慌てしたが、脈や呼吸はあるようだ。

元の世界では、人命救助の訓練とか受けていても「こんなもん使う機会ねーだろ」とか友達と喋ってたが、い世界まで来て、親しい仲間がこんな目にあうなんて思ってもみなかった。

しかしまー、人が死んだかも、なんて思ってまず初めにするのが脈はかるなんて……意外と僕もあの訓練のことを覚えてたんだな。

シエルが生きてるのがわかって、ホッとしたのかそう言うとりとめもないことを考えていた。

「……んでもって、偶然ここを見つけた俺が、一発殴り飛ばしたと。まああれだけ不審な気配を撒き散らしてたらふつうに気付くわな。俺たち以外にあんなの敵に回すような奴、そうそういないだろうし、ここにお前らがいるんだろつと見当をつけてきたということだ」

ガウスの説明も、九割以上耳を素通りしていった。

「っておい、聞いてるのか？」

「いや何も」

僕の耳には、「どうかしたのか？」というように聞こえていた。

「プッ・・・お前ってホントに」

「お前らああ、よくも・・・よくも！」

こうしている間に復活したのか、またネルタが登場してきた。

「この・・・この俺が遅れをとる」

「失せろ！」

「邪魔！」

僕の方を限定した 昇華の聖光 とガウスの炎の拳が、ネルタの話を遮って炸裂した。

「ぎゃあああああ！」

キラーン

ネルタが遥かかなたまで飛んで行った。

それから2時間ほど後。

「さて、ゆっくり休めたことだし、出発するか！」

もちろん、セリアをたたき起して、治癒魔法でシエルのけがを治した後のことである。

こうして、また旅が始まったのであった。

余談だが、まだ早朝の出来事であった。

つまり、朝ふつうに起きてきたものは、なぜか建物に大きな穴があいているのを目撃することとなった。

なぜそうなったのかは、民の間でいまだに謎である。

第35話（後書き）

結構訂正させていただきました。申し訳ありません。

本筋に関係ある部分は変えていませんので、ご安心ください。

では今年も、この駄作に付き合ってくださいる運命になる方がたに祈って。

第36話（前書き）

遅くなつてすみません。

第36話

「平和だ・・・・・・・・」

僕がそう感慨深げにつぶやいているのにもわけがある。

あの宿屋の事件からもう二ヶ月たった。

梅雨というものがこの世界にはないので、爽やかな初夏の風が毎日楽しめる。

このときだけは、異世界に来て本当によかったと思う。

二ヶ月間、何の事件も起きず、途中寄った2、3の街でも、（山賊退治を頼まれたり、魔獣退治をさせられたりとか以外）なにも問題がなかった。

僕は決して勇者じゃないから、その存在をあまり知られていない。

ただ、ギルドに登録して、金を稼がないといけないこともある。

そういうとき以外、平和で楽しく順調に旅を続けていた。

しかし、それを快く思わない者が一人。

「平和なんて性に合わねー！ー！」

もちろん、ガウスのことである。

「まあ、平和なのは喜ぶべきことだよ」

「私は何も困っていない」

「あたしは平和が好きだよ」

よくあることだが、皆から一斉に反論を受けたガウスは、またいじけてしまった。

ヒュウッ

突如吹いてきた風が、辺りの木々を揺らす。

それがさらに虚しさを演出している。

いじけたガウスを放置して、僕たちは次の目的地、ガルディストに向かつていった。

そして、そこで問題に直面した。

「金がない……………」

そう、この前寄った町で、干し肉や果物、薄い服などを購入したため、手持ちの路銀が底を尽きたのだ。

ギルドで仕事を探そうにも、この街のギルドに登録できるだけの金すらない。

「え？またギルド行く？」

「街ごとに登録しなきゃならないけど、そんなことする金すらない・
」

登録料が、意外と高いんだなこれまた。

それだけで干し肉が十日間分ぐらい買いこめる。

日本円にして、5000円ぐらいだろうか。

「どうすんのよ・・・・・」

セリアが途方に暮れたような声を出すが、本当に何も思いつかない。
い。

しいて言えば、

「まじめに働け」

「・・・ふざけてんの？」

はい却下。

「強盗でもする？」

「なめてんのか」

また却下。

「乞食にでも・・・いたっ！」

今度は無言でぶんなぐられた。

そこに、先ほどと同じ風でも救いの風が吹いてきた。

何やら飛んできたチラシには、こう書いてあった。

『武闘会開幕！参加者求ム。賞金は金貨15000枚！参加条件は、2人組であることのみ！』

|
|
|
|
|
|
|

「もう優勝はもらったも同然だな！」

じゃんけんのルールを説明し、勝ったシエルとセリアペア、僕とガウスが組んで出ることになった。

「あたしたちか、シレン達が勝つのはほぼ確定だね」

「油断は禁物だよ。って、僕も負けるとは思っていないけど」

受付締め切りが近いため、今必死で走っているところである。

「はい、受付はこれで締め切らせ」

「「「間に合った!」」」」

「は、はいどうぞー」

受付嬢の50メートルほど前から、大声を出して割り込み。

申し訳ないが、今後の生活がかかっているので許してください。

多分、50メートル先からでも僕らの顔は恐ろしく見えたことだろう。

残りの距離を一気に駆け抜け（目立つから魔法は使わない）用紙に記名を終える。

「はい、あなた方の待合室はこちらです。ご自由に試合開始までおくつろぎください」

そう言って案内されたのは、直径20メートルはありそうな大きな円形の部屋だった。

壁はすべて大理石できていて、天井には大きなシャンデリアが掛かっている。

ついでに言うと、部屋にある白いソファもいかにも高級そうな感じである。

部屋の中には、いかにも傭兵ですって全身で主張しているような男たちや、ボンテージ鎧を纏った女戦士たちが何人もいる。

僕らみたいな子どもに見える人たちは誰もいなかった。（一応元の世界の高校生ぐらいだからね僕ら）

「試合開始まで、後5時間ぐらいか。……………寝るか」

僕はそう思ってソファに転がった。

のだが。

「おいぼっちゃん、ここはお前らみたいなガキが来るところじゃないぜ。さっさと失せな！」

顔を赤らめた酒臭いおっちゃんが、こともあろうに僕らに絡んできやがった。

「はいはい。本選でぶつかったらぼこぼこにしてあげるから黙ってる」

僕としては軽くあしらったつもりなんだが。

「なんだとう！お前、この俺様に喧嘩売ってんのか！」

「いやいや、売ってきたのそっちでしょ、買ってあげようか？言っておくが、試合前にどこか怪我しても全く保障しないからな」

「望むところだ！おいヘイン！やるぞ！」

ズデッ

「一人で来るんじゃないのかよ……ださっ」

思わずソファから滑り落ちてしまった。

「おいおいケヴィン。やめとけ。こんなガキにマジになることねーだろ。むしろこいつらと当たったら、一回分勝ち進めてラッキーじゃないか」

イラッ

始めの方こそ、うんうんとうなずきながら聞いてたが、後半には腹が立った。

「あーもう、ちょっと周りの皆さん10秒ほど目をつむっててもらえます?」

どうせ子供の遊びだろうとか、ビビって漏らすの見たらたくないんだろっからいうこと聞いてやるっぜとか、そういついろいろなさやきが聞こえてきたが黙殺する。

中には、警戒心をむき出しにした奴もいるようだが。

「星斬流×炎系魔法 灼裂波^{しゃくれつぱ}」

抜刀と同時に、刀に溜めた魔力を使い、炎を帯びた攻撃で敵を切り裂くと同時に、軌跡に沿って炎の塊が飛んでいき、次なる敵にぶつかると爆散してその身を焼く。

もちろん殺さないように威力を絞って、ケヴィンとかいう奴の相手の斧めがけて放ったのだが、それでも弾き飛ばされた巨体が壁にヒト型の1/1スケールの穴をあけ、気絶したヘインの体からは、ぷすぷすと煙が上っていた。

実質、1秒もかかっていない。

「みなさん、もう目を開けても大丈夫です」

そういう声が聞こえただけで驚いた奴が半分ほどいたが、（大方、僕が倒れて口もきけないだろうと思ってたな）次に目に飛び込んできた光景を見て、今度は全員の顎が落ちた。

第36話（後書き）

一回で終わらせるはずだった日常編が、何と意思も掛けず長くなつてしまいました。

・ ・ ・ ・ ・ え？このどこが日常なんだって？一応、次から本格的に違う章に入りますので。

いろいろな謎が解明されていく予定？なので、お楽しみに！感想、ポイント評価お願いします。

第37話（前書き）

更新遅れてすみません。

第37話

「こ、これはぜんぶおま・・・じゃなかったあんたがやったのか？」

一番ケヴィンたちの近くにいた赤髪の男が、代表して近くの方の疑問であろうことを尋ねてくる。

厄介事は嫌いだから、ここはあえて真実を伏せておこう。

「いや、半分ぐらい彼らの自爆で、残りの半分が僕ら4人でやったこと」

とたんにあたりが安堵の空気に包まれる。

「そうか。そうだよなあ。でもこれだけのことができたんだ。お前らももう立派な戦士だなあ。これはなめてかかれないぞ」

そう笑って見せたのも、さっきの赤髪の男。

意外に人の良い性格のようだ。

「僕たちは少しでもお金を稼ごうと思ってここに来たんですが、やっぱり無謀でしたか」

僕も（かなり腹黒い意図をもって）笑いかけた。

少しでも弱そうに見せかけておくのが目的。

そうとは知らない赤髪の男と僕は、はっはっは！と笑い合った。

後ろでジト目をした3人がいるが気にしないでおう。

「あ、そうそうおれの名前はケイル。よろしくな！お互い一回戦でぶつからなければいいんだが」

「そうですねー。僕の名前はシレンです。戦うときは手加減をお願いします」

「手加減はいらないだろ。おれの相方がこいつで、名前はエリン。おれの女房だ」

「誰があんたの女房なのよ！」

これまた赤い髪の、そこそこの美人がケイルをいまにも殴りかねない勢いで罵倒している。

「だ……が……の！」

「この禿おやじ！」

「しまいにはむしり取るよこの野郎！」

「小さい頃は背中に毛虫が付いただけでもわんわん泣いてたくせに！」

「だいたいあんたは！……以下略」

聞いているほうが耳を押さえなくなるのだが、当の本人は涼しい顔をしている。

あ、しまいには口に手を当てて、あくびまでしだした。

「そんないつも同じことばかり言ってて良く飽きねえなあ。聞いてるこっちが眠く……なってくる」

「なにを！お前が小さい頃はこれにビビッて、小便漏らしてたくせ

に！」

とたんに、ケイルの顔が、髪の色に負けないぐらい真っ赤になった。

「う、うるさいー！」

「ほーら言い返せないじゃないの」

まるで勝利を確信したかのようなエリンの表情が、次のケイルの一言で、これまた真っ赤になった。

「はあ・・・お前も昔は可愛かったのになー。『あたしは大きくなったらケイルのお嫁さんになるー！』とか言ってたのになー。おれは一応お前の夫になる権利があるんだぞ」

「んなつ！そ、そそそそんなこと言っていないわよ！」

「言っただろ。何そんなに慌ててんだ？昔のことじゃないか」

まったく・・・この人たちはこんな公衆の面前で何を始めてるんだ。

見てる分には面白いけど。

「ねえおじさんおばさん。今の二人みたいなのをなんていうか知ってる？——痴話げんかっていうんだよ！」

「何を言うか！子どもがかかわる話じゃないぞ（わ）」「」

この前誕生日が来たから、一応は一六歳なんだけどな。ちなみにシエルが一七歳で、ほかは皆一緒。

「真似するな」「」

「そつちこそ！」「」

あー。似たようなやり取りを最近見た覚えがあるぞ。

「時にセリアとガウスあれを見てどう思う？」「」

二人の顔も、エリンたちと同じ色に染まった。

――

「では、これより第四三回、武闘会を始めます！の前に少しスピーチを」

「「「「いらん」「」」」」

「「「「帰れ！」「」」」」

「「「引つこめこの野郎!」「」」

あちこちからヤジが飛び、缶や石ころなどが司会者に雨あられと襲いかかる。

中には、短剣を投げつけたり、魔法を放ったりした者もいたが、何とか司会者の体には傷が数十個で済んだ。

え?そこは無傷じゃないのかって?

当たり前でしょ。魔法や剣をくらってなんで無傷なんだ、そんな奴いたらそいつがこの大会で優勝だ。

まあ僕にそんなもので傷をつけるのは難しいだろうけど、強化魔法がない状態で当たったら当然怪我はするね

そんなの飛ばすような奴は、それが僕に届く前に自分の首が飛んでいることを覚悟したほうがいいな。

「ゴホン・・・・・・・・・・それでは改めて組み分けを発表するぜ！」

僕とガウスは、Aグループの四番試合、シエルとセリアは、Bグループの十一番試合だ。

ついでに、ケヴィンたちは棄権で、ケイルとエリンはAグループの十番。

「残念・・・ケイルたちとは決勝で戦いたかったのに」

「でも、あたしたちと決勝で当たることはありそうね」

まったくもって、セリアの言うとおり。

相当な確率で決勝で戦うことになりそうだ。

「……………心の準備をしておけよ」

僕は、こそつとガウスにつぶやいた。

「シエルかなり強いから、たぶん一瞬でやられるぞ、セリアの相手頼むな」

「了解！」

おい、少しはためらえよ。

あまりにも即答するガウスを見て、僕は内心大きくため息をついた。

|
|
|
|
|
|
|

「では、Aブロック第四試合、シレン・ガウスペア対グレイン・トルティーヤペアの対決を始めるぜ！」

第37話（後書き）

何と、またまた終わらなかった・・・申し訳ありません、次こそ！

第38話（前書き）

疲れた・・・。

もうすぐ冬休みが明けるので、そしたらまたしばらく更新できなくなると思います。すみません。

第38話

「では、Aブロック第四試合、シレン・ガウスペア対グレイン・トルティーヤペアの対決を始めるぜ！」

東入り口からは、魔術師のローブをまとった男と、上半身裸の筋肉まみれの男が登場した。

それぞれ、手には杖と斧を持っている。

「魔術師のグレイン、神速の斧使い、トルティーヤ！」

審判が相手の紹介をする。

「おれはこのチームに金貨500枚をかけるぜ！」

「あたしは銀貨200枚で結構」

そついった声がどこから聞こえてくる。

「……………どうやら、この闘技場では賭けも盛んらしい。

「対するは、実力不明のブラックボックス、シレンとガウス！」

どつと嘲笑の聲が上がった。

観客も、この試合には興味を無くして、同時に行われているほかの試合のほうに注目した。

まあ、こんな大男と僕らみたいな年の子ども？が戦ったって結果は見えている———と思っても仕方ない。

「ほう、お前らが一回戦の相手か。余裕だな」

「そっくりそのままお返すよ」

相手が両手の骨をボキボキと鳴らすが、平然と睨み返す。

「では、Aブロック、第一〇第八試合、はじめ！」

合図と同時に、ガウスが両手に炎をまとわせて突進した。

その先にいるのは、魔法使いのグレイン。

強化魔法で身体能力が上がっているため、一瞬で間合いを詰めて、下から突き上げるようにしてグレインの鳩尾に殴りかかる。

「「「もらった！」」」

そこに、トルティーヤがあのだ体からは信じられないほどの高さまで跳躍し、斧を振り下ろす。

うわー。跳ばなくても普通に振り下ろせばいいのに。

「 氷の槍」

グレインが唱えるのと同時に、彼の足もとから氷でできたとげがいくつもせりあがって、ガウスを襲う。

ガウスはニツつと笑うと、左手の指を鳴らす。

無詠唱の魔法が発動し、ガウスの足もとからも、炎が同心円状に広がっていく。

ガウスが無詠唱の魔法を使えたなんて、今はじめて知ったが、そんなことを考えている暇は・・・あるか。

ジュワッ

高温に熱した鉄を冷水につけたような音とともに、両者の魔法が相殺される。

一方、ガウスの拳は止まらない。

「束縛」

僕は犬男のほうに、体の自由を奪う魔法をかける。

「インベディメンタ
武装解除」

トルティーヤが振り下ろしたはずの斧が、彼の手から離れて、近くの地面に突き刺さる。

「風の刃」

僕の魔法によって生み出された風が、鎌鼬かまいたちのようにトルティーヤとグレインに襲いかかる。

この試合、人を殺すのは反則になるので、かなり威力は弱めだ。

「っらぁ！」

ガウスの拳がクリーンヒットして、グレインの体が逆くの字型に曲がって宙に浮く。

「がはっ」

「ガウス！伏せろ！ 突風」

突き出した僕の両手の前に、風が集まってくる。

「これでとどめだ！」

僕が声を上げると、撃ち出された高密度の風圧が二人を吹き飛ばすのが同時だった。

二人とも闘技場の壁にぶつかり、意識を手放した。

「えー、勝者、シレン・ガウスペア！」

観客席からの歓声とともに、幾枚もの賭け札が宙を舞った。

どうやら魔法を使っていたのが僕らの他に一組しかいなかったらしく、途中からその二つに観客の視線が集中したということらしい。

観客に混ざって（いや、彼女らも一応観客だが）試合を見ていたセリアとシエルからの情報では、多分僕らに賭けたのは、さっきの部屋にいた人たち数名で、その人たちは十五年間は悠々と遊んで暮らせるだけの金を手に入れたそうだ。

「私たちも賭けたぞ。おかげで………」

待合室ではなく、個室である選手控え室に戻った後、そう言ってシエルが肩にかけていた袋の中身をぶちまけた。

ジャラジャラジャラ

大きな音を立てて、目の保養になるほど大量の金貨が姿を現した。

「……………！これはもう負けてもいいのかな？」

「ダメ。優勝賞金ももらう。あと、あんたたちも賭けなさいよ。私
たちも必ず勝つから」

これで優勝賞金までも手にしたら、今度は強盗とかに注意をしな
ければなくなるな、っと心の中で思った。

その後、次の八組でAブロックの予選は終了し、ケイルとエリン
は見事勝ち残った。

「おっす。やっぱり二人も勝ったか」

「もちろんです」

控室の廊下で、肩にタオルを巻きつけて汗を拭いているケイルと、ぴったりとそのケイルに寄り添っているエリンに出会った僕らは、内思いいきり突っ込みながら表面上は礼儀正しく挨拶をした。

「次はこの可愛い娘たちの勝負か。――できれば、この綺麗な顔に傷がつかない用に、今からでも棄権したほうがいいんじゃないか？」

セリフの途中で、エリンに思いつきり睨まれながらも、最後まで言い終えたケイルは、耳を思いつきり引っ張られて「ちょっと話があるわ」と連れて行かれた。

「大丈夫！試合に出てもけがなんかしないから」

セリアも、可愛いと言われたことがうれしいのか、ちょっとテン

シヨンが上がっていて、子ども扱いされたことも、あまり気に留めていないようだった。

一方のシエルは、あの軽薄男・・・とあきれてため息をついていた。

「やれやれ・・・そろそろ私たちの出番だ。行くぞ、セリア」

「はい。じゃあ行ってきました」

その後もスキップしながら歩くセリアをたしなめながら、シエルが闘技場内に入って行った。

ふと隣を見ると、次に戦うことになったらケイルをぶちのめしてやると言わんばかりの形相で、彼らの消えた方向を睨みつけていた。

廊下を通る人たちがおびえて、僕ら（！）を迂回するように歩いているのだが、それにもガウスは気付かない。

「えーっと、僕はこの人と無関係です人違いです」

弁明してみるが、あまり効果はない。

仕方なく、魔法で拘束したガウスを控室まで耳を引っ張って連れて行った。

道行く人たちが、「………デジャヴュ……」とかつぶやいていたが気にしない気にしない。

しかし、それでもまだ顔色一つ変えずにケイルたちの控室をにらみつけてるんだからすごい。

――――

で、何とかガウスを落ち着かせると、僕たちも魔法を使って、猛ダッシュで観客席へと向かった。

途中、何人か握手を求められ、何人かが因縁をつけてきたが、前半は一瞬だけ握手をして、後半は蹴散らして、観客席にたどり着いた僕たちは、ちょうどシエルたちの試合がよく見えるあたりにある空席に座った。

「お、シレン君にガウス君じゃないか。さっきの試合、すごかったねー」

隣の席の、バトルスーツをまとった美女が話しかけてきた。

「いえ、そんなことは」

僕が口を開く前に、鼻の下をのばしたガウスが我先にと返事をする。

面白い・・・あとでセリアに言いつけてやるっと。

「謙遜なんてしなくていいぞ。なかなか見事だった。お、君たちの友達の試合が始まるぞ」

言われて、ガウスがあわてて美女から目を離して彼女たちのコートの方を見た。

僕は、近くを歩いていた関係者っぽい人に、先ほどもらった金貨全部を渡して、シエルたちの賭け札を貰い、しっかりとそれを握りしめた。

隣の謎の美女も、おなじくシエルたちの札を貰っている。

「ホーク・アイ
鷹の目」

とりあえず、試合に集中するとするか。謎の美女の正体はまたあとで考えよう。

双眼鏡代りに、僕は自分の目に強化魔法を施し、視力を底上げして観戦することにした。

さて・・・セリアの修業の成果を見せてもらおうか。

セリア said

「さて、あいつらにいいところを見せるためにも、この試合、何があっても勝たなくちゃね」

「そうだな。決勝で戦う約束もあるからな。それを破るわけにはいかない」

一昔前のあたしなら、すぐにやられただろう。

でも、無傷で勝って帰ると約束したからには、あたしが負けるわけにはいかない。

ここ最近の修行の成果を見せるときが来たわね……。

おそらく、四人の中でいちばん戦力にならないのがあたし。

だから初めてシエルの戦いぶりを見た日の晩から、皆が寝静まった頃、こっそりと魔法の修行と研究を続けてきた。

生まれつき使える魔法の属性は限られている。

あたしの場合、風と水。

シエルとシレンは全部の属性、亜属性が使えるけど、そんなのは

本当に稀。

なら・・・・・・・・

「風と水から、ほかの属性のものを生み出すことは出来ないかな？」

まず、これはシエルとシレンが寝た後に、ガウスとこっそり無詠唱の魔法を使う練習を始めた。

これはあたしたち二人とも、二週間ほどでマスターできた。

あたしは、二つの属性の中でも上級魔法までなら無詠唱で使えるようにもなれた。

ちなみに、低級、中級、上級、最上級、究極の五種類がある。

くの刃とかはすべての属性にあって、束縛とかは魔法を使うものすべてが使える。

たとえばガウスなら炎のロープで拘束するけど、あたしは風か氷の足枷手枷で拘束する。

おっと、話がそれた。

無詠唱の魔法が使えるようになった時点で、ガウスはもう修練を離脱した。……情けない。

そんなガウスを放置して、あたしは自分の使える魔法を増やす訓練を始めた。

まず、雷の亜属性魔法はもとも使える。風と水の亜属性が雷だからね。

だから、雷をおこして、そこから出る火花を元に、風属性魔法を利用して、大気中の酸素濃度を調節し、敵の近くまで火花を導火線のようにして送る。

そして、敵の周辺まで来たときに、酸素を大量に送りこんで爆発させるか、風で砂とかをばらまいて粉塵爆発をおこす。

一応こういう風にすれば、水と炎で体を覆って接近戦もできる。

これはガウスを見て参考にできたからすぐにマスターできた。

次に考えたのは、味方の防御について。

ガウスもシエルも、攻撃は得意でも防御はふつつ。

シレンに至っては全く駄目。『攻撃は最大の防御なり』とかほざいていたぐらいだ。

だから、あたしが防御を担当すれば問題ない。

これもまた、近くの木に強烈な風圧を纏わせて、こそつと借りたシレンの刀で、切れるかどうかを試してみた。

刀は剣と違って、斬るのを目的とした武器。剣はその重量で相手をたたき折るような戦い方だから、この実験には刀のほうが向いている。

実験開始から30分が経過し、十五センチほどの風圧で、ようやくシレンの刀が通らなくなった。

もつとも、非力なあたしと違って、筋肉がものすごく付いているような敵なら、剣でももう少し威力があるだろうから、戦闘中は常に二十五センチの風圧を三人分維持できるようにするまで訓練を続けた。

これは、三週間ほどでクリアできた。

魔力の量は、訓練次第で増えるとか授業中に聞いた覚えがあるが、本当だったらしい。

そして最後に、あたしにもオリジナルの魔法がほしい。

シレンは星屑の雨とか色々使えるし、ガウスも炎魔法に関してはすでにシレンを追い抜いている。

シエルは剣の腕が超一流で、これまたシレンを上回っている。

破壊力はもうこれ以上増やす必要がないから、治療とか防御にあたしは専念するべき。

治癒魔法はもともとあまり使えなかったが、炎を利用して傷口の

細菌を殺し、風の魔法で縫合し、水の魔法で怪我を癒やすための修行もした。

水の魔法には治癒系のも多かったため、意外と苦勞することなく覚えられた。

ついでに、雷によって生じる稲光を改変し、癒しの光とすることによって光属性の治癒魔法も模倣できるようになったのだが。

「では、Bブロック、第九試合―第一六試合、始め！」

自分たちがどういう紹介をされたのかは、回想に夢中で全く聞いていなかった。

試合開始と同時に、シエルに風圧の守りを張る。

それに気づいたのか、一瞬シエルが驚いたような表情をするが、すぐにその風圧の効果を悟ったのか、敵に向かって疾走する。

敵は大剣使いと双剣使い。

……この試合、もらった。

「フラッシュ
閃光！」

雷の中級魔法、閃光。

文字通り、強い光で相手の目をくらませる魔法。

魔法使いがないパーティなんて、敵の魔法に翻弄されるだけだ。

先ほどのガウスをまねて、パチツと指を鳴らす。

導火線が伸びていき、敵の後方までたどり着く。所有時間、およそ一秒。

ドゴオオオン

鋭い爆音とともに、爆風が彼らを背中から襲う。

そしてあたしは風魔法を得意としている。

爆風にくわえ、魔法で生み出された風が、双剣使いの姿勢を崩す。

そのすきにシエルの長剣が彼の首筋に当てられる。

「降参だ」

双剣使いは、自分の負けを認めておとなしく降参した。

残るは大剣使いのみ。

こちらは大剣を地面に突き刺し、杖の代わりにして体を支え、それでシエルの一撃目を防いだ。

「りゃあ!」

地面から抜いた勢いそのままに、長剣を振り下ろし、無防備になったようなシエルの横腹を薙ぎ払う。

シエルも飛び下がってよけようとしたが、大剣の間合いからは逃れられない。

よって、シエルはモロに横腹に剣を食らうことになった。

これがまともに入れば、致命傷は確実。

よって彼らの反則負けになるのだが、代わりにシエルの命はない。

「おいっ！」

それがわかっていているのか、シレンの慌てたような声が遠くから聞こえる。

思わず振り向くと、飛び出そうとするシレンをガウスが押さえているところだった。

そして、時間がゆっくりとながれ、シエルに大剣がめり込もうとして……………

「なに？」

止まった。

「セリア、援護感謝する！」

体勢を立て直したシエルが、地面を踏み台に、飛びのいた勢いに乗って、さらに早く前方へ跳躍する。

「はあああっ！」

見事なとび蹴りが大剣使いの顔面にヒットした。

「ぶっ」

男は鼻血を盛大に吹き上げながら、あり得ないほど飛んで行き、先ほどシレンが敵をぶつけたのと同じ所にぶつかって、同じように気絶した。

それはいいのだが・・・シエルは自分の格好がわかっていないようだ。

「ミニスカートに近い服装であの蹴りはないでしょ・・・？」

思わずつぶやいたのが聞こえていたのか、一瞬固まった後、ゆっくりと下を向いて、自分の服装を確認した後、ケイルたちと同じように顔が真っ赤になった。

「勝者、可憐な女戦士、シエルとセリア！」

「ちょっと！その呼び方恥ずかしいからやめてーーーー！！」

――

シレン said

「なっ！」

シエルを薙ぎ払うように大剣がふるわれるのを見て、僕は思わず席を立ちあがりかけた。

しかし、ガウスが僕の肩を押さえつけていたせいで、それはなされなかった。

「やめとけ。これは試合なんだから、俺らが止めに入るのは無理だ」

「しかしっ……！」

「それに、見る。セリアの防御がしっかりと効いてるぞ」

言われて、シエルの周りに目を向けると、風の守りが働いているのがわかった。

でも、今度は新しい疑問が一つ。

「いつの間にセリアはあんな技を？」

夜中に修行をしていたのは知っていたが、（僕の刀には盗難防止用の軽い結界が張ってある）てっきり刀術の訓練か何かだと思っていた。

「実は……（以下略）というわけだ」

僕は当然こんなことは知らないが、先ほどのセリアの回想とほぼ同じ内容の説明がガウスによってなされた。

「なるほど・・・頭いいんだなあいつ」

炎に関するくだりはどこかで聞いたことのあるようなものだったが、思い出せない。

それにしても、酸素濃度をコントロールしたり、新しい方法で魔法を使ったりと、学校の先生が聞いたらショック死するほどの実績をこの二カ月の間に積み上げているなんて、かなり驚いた。

「そのまま論文にして発表したら、それこそ今までの魔法教育が一変するんじゃないか？」

僕が思ったことをそのまま口にした。元の世界なら、ノーベル賞は確定だ。

「そうだな。この旅が終わったらそれこそ本当に試してもらえ
勝者、可憐な女戦士、シエルとセリア！」

ガウスの返事と、審判の宣言が重なった。

コートに目を戻すと、無傷の二人が立っていて、心の底からほっ
とした。

そして、なぜかシエルの顔がさっきのケイルとエリン、僕がから
かった後のセリアとガウスぐらいには赤くなっていた。

「何か？今日は顔を赤くするのが流行ってるのかな？」

ガウスに聞いてみても、返事はなかった。

第38話（後書き）

本当にすみません。一話で終わる予定だったのに・・・なぜかこんなに続いてしまいました。

そのうち日常編から変わって、本編につながる要素が入ってくるかもしれません。どうかご容赦ください。

第39話（前書き）

何とか今日中に番外編を終わらせたい・・・

第39話

「では、Aブロック決勝戦を始めるぜ！」

司会者が、声高に宣言する。

Aブロックの決勝に残ったのは、僕とガウス、ケイルとエリン、サーシャとメイ、トスカーとキンブリーの4組。

得物の紹介をすると、ケイルとエリンは、剣と鞭。サーシャとメイは水と光の魔法使いのコンビ、トスカーとキンブリーは、チャクラムと火の魔法使い。

「ルールは簡単、この4組が同時に戦って、最後まで残ったチームがAブロックの代表だ」

うわっ。本当に簡単。

「もちろん、殺すのは禁止。そうでなければOK！制限時間は一時間だ！では3・2・1」

「水龍召喚！」

まずは魔法による先制攻撃。

僕のいる西陣地には竜巻が、サーシャたちのいる北陣地には水でできた龍が姿を現した。

そして、戦場全域に、天空から光の柱が撃ち出され、あたりは炎で覆われた。

時々手裏剣とブーメランが混ざったような特徴をもつ円盤が宙を舞う。（これがチャクラムという武器だ）

ちなみに僕はほんとの決勝まで、風の魔法以外使わない気にいる。

「風神の吐息」

風属性の最上級魔法、風神の吐息。

僕の後ろに緑色の魔法陣が現れ、一度発光すると、そこから強烈な風が発せられる。

魔法陣に傷がつくまで、この風は止まらない。

魔法使いのいないケイルのパーティは、まだ何も攻撃をしてない。

そんな彼らが初めて動いた。

「
闇の付与
」

エリンの持つ鞭から、暗いオーラが発生する。

「闇の触手」
「[illegible]

闇の触手。

それは、すべての武器を伸縮自在にする魔法。その最長距離は、
一〇〇kmにも及ぶ。

闇の最上級魔法だ。

鞭にそれがかけられたということは・・・

ヒュンッ

風を切るような音とともに、あたりの壁に亀裂が入った。

そう。事実上この戦場全域が、触れた瞬間に体に毒が入り意識不明になり数時間後に死亡する、彼女の鞭の間合い。

今ここにいる誰よりも、破壊力は高い。

「そろそろ反撃と行きますか」

ケイルの持つ剣も、シエルの長剣の十数倍の長さになった。

闇の触手を同時発動・・・・・・・・？

どんだけチートなんだよ！

「風神の吐息 ライトニングボルト」

「女神の盾」

細くてスピードのある鞭を、風圧で押し返すのは大変だ。

でもセリアがやったように体に風圧をまえば、体に鞭が巻きつくのだけは避けられる。

ヒュンッ

バシッ

彼女の鞭が振るわれるたびに、ほかの人の服が裂け、血がにじむ。

そんな中、ガウスが一人、ニヤッと笑った。

「炎弾の射手 装填」

人差し指だけを伸ばした状態で、手を前に突き出す。

そしてその指を中心に、赤く小さい魔法陣がいくつも展開される。

「発射！」

ガウスの号令とともに、高熱の炎の塊が、いくつも連射される。

炎の弾の向う先は、光輝く女神の盾の中心、鞭を持つエリンの手、ケイルの剣の柄。チャクラムが入った袋。

パ
リ
イ
イ
イ
イ
イ
ン

澄んだ音とともに、女神の盾がばらばらになって落ち、闇の触手の鞭がエリンの手からはじけ飛ぶ。同時に、闇の触手の効果も終わった。

闇の触手付きの剣の柄が焼き切れ、ごとりという音をたてて握っている部分から先が落ち、地面に剣先が突き刺さる。同じタイミングで、チャクラムの入った袋も、中の金属が溶けたただの金属の塊となって落ちる。

「ガウスすげー」

正直、僕今回あまり役に立っていない。

「どうだ、俺だって修行は積んでたんだぜ？」

確かに、コントロールに欠けるガウスがここまで精密な射撃をするとは思わなかった。

「次は僕の出番だね……… 星屑の雨 ……！」

僕の編み出した、望む範囲に隕石をあり得ないほどの速さと規模で落下させる。

ドガアアアアアン

ボコオオオオオオン

あたりにクレーターがいくつも生まれる。結局何もしなかった水の龍に直撃し、一瞬で蒸発させた。

「風弾の射手！」

ちよつとガウスの真似をしてみた。

十本の指先に一つずつ、高密度の風圧が出現する。

「いっけええええええええええ！」

シュウウウウン

十発の弾丸が、六人の額と、まだサーシャたちとキンブリーが持っていた杖、そしていつの間にか持ち主に拾われていたエリンの鞭にぶつかる。

脳に強い衝撃を受けた六人は全員軽い脳震盪を起こして気絶し、杖はその核が無残に壊れ、鞭は先端が千切れて飛んで行った。

「勝者、シレンとガウス！」

観客席から、大歓声が上がった。

――

Bブロックのほうは、セリアの風圧で全員が動きを止められたあと、一人ずつシエルが鳩尾を殴って気絶させていくという何とも情けない結末に終わった。

ところが、観客は黒髪の美少女が悠々と戦場？を歩いている姿に魅了され？（シエルのどこにそんな要素があるのかさっぱり分らないが）文句の一つも出なかった。

圧倒的に男性が多い観客たちは、「シエル！シエル！」とか言い出して、不機嫌そうな顔になったシエルが、ちよつと報復を開始しようとしたのを、セリアが必死に止めていた。

ずるずると会場から退散させられているシエルは、先ほどの僕が耳を引っ張って行った時のガウスに似ていたとか似ていなかったとか。

「待ちに待った、Aブロックチャンピオン対Bブロックチャンピオンの試合を始めるぜ！」

オオオオオオオオオオオオオオオ

観客の熱気も最高潮で、あたりにものすごい歓声が鳴り響く。

いつの間にか、観客が二倍ほどに増えている。立ち見の人まで大

勢いる。

「シレン・・・これで、一番初めに会った時の借りを返す」

「まだ根に持ってたの!？」

そういえば、初めて会ったときは、シエルをぼこぼこにして倒したあと、部屋の掃除を押し付けて自分が寝てたんだっとな。

「ガウス・・・あんたとは一回本気で勝負してみたかったんだあ」

セリアの手の関節をパキパキと鳴らしている姿は、初戦の斧使い、トルティーヤなんかよりもよっぽど決まっている。

「おいおい。半殺しにするのは勘弁だぞ」

セリアの相手をしろと言ったが、ガウスの首筋からは冷や汗が

垂れている。

「さて、この美少年美少女対決どちらが勝つのでしょうか！」

「「「もうちょっとましな司会しろ！」「「「

威力を加減した幾属性もの弾丸が、司会者を襲う。

観客席からは、どっと笑いが起こった。

「それでは、最終決勝戦、はじめ！」

「墮天使の業火！」

観客にどよめきが走った。

僕が風と雷の属性しか使えないと思っていたんだろう。

それが、炎の究極魔法ときたら、そりゃあ観客たちの反応もうなずける。

星屑の雨は、ガウスの手柄として広まっていたことだしな。

まあ国に所属する魔術師でもなければ究極魔法などまず使えない。

ましてや、ほかの属性の魔法も使えるとなれば、国がサッサと勧誘に来るはずだ。

さらに、長つたらしい詠唱がなくても究極魔法を発動させられる人なんてまずいない。

僕が出現させた業火が、シエルたちに襲いかかる。

それを阻止しようと、シエルも負けじと相反する属性の究極魔法を発動させる。

「《アトランティスの復讐》！」

「どんだけーーーーー！」

観客の一人が、思わずといった感じで叫んだ。

周りの人も、なんだこいつというような感じではなく、むしろその観客に同意しているようだった。

あれだけの剣の達人が、究極魔法まで使えたのだ。もう驚く以外の何がある？

「墮天使の業火！」

「「！」「」

僕も驚いたが、僕の背後にいたガウスが、僕と同じ炎の究極魔法を放ったのだ。

「アトランティスの復讐！」

しかしこれまた予想外の人物によってもたらされた洪水によって打ち消される。

そう、セリアまでもが究極魔法を使えるようになっていたのだ。

「「「!!!」」」

観客の顔がものすごいことになっている。

驚愕で顎が落ちたというのはまさにこういう顔だろう。

その後も、僕が刀を抜いて戦ったり、ほかの属性の究極魔法が飛び出したりする度に観客が驚いていたが、面倒なので割愛。

「まさかお前らまでこんな魔法を使えるようになってたなんてな」

「だから言つたる？修業を積んだんだよ」

僕とシエルはファンタジーの反王道を行っている存在だが、ガウスとセリアは、王道に従つて地道な修練を積んでレベルを上げている。

「手加減ナシだ！ 星屑の雨！」

隕石があちこちにクレーターを作る。

シエルたちの直撃コースにあつた隕石は、すべて風圧のクッションに包まれて、ゆっくり穏やかに、シエルたちを避けて落ちて行った。

「ガウス！少し時間稼ぎを頼む！」

「了解！」

ガウスの両手が輝く。

その手をふるうたびに、シエルたちの近くで爆発が起こる。

パチッ

セリアの炎属性魔法が発動し、導火線を伝って僕らの近くで爆発する。

「これでどうだ！ 神々の終焉！」

破壊力では星屑の雨を下回るが、これは風圧での防御ができない。

一瞬でその虹色の奔流の正体を悟ったのか、シエルの頬に冷や汗が伝う。

「これがあのアドバンスドスリードラゴンを倒した魔法ってわけ？」

「そうだよ！」

セリアの疑問に、余裕をもって答える。

「ええええええ？あれってドラゴンの攻撃だって俺聞いてたけど！」

「それは後！とりあえずセリアの相手頼むな！」

僕の魔法は、シエルが次々と繰り出す究極魔法によってうまく相殺されていた。

「墮天使の業火 アトランティスの復讐 ハルマゲドン
疾風の乱舞 昇華の聖光 漆黒の闇 !」

ここにもし戦争中の、どこかの国の役人がいたら、即座に僕らを勧誘に来るだろうな。

シエルが、魔力切れで肩で息をしているが、それをチャンスだと思っではない。

僕も大量に魔力を一斉放出したため、その反動で意識がもうろうとしている。

「ここからは接近戦で勝負だ！」

しかしなんとか踏みとどまって、シエルめがけて疾走する。

シエルも同じくこっちにめがけて突っ込んでくるのがわかる。

神々の終焉を途中で強制終了させ、代わりにその魔力を僕の刀に付与する。

シエルは魔法で光剣を生み出し、それで僕に切りかかる。

二つの魔法剣が激突し、あたりに眩しい閃光が弾ける。

「なかなかやるな！前より腕が上がったんじゃない？・・・ねえの！」

「シレンこそ・・・！」

普通の人から見たら、残像が動いているだけにしか見えないだろ

う。

お互い、肉体を極限まで強化し、猛スピードで打ち合っているのだ。

一秒間に、十合、二十合とぶつかり合う。

次第に反動と魔法で宙に浮き、空中での大激突となった。

下でセリアとガウスがお互いにもう魔力切れでへばっている。

セリアが何か叫び、ガウスが鼻血を吹いて倒れたが、そんなことにかまっている暇はない。

初めはお互いに避けられていたものの、だんだんと服が裂け、傷が増える。

「そこだっ！」

「もらった！」

僕の頬が裂け、シエルの首から血が流れる。

シエルが剣を振り下ろした瞬間、飛翔魔法を発動し、飛び上がった、刀を構える。

あり得ない素早さで手首をひねって剣を返し、上に剣を構えるシエル。

「違うね！」

上から切りかかると見せかけて、左から右に払う。

「ふっ！」

大剣使いのときと同様に飛び退いたシエルのわきがらからどくどくと血があふれ出す。

「せいっ！」

薙ぎ払った後の隙に、シエルが上から切りかかる。

「ちっ」

直前で横に跳んだものの、肩に激痛が走る。

そろそろ決着をつけないとまずいな。

痛みでだんだんと意識が薄れていく。

「これで終わりだ！」

空中で、本気で最後の一撃がぶつかり合う。

そして、僕は衝撃で後方に吹っ飛んだ。

最後に見たのは、同じように吹き飛ばされたシエルの姿だった。

|
|
|
|
|
|
|

「はいこんにちわー」

真っ白な世界に、一人の男が立っている。

「・・・何の用だクソ神」

そう、それは僕をこの世界に送り込んだ張本人である自称イエスキリスト。

「そろそろ彼らの本拠地につくじやないか。それまでに少し情報をあげようと思つてね」

「言つてみる」

「この前、ほかの世界の話をしたでしょ、あの時の話だけど、他の3つの世界から、君のように飛ばされてきた者たちについての情報が入ったんだよ。君がこっちに飛ばされる二年ほど前、同じように四人の人間……っていうかエルフと魔獣もいるけどね。がこの世界に来ていた。そしてうち三人が死亡し、一人が行方不明。君と同じ時期に飛ばされた人たちは、君以外全員死亡。残りは君とその行方不明の人だけだよ。ちなみに、その残り一人、君と同じ世界の女子。年齢も同じぐらいなんじゃない？元の世界でも。いやあ、僕も鼻が高いよ」

「！」

てつきり僕は、向こうに着いたら、同じような境遇の人が何人かいて、それで戦いに行くんだと思つていた。

行方不明の人なんて、探してられるほどの暇がない。実質僕だけ

じゃないか！

「ついでに言っておくと、その行方不明の子、部分的な記憶喪失だね。僕みたいな神のことや、自分がなぜ飛ばされたかは覚えていない。覚えているのは、元の世界での思い出と、自分が死にかけたこと、気がついたらこの世界に来てたことだけ」

「なんのいい情報もないじゃん！」

「じゃあ最後の情報。もうすぐ、彼ら……レイルたちの目的、異世界へ渡る手段が完成する。期限は……あと一週間だ」

そのセリフが終わると同時に、僕はまた意識を失った。

|
|
|
|
|
|
|

「んー。ここは？」

目を覚ました僕が初めに見たのは、やつれた顔のガウスと髪をぼさぼさにして、明らかに数日間ふるにも入らずずっと看病をしていたことがわかるシエルだった。

横のベッドに目を向けると、セリアが同じように眠っている。

「気がついたか。今はあの試合から二日ほどが経っている。あのあと、私はセリアの魔法で何とか意識を保てたが、出血多量ですぐに意識を失った。で、立っているのはセリアとガウスだけだったんだが、慌てたセリアが治癒魔法を私に掛けて・・・今、重度の魔力切れでそこで眠っているというわけだ。私もまだ魔力が全く戻っていない。それで、起きてはいるものの、お互いに戦闘能力のなくなつた私とガウスを見て、審判が引き分けを出した。誰も文句は言わなかったよ。賞金の問題もない。もともとこうやって一緒に旅をしているんだから、どっちが貰ってもよかったのだから。そして気絶したお前と、昏睡状態のセリアを近くの宿まで運んで、今こうしているというわけだ」

あー。なるほど。神としゃべっていた時間は、二日間になっているわけだ。

僕は体を起こそうとして、全身に激痛が走った。

「お、おい。まだ怪我は完治してないんだから動くな。安静にしてろ」

慌ててシエルが支えてくれたのだが、おかげで最後に強打した背中
中の傷口がかなり痛い。

しかし、文句を言うわけにもいかず、黙って心の中で呻いていた。

「いや、いいよ。僕も治癒の魔法は少しなら使えるから・・・っ」と

神からもらったチート的な魔力の量にものを言わせて、程度の低い治癒魔法を大量に自分に掛けてけがを完治させた。

「本当にすごいなシレン・・・」

ぼそつとシエルが呟いているが、僕はそれを気にしている余裕がない。

「・・・・・・・・っ!」

残りの魔力をほぼすべてセリアに流し込む。

やがて、ゆっくりとセリアが目を開けた。

それに気づいたガウスが、嬉々としてそっちに駆け寄った。

「やれやれ疲れた・・・」

もう一回寝転がり、セリアとは反対側を向いた僕の眼に映ったのは・・・

今にも崩れそうなほど山と積まれた金貨。

「・・・・・・・・!!」

「優勝賞金に賭けで手に入れた金額、それにシレンとセリアにお見

舞いとして観客たちがくれたのと、私たちに賭けていた人から儲けの半分をお礼としてもらい、いいものを見せてくれた！っていつてくれた金を合わせたらあぁなった」

僕は痛みをこらえてシエルに笑いかけた。

「よかった・・・これで目的は達成したわけだ。奇しくもガウスの言っていた、真剣勝負になっちゃったけど・・・」

「ああ、もう真剣勝負はこりこりだぜ」

あの戦闘狂のガウスがそういうんだから、よほど大変だったんだろっ。

「看病、ありがとうな」

「いや、俺はほとんど何もしてない。例ならそのシエルに行ったほうがいいぜ。二日間、全く眠らずに必死でおまえについてたぜ。まあ、包帯巻いたりとかがひじょうにその・・・なんていうか・・・だったんで、それは俺がやったけどな」

「それを言つなと言つておいたのに・・・!」

シエルの顔が、ここ最近見なれた色に染まっていた。

「大体何だ、お前はセリアにべたべたとくっついてお前も寝ずに世話してたくせに!その時の飯はだれが作ってやったと思ってるんだ!」

「え?あのテーブルの上に置いてあったの、この宿のサービスじゃなかったの?」

「突っ込むとこそこ……?」

半分あきれたが、二人とも必死だったのは間違いない。

「「本当にありがとな(ね)」」

次の日、ほかの客からの苦情があつたとかで、僕たち四人は店の主人に宿を放り出され、あとから投げ渡された金貨は、中身が少し減っていた。

こうして、また旅が始まったのである。

——残り、一週間。

第40話（前書き）

これから先、どこまで続くか全く考えてませんが、これから先も、よろしく願います。

ついに山場が始まりました！本来なら100話までいくはずなんですけどね！

・・・キャラの暴走って怖いですね・・・

第40話

「・・・・・・・・馬を買おう」

そういう話が出たのは、町を出発してからいつぐらいのことだっただろうか。

残り一週間しかないというのに、まだあと国一つ超えないと、彼ら・・・・・・・・レイルたちの本拠地にたどり着けない。

徒歩ではとても無理だーーーーー！

「賛成」

「いいな」

「金はあるしな」

ということとで、馬を買うことは決定したのだが。

「・・・・・・・・・・どこで買っっ。」

そうです！今まさに僕らは森の中を歩いている途中なんです！

どこに馬が売ってるのかな？森の中に馬を売っている自動販売機でもあるの？

「A、さっきまでいた町に戻る B、魔法でさっさと次の町まで移動する（あたりが悲惨な目にあうが）」

シエルが機械的に答える。

歩き始めてからおよそ十時間。

早朝に出たのにもかかわらず、今は太陽が南中している。

その間一度も休憩をとっていない。

「戻るのはちょっとな・・・あと二十時間はかかるってことだし。今ここに帰ってくるまでに」

「C、どこかで野生の動物を捕獲する」

「それで決定！」

セリアの出した案が一番まともだった。

元の世界なら、ラムサール条約やらワシントン何チャラとかにひっかかりそうだけどね。

「問題は、都合よくそんな動物がいるかどうかだが」

「シエル・・・マイナスな発言は止めてくれえええええ！」

ガウスが絶叫した。

僕は心の中でお祈り？を開始した。

『おいクソ神、聞いてるか？』

『はいはいなんでしょうか？』

『ちよつと徒歩で歩くのは厳しいからうまか何かを四匹用意して』
あ、彼女からデートの約束が入っちゃった。行つてきます。テヘッ
・・・殺るぞこら』

つたく・・・どこかに踏み絵でも落ちてないだろうか？神々の終焉で吹き飛ばしてやる。

もし僕が、この世界じゃなく異世界に飛ばされてたら、確実にそれこそ踏み絵の板を破壊する勢いで蹴つてたね。

『冗談冗談。まあ、あくまで自然な感じに。あ、そうだ。残り四日だよな。今日を含めずに』

『……………んあ？今日も入れて七日だろうが』

何言ってるんだ、こいつ。神のくせに時差ぼけでもしてるのだろうか。

……そうだ。きっとあまりにも墮落した神だからそういうことがあってもおかしくないんだ。

僕は、うんうんとうなずいて、三人から奇異の目線で見られた。

『いや、君が二日間寝てたから、すでに二日がたってるよ』

『……………』

『……………』

『……………』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・？』

ドカツボコツ「ギャー！なにをする、やめて……！」バキッ
グチャグチャゴリッバコツドドーンチーン

『ふう……いい運動になった』

『ああ神様お助けを……』

『お前も神だろうが。どうせ末端だろうけど』

僕は手をパンパンとはたいて言った。

『こんなことしてる暇があったら、早く「足」を探したほうがいいよ。僕の機嫌が悪くなったら、あの動物たちは消滅するから』

『・・・・・・・・・・チッ』

そして、僕は神との交信を切断した。

現実に目を戻すと……

「いた」

「いたな」

「いるわね」

「いるいる」

そう、僕たちの目の前にはきれいな一本の角と純白の翼をもった白馬が四匹並んでいた。

「ユニコーン×ペガサス」目の前の・・・」

「大サービスだよ！」

『こんなもんで走ってたなら目立つだろうが！こんなに目立つ奴なら魔法で走ってても何ら変わらんわ！』

そう。僕らが魔法で空を飛んだり猛スピードで走って行ったりしたら、かなり目立つこと間違いなし。

こっそりレイルのところに行かなきゃならないのに、こちらの動きが筒抜けでは意味がない。

『大丈夫。透明化の魔法が使えるから。というか攻撃と防御以外、大体の魔法は使えるよ』

へー。便利だなこの馬たち。

『名前は？名前はなんていうんだ？』

『それはユニコーンとペガサスだから、ユニサスでもペガコーンでも。個人的にはユニサス1、2、3、αがいいと思うな！』

「おいでー」

セリアが呼びかけると、四頭の中の一頭がゆっくりとセリアに近づいて行った。

「おいで・・・」

シエルが呼びかけても、残り三頭のなかから一頭がシエルのもと

に行つて、シエルの足に鼻面をこすりつけている。

「よっしゃ、来い！」

僕が呼びかけると、跳躍した一頭が、僕の目の前で着地した。

「おお！元氣があるなこいつ！」

さっそく乗れ、という風に首を自分の背中に向ける。

「さあ、俺の胸に飛び込んでこい！」

……ガウスが呼びかけるが、何の反応もない。

「さあ、俺の胸に飛び込んでこい！」

……もう一回いう。何も起こらない。

「どうか俺のもとに来てください！」

……効果はないようだ。

「お願いしまああああす！」

……っんって感じで、馬がそっぽを向いた。

「炎弾の射手」

「ぎゃう！」

ドカドカドカッと、残りの馬の近くの木の幹に、炎の弾丸がめり込む。

「こうなりたくなかったら、俺の指示に従ってくれよなー？」

ぶるぶるぶる。

馬はおびえているようだ。

そして、あるうことが、踵を返して逃げて行った。

「ドンマイ、ガウス」

「不運だ・・・」

それから、僕らは馬と戯れて一時間ほどのんびりしていた。

やっと馬をみつけて一緒に戻ってきたガウスの顔がものすごくやつれていた。

反対に、馬はどこか嬉しそうである。

「遊んでほしかったんだろうな、きっと」

「不運だ・・・」

僕は、自分の相棒に「ユキ」と名付けた。

由来？白い馬〓白〓雪〓ユキ。

「私はこの子を、シロと名付けた」

「そのまんまだな（ね）」

セリアとガウスの声がかぶる。

シエルは少し頬をふくらませて言った。

「別にいいだろ。昔飼ってた魔猫が、シロという名前だったんだ」

「あたしのパートナーは『リラン』にしたわ」

うん。一番まともな名前だ。

どこかで聞いたこともあるけどね。

「俺の相棒は、『ホワイトサンダー一号』で！」

「『馬がかわいそう！』『』」

ガウスのネーミングセンスは、ものすごく悪いということが今日判明した。

「――――」

結局、ガウスの馬の名前はホワイトで落ち着いた。

「よろしくな、ホワイト」

「・・・・・・・・（明後日の方角を向いている）」

「無視するな！」

ホワイトを起点に、業火の渦が巻き起こる。

「ギャウツ」

驚いたホワイトが、前足でガウスを蹴り飛ばす。

「あーれ」

さすがは腐っても神の用意した馬（あ、腐っているのは神のほうね）。その蹴りも威力は並の馬は比べ物にならない。

こうしてガウスは、幾億と輝く星たちの仲間入りを・・・

「ちくしょー、このお転婆馬め！」

ホワイとにとびかかろうとしたガウスは、ホワイの魔法によって両手両足を白く輝くロープで固定され、あえなく落下。

「ごちん！」

そして頭を強打して、しばらくの間意識を失っていた。

「さ、行こうか。ホワイ？あとでこいつ乗せて追いついてきてね」

「ギャウツ！（了解！）」

僕らはそれぞれのパートナーに乗って、一気に駆け出した。

元気のある僕の馬は、時々とび跳ねたり、空中で一回転をしたりと、いろいろな芸を披露してくれたが、それを楽しむ余裕はもちろんなかった。

「しかし速いな。この子たちは」

シエルが、疾走するシロの頭を撫でる。

シロはシエルに頭を撫でられて、嬉しそうに嘶いた。

「元気がよすぎるのも困りものだよ……」

僕は、そのころちょうどユキの背中でダウンしていた。

どうやら酔ったらしい。

「昔はどんな車に乗っても酔わなかったのに……」

「ん？どうした？」

「いいや、なんでもない」

シエルが心配して声をかけてくれるが、この世界に自動車というものはないため、説明するのが難しい。

「ニヒヒヒーン！」

ユキが、動けなくなった僕を嘲るかのように、振り向いてニヤツと笑った。

「ほおー！。上等だ。やってやろつじゃないか！」

僕は疾走する雪から飛び降りて、飛翔を用いて低空飛行を始める。

「ギャウギャウツ（何！？）」

それから、ユキとレースをはじめ、森を抜ける頃には一人と一頭はへとへとになっていた。

しばらく休むと、後方からようやく追いついてきた・・・セリアとシエルが横に並ぶ。

「馬鹿かお前は・・・まだ怪我が治ったばかりで、魔力もセリアに流してあまり戻っていないのに」

「はい。すみません。以後気をつけます！」

あまりにも恐ろしい顔でにらんでくるので、僕とユキ(?)は思わず敬礼した。

それからさらに十分後。

嬉しそうに走ってくるホワイトと、その上でへたばっているガウスの姿が見えた。

「よお！遅かったな！」

「も・・・もうダメ・・・」

どうやら、ホワイトが大暴れして、ロデオに乗っているよりもつらい目にあっただらしい。

「さ、出発するか!」

でもあまり休んでいる暇はないので、僕とシエルとセリアは、元
氣よく立ち上がり、それぞれのパートナーに乗った。

「行くぞガウス!」

「不運だ……!」

途中、ガウスがホワイトから転落し、前足でホワイトにつかまれ、
空を飛んでいくというハプニングがあったが、一日でかなりの距離
を移動できた。普通に歩くと、三日はかかる距離だ。

セリアとシエルは空の旅を楽しみ、僕は結局、ジェットコースタ
ーに乗ってもなかなか体験できない五連続空中回転とか、いろいろ

やらされた拳句、結局またレースを始めてへたばった。

着地の際、空中から落とされたガウスは、落下中「不運だ——！」と叫んでいたとかいなかったとか。

とりあえず、今日でガウスの口癖が一つ増えたのは間違いない。

第40話（後書き）

今日は新しい仲間を増やすところから始めました。

ガウス君がさらに悲惨な目に逢うことになるようですね！

ちなみに馬の性格。

リラン・・・・・・・・おとなしい。いわゆる普通。

シロ・・・・・・・・甘えん坊。シエルによくなっている。

ユキ・・・・・・・・元気すぎる。シレンがよく振り回されている。

ホワイト・・・・・・・・ノリのわかる頭のいい馬。ガウスの不運のもとの一つ。

第41話（前書き）

なんだか最近よく筆が進みます。
それではどうぞ！

第41話

僕らがそれぞれの相棒と出会ってから、およそ14時間が経過した。

おわかりだろうか。残り時間、後ちようど4日。

「急げ急げ急げ——！」

地図で確認すると、もうレイルの本拠地のある国の首都に入れている。

透明になって上空からみつにゅ．．．入りました。密入国とか言おうとしてないからな！

「ギャーウツ！（もう無理！これが限界！）」

ふつうに歩いていたらあと2週間かかる距離が残されているらしい。

途中、富士の樹海みたいところがあって、そこを超えるのがまた難しいそう。

一方、ガウスとシエルは・・・

「zzzz」

完全に休止状態スリープモードに移行していた。

まあ、二日間徹夜で看病してもらってたのに、それから一度も睡眠をとってなかったらこうなるわな。

空を飛んでいるからには、寝たままこの馬で飛んでいくわけにはいかない。途中で落ちる。

鞍とかも何もないから固定するのも難しい。

リランが重さに耐えられず、セリアー人しか乗せられないくせに、

セリアから離れようとしなない。

結果。

一度村に降りて手押し車を失敬してくると（もちろんお詫びに金貨を二百枚ほど置いてきた。次の日の朝、手押し車の持ち主である老夫婦は、金貨を見てからというものの毎日神に祈っているそうだがまた別の話。）シロ、ホワイト、ユキにロープをつけ、魔法で手押し車を浮かせて、引っ張ってもらっているのだ。

まさにサ○タクロースのような格好である。

この世界にもクリスマスは存在するからして、僕らにサンタの異名がつくのはもう間違いない。

すみません子どもたち。手押し車で空を翔けるサンタなんて夢を壊してしまいそうだが、トナカイよりもきれいな馬たちが前にいるんだから許してねー。

「zzzzzzzzzzzz」

「があああああ。ぐがあーーーーー！！」

んで、おもちゃの入った袋ならぬガウスとシエルが後ろで寝ているのだが、ガウスのいびきがもううるさくてうるさくて辟易しているわけだ。

「セリアー。僕の耳に風圧で耳栓とか作ってくれない？」

「無理。疲れる」

「……ガウスだけでもたたき起してやろうかこの野郎。」

そんなこんなで、闇夜の空を翔けること二時間。

ついに、「奴ら」がやってきた。

「シレン！少し前の地上に集団が！魔術師も混ざってる！」

「レイルの手下かな？」

何度も言うが後ろでは、ガウスとシエルが気持ちよさそうに熟睡している。

できることなら起こしたくないわけだ。少なくともシエルは。

「ホワイトにシロ。二人でこれ引っ張れるか？」

「「ギャウッ（もちろんさー！）」「」

「じゃあこの二人頼むな。うるさくなったらガウスをたたき起していいから」

「ギャー―ウツ！（了解しました）」

「ギャウウウウ！（ふふふ。どうしてやろうかな。ふふふふふ）」

「なんだか、ホワイトからよからぬ気配がするのだがまあ気のせいだろう。」

僕はユキに乗り込み、ロープを切り離す。

そして、前方の集団を確認するためにセリアと並んだ。

「一応、透明化の魔法は掛けてあるけど・・・どうする？まだ敵と決まったわけじゃないけど」

セリアがそうつぶやいた時だ。

「ライトニング！」

電撃がセリアのほうに飛んできた。

「んなっ！あいつ、透明化したものを見破れるのか！」

電撃自体は、リランの旋回で避けられるが、ちょうどセリアのいる位置に電撃が飛んできたことが問題なのだ。

この際、相手がやはり、レイルの手下かどうかは置いておいても敵であることは間違いなかったが、それよりも重大な問題だった。

「そういえば、あいつらには特殊能力所持者の部隊がいるんだったわね」

どういう特殊能力かはわからないが、透明なものを見抜く能力か、気配を読む能力、そういったものを持っている敵がいるということだ。

「てことはやっぱり……」

「あいつらは、ただの山賊とかじゃあないわね」

遠まわしに言っているが、相手は確実にレイルの部下だ。

それも、この前僕が勝てなかった（負けてもいないが）特集能力部隊。

「厄介だな・・・」

いくら透明化を見抜けるとはいえ、ここははるか上空。しかも高速で動いているセリアにぴったりと攻撃を当ててきた。

高位の魔術師であることは間違いない。

そして、瞬間転移能力者。
テレポーター

このまま飛んで逃げても、逃げた先に転移されては意味がない。

よって。

「後ろで寝ている二人を起こさないように、あいつらを殲滅するし

かないってか！」

「そうね。あたしもあの二人を起こしたくはないわ」

こうして、僕とセリアの無音戦闘サイレント・ゲームが始まった。

「まずは、先制攻撃だな！」

爆発とか、そういう大きな音を伴う攻撃はできない。

「まって、シエルたちに耳栓を用意するわ。ついでにあの手押し車全体を風圧で覆っておくから、飛翔魔法で加速させて、一気に遠く

まで運んじやって」

「んな無茶な……」

「はやく!」

実は僕も相当量の魔力を消耗していて、そんなにバンバン魔法を使うわけにはいかないのだが。

僕は飛翔魔法をあの手押し車とホワイトたちに掛けて、数キロ先に送り出した。

しかし

「ライティング!」

「させるかつ!」

「させないわっ!」

敵の魔術師がシエルたちのほうに雷撃を放ってきたため、それを防がなければならなくなった。

透明化の魔法は、ほかの魔法を使ったり、攻撃を受けたりした瞬間に解除される。

つまりこの瞬間、防壁を張ったセリアの透明化は解除された。

「そこだっ！」

「なにっ！……！」

敵の部隊は全員が魔術師だったらしく、数十人分の魔法攻撃がセリアを襲う。

セリアの張った防壁にぶつかって、眩しい閃光が弾ける。

「も、持たない……っ！」

夜の闇に浮かび上がったセリアの額からは、大量の汗が流れていた。

「ちっ」

僕は前にも言ったが防御魔法が大の苦手だ。

「アトランティスの復讐！」

僕の背後に魔法陣が浮かび上がり、強烈な水流が横からセリアを襲っていた魔法攻撃にぶつかる。

そのあと落下した水が、敵を上から襲う。

一瞬で炎系統の魔法が消えた。

「ユキ！上へ！」

「ギャ！」

ユキが頭を上に向け、急上昇を始める。

そしてある程度の高さに達したとき、今度は落下を始めるジエツトコースターのように、真下に下がっていく。

「昇華の聖光」

これまた僕の前方に魔法陣が浮かび上がり、そこから膨大な破壊力を持った光線が発射される。

しかしこの魔法、爆発を起こすわけでもないから、あくまで静かに範囲内の敵を消滅させる。

放たれた光線は、セリアの防壁と互角に戦っていた魔法攻撃を完全に押し流し、力の流れる向きを下にかえ、敵に襲いかかる。

「マスターシールド
完全防壁」

誰かの持つ特殊能力によって生み出された半透明で半球状のシールドにぶつかる。

なら！

「漆黒の闇」

シールド内部を闇が飲み込み、中にいるものすべてを葬る。

「残念だったな！」

そのはずが、転移能力者によって効果範囲にいたはずの人間すべてが違うところに移動し、消滅を防がれた。

「ライティング 炎弾の射手 百火繚乱 竜巻！」

さまざまな魔法攻撃がお返しとばかりに僕めがけて飛んでくる。

「絶対零度」

僕の近くにある大気中の水蒸気が凍り、分厚い盾となって出現する。

絶対零度はそれでもとまらず、辺りの燃焼物すべての温度を下げる。

火は温度、酸素、燃える物がなければ燃えていられない。

魔法はこの燃える物の代わりはできるが温度が下がれば炎は当然消える。

「理科なめんな！」

隣でセリアが「は？」という目で見ているがもう放置だ。

「お返しだ！ 疾風の乱舞！」

今度は緑色の魔法陣が星空に浮かび、そこから生じる衝撃波を伴った暴風が、竜巻を押し返す。

所詮は中級魔法。究極魔法の暴風の前には無力！

そして刀で目の前の氷の盾を切り裂く。

ばらばらになった氷の粒が、暴風によって落下速度を増し、それぞれが隕石のような威力をもって降り注ぐ。

完全防壁は魔法をすべて防ぐのだろうが、氷の粒は魔法で生み出されたとしても、落下攻撃に魔法は関係ない。実際に存在するものを魔法で加速させただけ。

読み通りシールドは役目を果たさずに、貫通した氷の粒が敵たちに襲いかかる。

断末魔の叫びとともに、体中に穴があいた敵が倒れる。

ゲームとかであるように、魔法使いは重たい鎧などを装備しない。

もし鎧とかを着ていれば、少しはましだったかもしれないし、防弾チョッキなんかがあれば一発も貫通しなかったかもしれない。何といっても元は氷だし、はじけて終わる。

魔法使いの軽装があだとなった。

ガウスのように炎を纏うことのできる魔術師が、とっさに仲間自分
に炎をまわらせて防いだが、すべてを補えたわけではなかった。

そしてそこに、暴風が直撃する。

しかし完全防壁の使い手は運悪く生き残ってたらしく、防壁が消
えることはなかった。

「ハルマゲドン」

半球状のシールドは魔法を無効化しているようだが、ハルマゲド
ンは地属性。

大規模な地震を限定的に起こし、地割れに呑み込んだりして敵を
倒す技。

今回は完全防壁があるため、周囲への被害なんて全く考えずに最
大出力で放つ。

完全防壁と同じ直径の魔法陣が地表に現れ、そこで効果が発動す

る。

完全防壁の外にある木々とかは全く何事もないかのように立っているが、シールドの中の間人間が次々と地割れに呑み込まれていく。

これまた飛翔魔法をつかえる何人かによって助け出された人もいる。しかし過半数は地割れに呑み込まれる。

そして魔法が終わると同時に、一度魔法陣が発光し、完全に元通りの地面に戻った。

ただし、その地面の奥深くには、先ほどまではいなかった、数十人の人が眠っている。

飛翔魔法を使える＝普通の雷撃とかはかわされて終わり。

「ユキ！ちょっと行ってくる！」

自由に動けないユキに乗っているこちらが不利だと判断した僕は、超上空から飛び降りた。

スカイダイビング、一回やってみたかったんだよねなどと言っているほどの余裕があればよかったんだが。

闇夜の空に舞う、武闘会で優勝を飾った少年一人対威厳漂う魔術師残り十数人

観客がいれば、それこそ盛り上がったに違いない。

「あれだけの魔法を使えるなんてどんな凄腕の魔術師かと思ったら・・・まだ子どもではないか。いくらレイル様の命令でも、子どもを殺すのは忍びない。おとなしく投降してくれば命の安全は保障しよう。君も、君の仲間の命も」

礼儀正しく、人格のあるそのリーダー格の魔法使いは、なかなか好感のもてる人物だった。

出合い方が違えば、尊敬できる人だったかもしれない。

「残念だな。そして僕は投降する気なんてさらさらない。」

——行くよ！」

宙に浮いた状態から一気に加速し、敵の懐に入り込む。

「灼烈波！」

抜刀と同時に、衝撃波が生じ、一人目の魔術師を吹き飛ばす。

そしてその軌跡にそって灼熱の炎がほかの魔術師の身を焦がす。

「複合魔法 ライトニングストーム！」

三人の魔法使いが、声をそろえて詠唱を終える。

とたんに、上空に暗雲が集まりだし、そこから幾筋もの雷が連続的に放電される。

「はっ！詠唱なんて必要ない！—— ライトニングソード」

今度は雷でできた剣が、数十本ほど上空に浮かび、落下を開始する。

この魔法でできる剣の数は、使った本人の力量に比例して増える。

そして数十本も生み出すのは、相当に難しい。

魔法使いならそれぐらいわかるだろうから、降伏してくれればいいのだが・・・

「無詠唱でそれだけの雷剣を!？」

確かにあのリーダー格の男は知っていたようだが、降伏する気は僕と同じで無いようだ。

「そつだよ！できることなら人殺しはあまりしたくない。おとなしく降伏してくれないかな！」

「悪いな。心づかいはありがたいが、ここで退くわけにはいかないのね」

ここにいたって、僕は相手が誰か思い出した。

「宮廷魔術師のあなたが、なぜあんな男に従っているんですか！」

そう、相手は僕と同じ国の宮廷魔術師。

数千人に一人というような才能を持って生まれた、最高位の魔術師のつく職業。

中でもこの男、ネルハントは中でもずば抜けた力を持ち、秘密兵器とまで言われた存在。

そんな人が、人を手当たり次第に殺すような男に従うなんて、到底信じられなかった。

僕の台詞を聞いて、ネルハントの顔が苦渋に歪む。

「身内を、人質に取られているんだ！わかったらサッサとおとなしく捕まってくれ！」

．．．．．そういうことか。

レイルにとってはトップクラスの実力を持つ魔術師なんてどうやっても手に入れない「物件」だろう。

でも勧誘したら断られて、強制的に味方につけた、と。

レイル自身は僕以上の力を持つらしい。反抗しようにもできなかつたんだろう。

「あなたには罪はない。助けられることなら助けてあげたいですが、捕まるわけにはいきません」

「．．．．．そうか。なら力づくでも！」

これまで手をださなかったネルハントが初めて動いた。

「墮天使の業火！」

「アトランティスの復讐！」

彼の放った灼熱の火球は、それが効果を発動する前に水で消される。

悪いけど、ネルハントに勝ち目は、ない。

彼の使える属性は、火と光。それぞれの究極魔法を無詠唱で発動できる。

対する僕は、すべての属性の究極魔法を無詠唱で発動できる。

「昇華のせ」「漆黒の闇」「」

完成途中の魔法陣ごと、漆黒の闇で包み込む。

「終わりです。星屑の雨」

僕は、ゆつくりと告げた。

先ほどの雷雲よりさらに上空から、いくつもの隕石が飛来する。

それは宙に浮かんでいた魔術師たちを地にたたき落して焼き尽くす。

被害が出ないよう、セリアが風圧のクッションを地上に展開してくれていたおかげで、地面に大きなクレーターがあいたりはしなかった。

が、ネルハントを除くすべての魔術師が絶命した。

「ネルハントさん。僕らはレイルたちを倒すために旅をしています。一緒に来るのなら、人質となっているあなたの身内も救出します。ですからもう罪のない人を殺すのをやめて、投降してください。あなたはもう人殺しの罪から逃れることはできません。ですがあなたの身内は何もしていない。なのに巻き込まれるのは理不尽です。あいつに報告するときには、僕たちを拘束しました、今護送中ですとも言えがいい。そのための演技ぐらいはしますよ。これ以上、あなたの大切な身内を悲しませるようなことはしないでください！」

「・・・・・・・・本当か？確かに君の実力なら可能かもしれないが・・」

「約束します」

「分かった。・・・投降しよう」

こうして、サイレント・ゲームは僕たちの勝ちで幕を閉じた。

そして、一行に新しいメンバーが加わった。

第41話（後書き）

あれー？なぜか知らないけどキャラが増えちゃいました。

当初は出す予定なかったんですけどwやっぱり主人公があっさり勝っちゃったらつまらないですからね。

また火力の持ち主が現れました。でもシレンと違って防御もできる人だから、戦力にはなると・・・思いますヨ！

第42話（前書き）

調子に乗って一日に3話目です。
読む方のほうが大変かと思いますが、すみません。

第42話

「で、どこの誰だこいつ。ていうか昨日の夜なにかあったのか？」

次の日の朝。残り三日。

目を覚ましたガウスが、なぜか当たり前のようにそこにいるネルハントをみて、上の台詞を言った。

「いや、昨日の夜は何もなかったよ。二人が寝ちゃって、それからいろいろあつて、旅に協力してくれることになった、ネルハントさんだよ。名前は知ってるでしょ」

「ななななななんでそんな方が？ていうか説明省きすぎだー！」

その叫びに気づいたのか、ネルハントがこつちを向く

「やあ、ガウス君、はじめまして」

そう言つて、右手を差し出すネルハント。

「あ、どうもよろしく・・・お願いしますー！」

相手が宮廷魔術師だと思いだして、態度を改めるガウス。

実はガウスも宮廷魔術師になれるだけの實力はあるのだが。

「ふむ……炎属性の魔法使いか。それもかなりの使い手だね」

「あ、握手しただけでそこまでわかるんですか！さすがは宮廷魔術師……」

驚いたガウスが敬語を使って確かめるが………まったく似合っていない。

同じことをネルハントも思ったのだろうか。

「敬語なんて使わなくていいよ（似合っていないから）、タメ口でいい」

「わ、分かった。で、本当にすごいんで……だな、宮廷魔術師って」

「ああ、いや。シレン君から君の使える属性について聞いてただけだよ」

そういつて、ネルハントは声をあげて笑った。

「ご飯できたぞー」

シエルとセリアの女二人組が、珍しくも料理を作っている。

普段は買ったもので済ますのだが、客がいるということで張り切っているのだろう。

そう思って、皿を受け取ると、中身は買った干し肉と店売りの野菜が入っていて、水にぶち込んで温めたスープが入っていた。

「料理は苦手なんだよ!」

セリアが悲鳴を上げる。

「いやいや、シエルがこの前作ってた料理めちゃくちゃすごかったんだけど!」

おそらく前にも話に出てきていた、看病中の時のことだろう。

店の人が作ったのと勘違いするぐらいだから、相当美味しかったんだろうな。

食べられなかったのが、今更ながらにとっても残念だった。

「いくら私でも、包丁もまな板も何もないところで料理を作るのは無理だ」

たしかに、野菜が切ってあっただけでもすごい。

何で切ったんだろう・・・と思ったら、僕の刀に人参の皮がついていた。

「おまえら・・・・・・・・よくも人の愛刀を包丁代わりに使ってくれたな・・・」

珍しく僕が切れました。

――――

しゅうと煙を上げながらセリアとシエルが倒れ伏しているが、
誰の仕業かなー？

「シレン君・・・君は鬼だな」

「はい？何のことですか？」

僕は満面の笑顔でネルハントのほうに振り向いた。

「い、いや・・・なんでもない」

「そうですか。ならよかった」

僕はもう一回料理を作りなおすことにした。スープが冷めてしまってる上に、結構こぼれて使い物にならない。

あまり時間もないので、手早く済ませることにする。

- 1、まず、肉と野菜を風の刃を用いて適度な大きさに切る。
 - 2、それを飛翔魔法で浮かせる。
 - 3、火力を弱めた炎系魔法で焼く。
- はい、即席バーベキューの出来上がり。（焼き肉でも可）

「攻撃魔法で料理をする奴初めて見た」

「ガウス君に同意」

とか言いつつ、うまいうまいと食っている二人。

僕も食べてみるが、味は悪くなかったし、見た目も普通だった。

「腹減った……」

シエルとセリアがうらみがましい目を向けてくるが黙殺する。

「あ、ちゃんと刀を拭いておいてね」

五分後、とりあえず刀は元通りになったので、残った材料でまた焼き肉もどきを作って渡す。

「攻撃魔法で料理する人はじ（以下略）」

二人とも、声をそろえて同じことを言った。

「さあて、出発するとするか！」

ネルハントさんにも昨日のうちに、僕らの事情も話しておいた。

もちろん僕が異世界人だとかは伏せておいた。

「了解・・・ってネルハントさんの馬はどうすんだ？」

「ああ、ネルハントさん。ガウスと同じ馬でいいですか？」

「もちろん。あんな見事な馬は初めて見た。翼と角が生えているのを馬と言っているのかどうかは分からないが」

というわけでガウスの馬の後ろにネルさん（短くしてネルでいいということになった）が乗り込み、今日の行路が始まった。

「明日でレイルの本拠地につくようにしよう。だから今日は一日中飛んでいることになる。それでいいか？」

「「「もちろん」」」

残り距離、もう千キロぐらいだろう。

自動車以上の速さで進むことができる馬なら、およそ十五〜七時間もあればつくはず。

「あと、敵の攻撃を避けるために、高度千メートルぐらいのところを飛ぶがいいか？」

「「「もちろん？」「」」

どうやら、高度千メートルがどんな所かが分からないらしい。

「よし、じゃあ乗り込むか！」

僕らが乗り込むと同時に、馬たちが地を蹴った。

「
「
「
「
「
「

「さ、さむーーーーーい！」

それはそうだろう。対流圏と中間圏では上に行くほど気温が下がる。

「さ、さむいなああ。ここ」

「・・・・・・寒い」

昨日は、高度五百メートル付近を飛んでいて、それでも雷撃は普通に届くのだ。

本当なら、あの雷雲をよけるためにもっと上に行きたかったのだが、そんなところに行くともまず死ぬ。

ちなみに、僕とガウスは、普通にくつろいでいる。なぜか？

「いやー、あつたかいなー」

ガウスが厭味つたらしく言う。

ガウスは炎を纏っているからあつたかいのだ。

僕はちなみに熱系魔法あたりの気温を操作している。

「あ、その手があつたか」

とばかりに、ネルハントが手をポンツッと打った瞬間、彼の体が炎に包まれた。

ついでに馬まで炎に覆われているせいで、はたから見ると墜落寸前の飛行機みたいに見える。

「・・・・・・・・あ、あたしもできた」

風圧を纏ったセリアが、外界からの風を遮断し、高速で動くが故の向かい風を防ぐ。

「・・・・・・・・寒い」

「あ、リランも寒いよねー」

リランにも同じように風圧を纏わせる。

「・・・・・・・・寒い」

「ユキは大丈夫か？」

「ギャイン！（平気）」

「・・・・・・・・寒い」

「そりゃユキは名前からして寒いところ平気そうだからな」

「それはあまり関係ないような気が・・・・・・・・」

「・・・・・・・・寒いなー」

「さてもう少し高度上げる？それともスピード重視？」

「・・・・・・・・・・あー寒い」

「もうちょつと高い所からの景色を見てみたいかなー」

「分かった！よっしゃ、高度を上げるぞ！」

「・・・・・・・・・・（ガタガタブルブル）」

さすがに可愛いそうになってきたので、熱系魔法でシエルのあたりの温度を調節。

「大丈夫か——？」

「・・・・・・・・心の中が寒い・・・・・・・・シレンのせいだ・・・・・・・・恨むぞ・・・・・・・・」

「あーあ。シレンだったらかわいそうじゃないの！」

「どうすんだシレン。恨まれてるぞ」

「この野郎裏切りやがってー！ 絶対零度！」

「寒い寒い寒いわかりましたかやめてやめてー！」

ガウスの付近の温度を絶対零度まで下げ、炎ごと消した。

「お、おおおーいシレン君。ぼ、僕は何もしてないよな？」

「あ、悪い。ネルハントさんも巻き込んだか」

魔法を解除して、元の気温に戻す。

ただ、消えた炎は戻らない。

「寒いー！」

炎を出すたびに、水だのなんだのでどんどん消され、前から吹く風で僕が何もなくても消えていく。

出したあとは魔法で固定できるが、出すのと消えるのがほぼ同時なため、固定の魔法を挟み込む暇がないのだ。

それからしばらくの間、ガウスは冷風にさらされていたため、この日の晩、風邪をひいた。

それはさておき、いろいろと喋りながら飛ぶうちに、前方から、何かが出現した。

「なんだあれ？」

初めは、鳥か何かだと思ってたが、だんだんと大きくなってくる。

そして、鷹の目 を使って確認できる距離に来了。

「な、なんだありゃああ！」

第42話（後書き）

さてここで質問です。

ここで見たものを何にしようかと迷ってます。

A、空に浮かぶ敵の本拠地。

B、敵の竜騎兵

C、残りのアドバンスドスリードラゴン

さあ、どれ？

回答お待ちしております。

第43話（前書き）

ここからは、魔法の仕組みとかも少し入ってきます。

難しいですねー。なんでもありに近い能力を説明するのは。

あと、ジャンルにミステリーが入っているところからもわかると思います。ここから少し推理物みたいな展開も入ってきますので、それが嫌になる方はパソコンなら左上の↑ボタンを、携帯なら戻るボタンをぱちつと押してください。

第43話

「な、なんだありゃああ！」

ガウスの叫びもわからなくはない。というかわかりたくないほどわかる。

目の前に見えてきたもの。それは……

「城？」

まさに城としかいうことのできないような建物だった。

それはまだ良い。

問題は別のところにある。

「なんで宙に浮かんでんだ！あんなでっかい建物が！」

ここは上空3000メートル。

気圧もコントロールできるし気温も問題ないということで、一気に上昇した僕たちの目の前には、巨大な城が浮かんでいた。

あれは、天空の城ラ○ユタか！

「数十人が協力して飛翔を使って浮かせているか、そういう特殊能力持ちがいるか。もしくは別の方法か、だな」

しかし、まだ彼らの本拠地までには結構な距離があるはず。

「……………幻覚っていう可能性もあるな」

そうつぶやいたのはネルハントだった。

「もしくは、人間ではない巨大な魔獣……ドラゴンとかを飼っていたりとか」

グギャアアアアアア！

よく目を凝らすと、何かが城から飛び出してこちらに猛スピードで接近してくる。

2匹も。

「嘘でしょ？」

「冗談だと言ってくれ・・・」

「言っただけでもいいけど意味ないよ？」

僕が倒したアドバンスドスリーよりも、三回り程大きい残りの二匹が、こちらに向かっているのだった。

「伝説の龍が・・・その中でも三番目と二番目に強いといわれている龍が二匹も・・・」

「二番目？なら一番強いのは？」

あいつらが届くまでの時間はまだあるだろうということとで、安全のため透明化を掛けて降下すると、ネルハントの話が始まった。

こんな時に話し始めなくてもと思うが、どうやら相当に重大な話らしい。

「レイルたちが異世界にわたる方法を探しているのは知っているだろ？」

「「「もちろん」「」」

「実は――」

――もともと、レイルがやってきたのは百年ほど前だった。ちょうど、最強の龍が目覚めた時期と一致する。

その龍こそ、次元を操り、魔法を自在に使い、世界を渡ることのできる唯一の生き物だった。

ところがレイルは何らかの理由でその龍に恨みを抱き、討伐しようとするが返り討ちにあう。

怒り狂ったレイルは自らの軍を強化しようと、自らの持つ秘術を使った。

それが、今の特殊能力部隊の設立に大きくかかわっているらしい。私も詳しくは知らないが。

そして三か月ほど前。『私の邪魔をするものが現れる。全力で叩き潰せ!』という指令が出た。

もちろん、君たちのことだな。

私が捕らえられたのも同じぐらいの時期だ。

私が任務の結果報告に行った時、漏れ聞こえてきた会話の内容からすると、もうすぐ、レイルの最大の望みとやらが叶うらしい。それが何かははつきりとは分からないが、最強の龍にかかわることなのは間違いない。

ということだった。

「で、その龍は今どこに？」

「分かってたら全力で保護しに行くだろ？」

それも道理だ。

むしろ、そんな力があるんなら勝ち目はないだろうな！。

だって僕らの世界から銃を持ってきて使えば、ネルタの能力と似ているが、さらに威力のある攻撃もできるし、迫撃砲や最悪核爆弾でも持ってきて、城の上空で爆発させれば勝てるはず。

あ、そういえば龍の指では引き金が引けないな。

「ただ、多分もう捕まっている。君たちに会う前の日、あいつが大喜びしていたからな」

——あと三日ほどの余裕があるんじゃないかなかったのかよ！

「あいつの持つ特殊能力は、『時間を止める』というものと、『他人の能力を自分のもののように扱える』らしい」

まさしく反則級チートだな。そんなのにどうやって勝てと？

「まさに無敵だ・・・だからこそ誰も抵抗できずにしたがっているんだ。しかしこのまま放っておけば、どんどんいろいろな能力を吸収して、強くなっていくぞ。もう魔法はすべての属性、亜属性の究極魔法が使えるようになっていいるし、一般には教えられてないが、結界とかを操る術も身につけている」

「んな化け物に勝てるはずないだろうが！RPGとかならお約束で『封印の石』とか出てくる展開だろうけど！

「あいつは、どうやら噂なんだが、異世界からこの世界に来たらしい・・・当然、信じられる話じゃないけどね」

はい僕信じまーす。僕も異世界から来てるしねー。

隣では、ガウスとセリアがもう馬から落ちそうなほどのけぞりながら驚いていて、シエルが目丸くしていた。ちよっと珍しい。

「そう考えればすべての説明がつく。異世界から来たんなら、そこ

に最強の龍・・・源龍がかかわっていたと考えるのもうなずける。不本意に連れてこられたのだとしたら、恨んで当然だ。そしてこの世界にはないような力を持っていても何らおかしくない」

確かにそうだが、柔軟な思考の持ち主だなこの人。

まるではじめから異世界の存在を信じているかのように。

元の世界の中二でもそんなことは信じてないぞ。

「で、そんな奴に勝つ方法はあるのか？時間止められる上に、あの完全防壁とか転移能力や僕らの透明化を見破る術まで使えるんだろ？」

「後半はそのとおりだ。『自分の視界に映る攻撃魔法以外を無効化する能力』をも使えるし、打撃攻撃は転移でかわされて終わりだし、魔法攻撃は完全防壁で防がれるな」

———
やっぱチートだ
———
！

ちらつとあの糞神の顔が浮かんた。あいつ、僕のいた世界を管理してるくせに、レイルの正体は知らなかったのか・・・？

まあ、あいつはダメダメだからそういうこともあるんだろう。

ネルハントさんには何か策があるのかな、っと思ってたら、ものすごく嫌な予感しかない発言が。

「で、あいつを倒す方法を何か君たちは持ってるのかな？」

「「「「ない！」「」「」」」

当たり前だ。そんなチート持つてるなんて今初めて聞いた。

「……だろうな」

どうすんだよおい。

お先真っ暗じゃないか——！

「さて、対処法を考えないとな。転移能力といっても、内容は『瞬間移動』。つまり、動けなくさせられれば、打撃攻撃も有効だ……だがその拘束するのが無理なのだが。瞬間移動ができるなら、普通の拘束魔法を引きちぎるのもたやすい……」

「結局、何の方法もないということだな、現状は」

「そのとおり！よく説明の手間を省いてくれた！」

「んなもん説明されなくてもわかるわ——！」

ガウスの突っ込みも、珍しく正しい。

そしてそのガウスのほうに、息がふりかかる。

もちろんのこと、魔力を帯びた龍の息だが。^{プレス}

「なんでばれた——！」

見るとアドバンスドの背中に人が乗っている。

「あの二人は補助魔法を見破れる能力者と、対象にかかっている補助系の魔法を打ち消す能力者だな」

「最悪のコンビじゃねーか！」

確かにいつの間にか、透明化以外の 鷹の目 身体強化 までも消えている。

「ただ、あいつら自身の戦闘力は並以下だ！それでも普通の宮廷魔術師と互角に戦えるんだけどな！」

「不安になるから後半のセリフいらねえええええええ！」

おっそろしく空気の読めない人だな。

「それも、身体強化を打ち消して、打撃攻撃と使って二人がかりで、怖くなんかないぞ！」

「そいつらの乗ってるドラゴンだけでも十分に怖いわ！——炎弾の射手！」

ガウスの指から銃弾サイズの高熱の炎の弾が発射されるが、龍が軽く鼻息で吹き飛ばした。

「なにあいつ。余裕のつもりか——！」

「事実、余裕だろうねあいつらからしたら。ま、ただひとつの誤算というものがあるとすれば……」

僕は、手にした杖を持ち上げて言った。

「ここに、龍殺しがいることだろうな！」

一応、一人でアドバンススリーの一頭を倒すことができたんだ。
二匹ぐらいならこの人数でいけば勝てるだろ！

ただ、人間昔から植えつけられた記憶には逆らえないようで、ガ
ウスはおろおろとするばかり、セリアは昔の事件を思い出したのか
また気絶。

「役に立たねえええ——！」

ネルハントさんと声がかぶった。

しかし、宮廷魔術師並みの魔術師たち 対 宮廷魔術師の中でも
トップクラス

僕 対 アドバンス一匹、僕と互角に戦ったシエル 対 アドバ
ンス一匹。

戦力的には全く同じぐらい。ただ個々の対戦表で見ると、すべて僕らに勝ち目がある。

「勝てるんじゃないのこの勝負！—— ライトニング・ソード！」

数十本の雷剣が生み出され、高速で龍たちに向って落下する。

「では私はあの上の魔法使いたちを相手にする！ 飛翔」

「あ、馬鹿！」

補助魔法である飛翔は、かけた瞬間に打ち消された。

何の備えもなく飛び降りた形になつたネルハントは、そのままあえなく落下。

「ただのバカだ——！ なさけねえええええええ！」

ガウスが、とりあえずホワイトを操って遺体を回収。なりかけ

「いやー済まない済まない」

「やれやれ。ここからはコントロールが必要だな」

ネルハントが、詠唱をする。

「狙うは、龍の背。火力は最大。継続時間は一五秒。いけ！ 墮天使の業火！」

ちょうどドラゴンの背中で、火球が出現し、爆発した。ていうかしている。

ぴったり十五秒後、爆発は治まり、アドバンスドスリーの上の魔術師は黒こげになっていた。

「運がいいな！ちょうど補助魔法解除の方をやれたらしい！」

この人いたら圧勝じゃん・・・と思ったが、もうふらふらになっ

ている。

「条件指定・・・の魔法は、私の特技・・・だが、ものすごく魔力を消耗するんだよ・・・」

「それ、絶対にレイルの前でやるなよ。その能力もパクられる」

「心にとめておこう」

「でも、今はナイスだった！ 神々の終焉！」

僕の両手から発生した虹色の奔流が、魔術師のいなくなったほうのアドバンスドスリーめがけてほとばしる。

ただ、この前使ったのは地上で静止しているやつ、いまは高速で動くやつ。

まっすぐにしか進まない僕の必殺技は、旋回でかわされる。

「お前も相当バカだな！」

ガウスの突っ込みが痛い。

ついでに、なんだこいつ的な目でネルハントさんが見てくるが気にしてはいけないのだろう。

「しょうがない、俺がやってやるよ。狙うは、龍の翼の付け根。火力は最大。継続時間は十秒。いけ！ 堕天使の業火！」

先ほどのネルハントさんの魔術を真似し、ガウスが自身の究極魔法を発動する。

言下に、龍の両翼に火球が出現し、その翼を焼き切る。

グギャウウウウウ！

翼を失ったアドバンスが、そのまま落下。

「おまけだ！狙うは龍の真上、火力は最大、継続時間は五秒。直径は五十メートル。昇華の聖光」

魔法陣が二つ出現し、そこから光線が発せられる。

翼のあるほうがかわそうとするが、攻撃の範囲は広い。

ドゴオオオオオン

あー、真下にいる方すみません。

誰もいませんように・・・と思っただが、光線が下に届くまでに消滅した。

五秒でよかった・・・

魔法の直撃を受けた龍は、地面にたたきつけられ絶命した。

「イエー！」

セリアが起きてたら、クッションを作って下の人に被害が出ないようにしてほしかったのだが、それは無理だった。

誰もいなかったことを祈ろう。

「しかしあの龍たちを一瞬で討伐するなんて・・・何者だ君たち？」

「なんの変哲もない、ただあいつを倒すことだけを誓った魔法学校の学生です」

さて、目指すはあの城。

「とりあえず、先制攻撃でもするか。 神々の終焉！」

ドゴオオオオン

本日二度目の虹色の奔流が、城の一部を破壊した。

「さて、戦闘開始だ！」

第43話（後書き）

ちょっと早かったですかね？残りのストーリーだけで五十話も持つ
だろうか・・・

七十話ぐらいで終わりそうですがお許しください。

第44話（前書き）

ちよくちよく、レイルの目線も入ってきます。

ただ、名前の付け方がだんだん適当になってきました。

それこそ、コードネームになりますが、お許しください。

たまに、なにかの軽いパロディが入るかも……。

七〇話まで持つかどうかすら危うくなりました。がんばれば五〇話で終わらせられる……。

第44話

レイル said

「報告します！我が君。先ほど、何者かにより城の一部が破壊されました！」

目の前で不愉快な報告を持ってきたのは、コードネーム009「ロゼ」。

「なに？もう着いたのか？あいつらが。城の周囲を警戒！もう既に侵入されているかも知れんと思え！」

私の玉座の後ろには、源龍が捕らえられている。

時間を止め、源龍を保管してあるのだ。

力を奪い取る儀式は半分ほど完了した。

異世界へ渡る力、時間をさかのぼる力は手に入れた。

「まだまだ・・・肝心の秘術が奪えていない」

そう、誰も知らないが、源龍には【世界を創る力】が宿っている。

それを奪い、自分の理想郷を作るのだ。

それから私を痛めつけた、あいつらに復讐してやる。

私は、遠い昔に源龍によってこの世界に呼び寄せられた。

時間と次元を操る源龍が、科学の発達した世界か科学者だった私を召喚し、この世界に連れ込んだ。

私の夢だった原子力の平和利用に関する研究も続けられなくなった。

しばらくはこの世界の魔法の研究などに夢中になってはいたが、それを元の世界に持って帰ることができないと知ったのを期に熱が冷めた。

前に源龍に抗議に行った時はこう言われた。

『私を早く元の世界に戻せ！やりたいことがあるんだ』

『ならぬ。おぬしは選ばれたのだ。この世界を守るために』

『私はそんなことをする気はない！ただ元の世界でやらなければならぬ研究が・・・』

『おぬしがこの世界のことをどうでもよいというのなら、わしにとつて、お前個人の自我やお前の世界の行く末などどうでもよいのだからな』

それ以来、私は源龍に頼らずに元の世界に戻る方法を探した。

私の役目であつた、魔王の討伐なぞ一週間で終わらせた。

時間を止めて剣で切り裂いて終わり。呆気ないものだった。

同じように源龍も討伐出来ないかと思つたが、振り返ちにあつて数年間眠らされた。

何としても許すことはできない・・・！

「ゆけ！私の邪魔をするものは許さない！」

私は、ロゼを退室させ、魔法陣を書き始めた。

次元転移の魔法陣。

シレンという少年は、自分の意思でここに来たと思っているようだが、それは違う。すべて私が裏で操作していた。

おそらく、私を倒そうと息巻いているだろうが、それは叶わない。

もともと、私はシレンとやらを倒す気は全くない。

ただ、私の邪魔をしたいと願う連中が彼と一緒に付いてくるはず。そいつらの始末をしたいだけだ。そして内部にいる裏切り者の正体を暴く。

ネルハントの奴は確実に向こうにいるだろうがな。

私をこの世界に閉じ込めた奴ら、何も知らず私を殺そうとする奴ら、みんなまとめて始末してやる！

私をこの世界に閉じ込めた犯人のうち一人は、もう既に時間も次元もさかのぼって、無の世界に封じてある。

源龍は私の支配下に置いた。

残るはこの誰ともわからないがあと一人――！

――

シレン said

やっちゃった・・・

神々の終焉を二発連続で放った僕は、今魔力切れでフラフラになっている。

近くて遠い城があわただしくなってきたのをが手に取るようになる。

『おい神、聞こえてるか？』

『はいはいなんですか？』

『何の用でもないが、とりあえずこれから決戦が始まるぜ』

『知ってますよ。がんばってくださいね』

『あと、これが終わったら元の世界にちゃんと帰してくれるんだろ
うな？車にひかれる前の瞬間に』

『もちろん。君が望むなら、ですけどね』

『……………痛いところを突いてくる。』

この世界でできた友人や仲間も大事だし、元の世界よりもこっちの世界のほうが（いろいろと厄介事に巻き込まれるが）楽しい気もするし、今元の世界に戻すといわれても、どうするかはわからない。

『ところで神。もうあいつが異世界にわたる力を手に入れたらしいんだが、ホントか？』

『ええ？そんな馬鹿な——あの儀式には、少なくとももう少し時間がかかるはず』

『もう少しってどれくらいだ？』

『あと二十四時間はかかる。それ以降は本人の技量によるな』

なんかの映画みたいな展開だな！二十四時間で！

「よし、全速力だ！ユキ！」

『あ、君はまだ魔力が回復してな』

何か言いかけていたみたいだが、途中でブチっと切った。

「一応これにも魔力がいるらしいから、余計なことはしないに限る。

「まだ到着までには時間がある。とりあえず少し寝ておいたらどうだ？本番に備えておいたほうがいい」

「そうか。誰が見張る？」

「それは私がやる。戦闘ではあまり役に立たなかったからね」

こうして、皆が眠りについた。

「で、何か聞かれない話でもあるのかな？」

そう、この前僕がかけられたのと同じ、催眠の魔法をかけられて、シエルたちは眠っている。

「私が思うに、君もレイルと同じ、異世界から来た人間なんだろう？」

第44話（後書き）

だれが悪いのか、分からなくなってきましたねー。

個人的には、ハリポタのヴォルデモートとかこの作品のレイルとかには同情するんですよね。

ハリポタで一番悪いのは、ヴォルデモートの父親とおじいさんだと思います。あと一応母親も。

予想外にネルハントがキーマンになってしまいます。こんなはずじやあ・・・。

まあ、このほうがおもしろくなりそうだw

第45話（前書き）

ここから作品の雰囲気がどんどん変わっていきます。

今までの設定がどんどん崩壊していきますが、そういうストーリーですので気にしないでくださいね。

さらに言うと、？と！がかなり異様に多くなります。

視点もころころ変わるかもしれませんが、お許しください。 m（ー

ー） m

第45話

??? said

「もうすぐだ・・・もうすぐ願いがかなう・・・」

そういう声が、あたりに響いた。

シレン said

「・・・・・・・・ふう。どうして分かったのかな？」

ネルハントにだけは聞かれても大丈夫だろう。

聞かれてまずい事態になったら、まず戦って負けることはない。

「いや、何となくだよ。君はあいつとちがって、うまく隠せてないからね。時々言葉遣いが違ったりとか。だって、この世界には「パクル」なんていう表現はないからね」

！迂闊だった・・・。

まさか、そんなことで見破られるとは思ってなかった。

「時々、ぶつぶつと独り言を言っているときがあるだろ？その内容を耳を澄ませて聞いてみたら、神だの元の世界だのと言っているじゃないか」

「な・・・！！」

神との会話は心の中で話しているつもりだったのに！

声に出してたか・・・？

「自覚がなかったのかい？ならしょうがないな」

何者だこの男・・・ずっと一緒にいたシエルやセリアでも気付か

なかったのに。

「さて、ここまで話してくれたんだ。君の抱えるもの全部、話してくれないかな？」

負けた。こうなったら話さざるを得ない。嘘をついても見抜かれる気がしてならない。

「わかったよ。あの日、僕は車——今でいうと巨大な固い馬車みたいなものだ。に轢かれかけて——」

|
|
|
|
|
-

レイル said

「ふ・・・・・・・・」

私は、次元転移の魔法陣を書きながら、軽く笑った。

数日前、初めて源龍に勝ち、その力の一部を奪ったとき、衝撃の事実を聞かされた。

「わしは、確かに次元間の移動を可能にできるが、自分自身にはその術が使えん。そんなことができれば、わし一人でそちらの世界を滅ぼすのだって可能なのだからな。わしには銃弾などは効かない。そちらの世界では無敵だろう・・・」

「そんな・・・でも、私を呼び寄せたのはお前か？今の話なら私を呼ぶことは可能だが」

「わしだけではない。「あいつ」が余計な邪魔をしなければ、違う人間がこつちに勇者としてくるはずじゃった。元の世界に未練がなく、そのままではすぐに死ぬ予定だったやつがな・・・」

「なら、なぜ私を元の世界に戻さない！まったくの無関係じゃ・・・」

「本来ならすぐにも戻そう。ただあの馬鹿が邪魔をしたせいで、時空どころか、この世界の仕組みそのものに綻びができてしまった。」

お前をこのまま戻せば、元の世界に帰っても、超能力やら魔法やらが使えるようになってしまふ可能性がなくもない。本来なら、記憶とともに何もなかったことにするはずの理が、うまく機能しない可能性があるのでしょよ」

『どこの誰だその馬鹿とやらは！ 見つけ出して・・・見つけ出してこの手で裁いてやる。それがどんな存在であろうと！』

『今のお主に教えては、その者の命が危ない。そいつは確かに余計なことをしでかしたが、殺すわけにはいかないのじゃよ！』

『ならば力づくでも話してもらおうか！』

あれから数時間、ようやく教えてくれたその人物は、とうに葬った。

殺しはしない。それが条件だったからな。

死ぬよりひどい目にあっているだろうが・・・

私が回想に耽っていると、後ろからかすれた声が聞こえてきた。

「お前の・・・望みは、復讐なんかじゃないだろ・・・？ 元の世界

に帰るのが、お前の最大の望みではないのか・・・？我から【世界を渡らせる】力を奪ってしまうなどという、愚かなことを・・・」

ドガアアアアン！

私は、拳で横の壁を殴った

壁が、ぼろぼろと崩れ落ちる。

「なぜ。なぜその話を一番初めに会った時にしなかった！」

「あの時は、お前が勇者と呼ばれたことになっておった。余計なことを考えさせている暇はない。お前が倒すべき存在が、そろそろ覚醒しようかというときだったのだ。お前が倒したあと、皆の賛辞から逃げるようにして空に隠れてからは、わしから会いに行くことはできなかった。だいぶ力を消耗しておったから、あんな高空にまで行くことは出来ぬ」

「では何か？私はもう、元の世界に帰ることはできないとでも？」

「その通りじゃ。誠に申し訳のない・・・じゃがお前が一番復讐すべき相手は、とうに倒されておる。おぬしがここに来るきっかけになった、あの魔王じゃよ」

なら、同じように、おそらくはあいつの犠牲になったのであろう少年だけでも……。

シレン said

「………というわけだ。長い話になって悪かった」

「いや、これだけ興味深い話は聞いたことがない。できれば君のいた世界の話も聞かせてもらいたいものだが、さすがにその時間はないな。ただ、ひとつだけ言えるのが――」

「!!!!!!!!!!!!!!」

ネルハントのセリフは、この世界に来てからの僕の一生をひっくり返すのに等しいものだった。

「確かに……でもそれなら……」

これだけいろいろと考えなくてはならないのに、もう時間がない。

「とりあえず、今の問題は保留だ。さっさとレイルに会いに行くぞ」

――

シエル said

私は、目を閉じて彼らの話を聞いていた。

盗み聞きするようで悪いが、内容は私にも関係があるものだった。

私の特殊能力は、【自分に害を与えるような魔法や毒の感知】。

普通の攻撃魔法などは眼に見えるが、高速で飛ぶ透明の 風の刃などをかわせるのも、この能力のおかげだ。

そんな私に、催眠魔法など効くはずがない。

「やはり、シレンは異世界から来ていたのか・・・」

私は心の中で呟いた。

これは、セリアやガウスに話さないほうがいいな。

私は、今聞いたことを自分の心の中だけに閉じ込めておこうと決めた。

だから、どうか・・・

もう少し、元の世界のことを話してくね。と、心の中で祈った。

第45話（後書き）

大事な部分をすべて隠してすみません。

まだ暴露するには早いな、と。

個人的にはこういう展開は好みなのですが、読んでくださっている皆さんがどうかはわかりません。

また何か苦情とかがありましたら、どんどん言ってください。

第46話（前書き）

やっぱりクライマックスは頭の中にストーリーが出来上がっているときに書き上げるのがいいですね。というところでどんどん書いていくことにしました。

作者の勝手ですみません。

第46話

さて、つきました！

「こら待て止まれ——！」

城に無事着地した僕らは、何かの要塞みたいな城の内部に入ろうと・・・

警戒中の巡邏に見つかつて、今こうして逃げているわけです。

「こんなに広い城をくまなく巡回できるはずがないから、きっと偶然運悪く会っちゃったんだろうね！」

「どこの誰だそんな不運を呼び寄せるような人は！」

ガウスが叫ぶが、皆の視線はガウスに固定される。

「俺じゃねえー！」

しかしあまりふざけている暇もない。

「城塞」

追手の前に、土でできた壁が出現する。

「ふあそそかどかはわ！」

なんだかわからないが、複数人がいろいろとやったせいで、あっけなく吹き飛ばされる。

「^{グリース}滑化！」

地面をつるつるにして、摩擦を0にし、相手を転ばせる。ていうか歩けなくする。

が、氷や土、風圧などで地面の上に道を作られる。

「足止めにもならないのかよ！ならここであまり魔力を消耗したくはなかったんだけど・・・疾風の乱舞」

緑の魔法陣から、継続的に暴風が吹き荒れる。

さすがにこれには参ったらしく、風圧を無視して歩いてくれるよ
うなものはいなかった。

やはりさすがは究極魔法だな！

「お、敵がいたぞ——！」

って前から来るな——！

「飛翔！」

こうなったら空を飛んで逃げるしかない。

逃げる方向は勿論、城の内部だ！

「逃げるぞ！」

地を蹴って飛び上がり、少し飛んで内部への入口らしきドアを発見した。

「俺に任せろ！」

多分この中では一番からだが頑丈なガウスが、ドアを蹴り飛ばすが、鋼鉄製の扉を蹴破れるはずがない。

案の定、ひびを入れたものの、そのまま足を強打した。

「痛ってーーーー！」

「なあ、こいつはなにか、ボケ役なのか？」

ネルハントが真顔で聞いてくる。

「当然違う・・・んだけどねえ」

あまり強く否定できない。

「炎弾の射手」

ネルハントの指から発せられた弾丸は、見事に鍵の部分に全弾命中中。

ギイイイイイイ

鍵を失ったドアが、ゆっくりと内側に開いていく。

「「「「「突風」」」」」

入った瞬間、七人分の風属性魔法がお出迎えしてくれた。
しかも奥からぞろぞろと出てくる。

「ここは俺に任せる！」

何とかそれらをセリアの魔法で防ぎ切った後、ガウスが一人で飛び出して行った。

「任せるぞ！あとで必ず合流しろ！」

この前、風にあおられて炎を出せなかったことを忘れたのだろうか、などとは思わなかった。

そして僕らが走り抜けていく途中で、
墮天使の業火が発動した。

ドゴオオオオオオン！

おいおい！僕らまで爆風に巻き込んでどーすんだ！

後ろからの向かい風かなりきつすぎを受けて、バランスを崩した僕らは全員仲良くこけたが、そのまま爆風が走るよりも速いスピードで僕らを運んで行ってくれた。

ただし、方向のコントロールをするのが難しいため、運任せになっってしまったが。

やっと止まった時には、全員あちこちを壁にぶつけてあざだらけだった。

「敵襲か！」

その少し先にある小部屋のドアが開いて、中から寝間着姿の男性が姿を現した。

その影響か、次々といろいろな人たちが飛び出してくる。

すうー、とおおきく息を吸った僕は、珍しく大声を出してどなった。

[illegible]

ついでにあちこちに風弾を撃ち込んだ。

ドカッ
バシユッ

いろいろな効果音とともに、男のかつらが吹き飛び、壁に穴があく。

「俺の、俺のかつらが――！」

などとほざいているが、誰も追ってくる気配はなかった。

「あんた結構怖いのね・・・」

セリアがボソツとつぶやいた。

「何の事だか全く心当たりがないな！」

そう返すと、とりあえず一番近くにいた男を捕まえる。

「おい、人生を無駄にこんなところで終わらせたくなかったら、レイルの居場所を吐け」

刀を抜いて、男の首筋にあてて拘束する。

「ひい！お、おぢえるからどうか命はお助けて！」

気の弱い男のようだ。

吹き出しそうになったが、何とかこらえられた。おぢえる・・・
お助けて・・・

「レイル様は、一番最上階にいるよお。さっさと早く行ってくれ！」

こいつには忠誠心とか言うものが欠片でもないのだろうか？

そう思ったが、とりあえず男を解放する。

そしてポケットから金貨を五枚ほど出して、

「情報を教えてくれた礼だ。今のがウソだった場合・・・いいな？」

「は、はい！ありがとうございます！いまちゅ！いてっ噛んだ。じゃないありがとうございます！」

僕はさっさとこの愉快な男から目をそらして、上に適当な魔法を放って穴を開けた。

上から消し炭になった何かが落ちてきたが、もはや原形をとどめてないので、なんだったのかはわからない。

「行くぞ！」

飛翔魔法でさっさと上の階まで登っていく。

「ホントにでたらめだな、シレン」

「いや、そうでもない。レイルは頭がいいみたいだから、こんな途中に戦力を分散して配置しても意味がないと思ったんだろう。きっと、あいつのいる部屋が、その部屋のある階に行ったら、うじゃうじゃと出てくるから覚悟しておいてね」

「分かった」

シエルが飛びながら剣を抜いて、何をするのかと思ったら剣を磨き始めた。

「いや、そこまでしなくていいからね？」

「決戦の前に剣を磨いておくのは普通だろう？」

そう言い返されてしまった。

「いやまあそうだけど・・・」

「ところで、そろそろ着くぞ。シレンも準備しておいたほうがいい」

たしかに、そろそろ空が近くなってきた。

つまり、穴のあいた屋根が大きく見えるぐらいに距離が近づいてきたということだ。

「まだ戦うかどうかは分からないだよ。相手の出方次第だし、ちよつと確かめたいこともある・・・！」

最後まで言おうと思ったが、頭が何かの障壁にぶつかった。

「そろそろ敵のお出ましか・・・！」

頭をさすりながら、そのすぐ下の階を見る。

すると、優に一五〇人を超えるような数の魔術師たちが、大量に配置され、呪文を唱えていた。

不気味すぎる・・・！！

「まずい！特殊能力部隊の本隊だ！」

えええええ！この前倒したのが本体じゃないの？

「ここには、優秀な魔法使いや、強力な特殊能力の持ち主、腕に覚えのある戦士などが集められている・・・厄介だな」

僕も今更ここにきて、「人はあまり殺したくない」とか言っているほどの余裕はない。

「手加減なんてしないよ！—— 星屑の雨 ライトニング・ソード」

相手の陣地に、隕石と雷剣が、雨あられと降り注ぐ。

「アトランティスの復讐！ ハルマゲドン 堕天使の業火」

「はあっ！」

降り立ったシエルが、すらりと剣を抜いた。

「取りこぼしは殲滅する！くれぐれも私に魔法を当てないでくれ！」

「誰が当てるか！」

「敵は当てるんじゃないか？」

そんなやり取りの最中にも、シエルが次々にまとめて敵を斬っていく。

前にも言ったが、魔法使いは鎧や何かを装備してないから簡単に斬られてしまうのだ。

だから。

ガキイイイイン

そういう金属音がするということは、そいつが魔法を使えない戦士だということになる。

「ほお、誰かと思ったらこんな可愛いお嬢ちゃんじゃねーか。よくやったもんだな！お前は今ここでは殺さな」

途中で、シエルが至近距離から拳を叩きこみ、男を黙らせた。

ドガッ　ボコッ　ガッ　バキバキ

ちょっと男がかわいそうに見えてきた。

最終的には、シエルに向かって飛んできた魔法に焼かれて絶命した。

多分、最後の瞬間、攻撃魔法を仕掛けた奴には感謝していただろう。

「気色悪い・・・!」

シエルが吐き捨てた。

いや、死んだ人間をそこまでひどく言わなくても。

その後も順調に数を減らしていくが、増援の数のほうが多いため、全く減ったように見えない。

「援軍も無限にいるわけじゃない！ここは私に任せてくれ！」

「あたしも行くわ。たぶんここを潰したらあとは二人でも余裕でしょ？」

女二人を残していくのはためらわれたが、二人の実力を信じ、僕はさっさと真実を確かめに行くことにした。

「あとからガウスと一緒に必ず来いよ！」

死亡フラグかもしれないが、言わずには言えなかった。

「もちろんだ！」

「もちろんよ！」

残り、最上階まで三メートル。

第46話（後書き）

ここからは急展開です。戦闘シーンがあるかわかりません。

ここで最後の質問です。

シエルたちの戦闘シーンは書いたほうがいいですか？
それとも抜きでいいでしょうか？

第47話（前書き）

ふっ！まさか一日に5話も投稿することができる日が来るとは・・・

第47話

「もうすぐ、もうすぐ全ての謎が解けるなネルハント！」

そう、僕が自分の過去を話したあと、彼の話も聞いた。

その時、僕と彼の利害が一応は一致していることに気がついた。

彼は、「今回の一連の事件の謎の解明」をしようと思っているらしい。もちろん、レイルに復讐もしたいそうだが、そこは相手の事情にもよるとのこと。

僕の目的は一応、「元の世界に帰ること。そしてこの世界の狂信団体を止めること」だ。

前半のほうは怪しくなってきたが・・・

「ああ。そしてなつとくでできるだけの理由がなければ、家族を・・・拉致して監禁し、私をこき使おうとしたあいつを・・・殺す」

そんなこんなで、ほかに表現のしようがないが、僕たちは最上階目前で、浮かれ、油断していた。

まさか、最上階が思いのほか天井が高くて、二階層分の高さがあるとは思ってもみなかった。

「拘束！」

僕とネルハントの両手両足に、いろいろな色の枷が生まれた。

「なっ・・・」

「ちっ・・・」

急いで切ろうとしたが、今まで僕を拘束しようとしていた全ての拘束呪文を合わせて十をかけたよりも硬くて、全く歯が立たない。

「飛翔！」

凜とした声が響く。

僕は自分の望まぬ方向・・・いや、望んでいる方向かもしれないが、探し続けていたレイルのいる、最上階の床のほうに強制的に動かされ、何やら魔法陣が輝いている床に軽くたたきつけられた。

飛翔魔法の上掛け。

魔法に同じ魔法を重ねて自分の思っような効果を与えるのは不可能。

【いったん僕とネルハントにかかっている飛翔魔法を解除してもう一回かけなおす】

そんなことが可能なのは、この前僕らが倒した補助魔法無効化の能力でも持っていない限り不可能。

つまり、僕らの知る限り、残るその能力者は……ただひとり！

「おまえが……レイル？」

そう、そこにいたのは、二十五歳ぐらいの長髪の女だった。

「そのとおり。さて、シレン。お前の目的はなんだ？ 答えによっては――」

手足が全く動かせない。

が、口さえ動けば使える魔法など山ほどある！

「風の刃」

生まれた風の刃がロープを切り裂こうとするが、はじかれたその刃が全く別の方向に飛び、壁を大きく抉った。

「やめておきなさい・・・私には、あなたと戦う気は全くない。ただ今一度、話を聞いてほしい。ただ・・・ネルハント、だったか？お前には少し用があるな！」

「・・・何のことだ？早く人質に取った身内を解放しろ！」

このときのネルハントに、僕は違和感を覚えた。

汗の量が半端ではないのだ。

こういつときは、しっかり相手を見据えているべきだというのは僕でもわかる。

「は？身内？何を言っている？お前は自分から進んで協力を申し出たのではないか」

おかしい。

何かが決定的に歪んでいる気がしてならない。

「・・・・・・！」

ネルハントの顔がすべてを物語っていた。

それは、「しまった、見抜かれた！というかシレンにばれた・・・！」とでも言っているような顔だった。

「ネルハント。どういふことか話してもらおうか」

拘束されたネルハントの首筋に、風の刃が当てられる。

今は、確実にこいつのほうが悪い気がする。

「し、知らない・・・私は何の事だか」

ドンッ！

大きな音が響き、何事かと音がしたほうを見ると、思い切り横の壁を殴った格好のレイルが、ネルハントをにらみつけていた。

壁には信じがたいほどの形の穴があき、（漏斗状に半径三メートルの穴が開いていた）レイルの手からは煙が立ち上っていた。

「いい加減にしろよ、今はネルハントと名乗っているのか。私がこの世界に無理やり連れてこられたことに、お前がかかわっているの

はもうとつくに知っている。今更ウソをついて隠しても、なにもいいことはないぞ」

「くっ・・・・・・・・・・！」

僕がネルハントの話聞いてから、ずっと考えていたことだ。

それは、【もしかしたらレイルという人は敵ではないのかもしれない】

だから、それ以降「レイルに会いに行く」「真実を確かめる」「全ての謎が解ける」とは言ったが、レイルを倒す、殺すとかは一言も言っていない。

「どういうことだ、ネルハント？」

「ぐう・・・」

もはやそこに、威厳のある宮廷魔術師の姿はなかった。

あるのは、敗北に顔をゆがめた、醜い男のみ。

「レイル・・・もしかしたら、とんでもない誤解をしていた気がする。よかったら貴女の境遇を、お話していただだけませんか？」

「いいぞ、まず言っておくが、私はおまえに全く敵意を抱いていない。それはまずわかっておいてくれ。証拠は、先ほど床に落としたとき。あのまま殺すことも可能だった。もつと高速でたたきつけてもよかったのだが。ネルハントに対してはな」

そう前置きすると、レイルが大きく息を吸って、決心したように話した。

——私は、二〇二〇年、突然目の前が真っ暗になり、頭痛がし、吐き気もするという地獄の時間を味わった後、気がついたら全く分からない、部屋の中にいた。

屋外で原子力の開発実験していたはずが、いきなり見たことのない室内にいたんだ、かなり混乱もした。

まず外に出て驚いた。電柱もない、高架レールもない、車も走っていない。

人が着ているのはファンタジーに出てくるような服ばかり。

そしたらどこかの誰かが、「お前は伝説の勇者じゃないか」なんていいだした。

なんでも、黒い長髪、目も黒い女が伝説の勇者として現れる、という予言があったらしい。

こうしてこの国のトップであった王の前に連れて行かれ、魔王を倒して来いと言われた。

その時はなんてテンプレな、と笑い飛ばす余裕があったのだが、元の世界に戻る方法が見つからないということの旅の途中で知り、私は怒り狂った。

私をこの世界に呼び寄せたのは誰だ、と一生懸命に探した。魔王退治なんて二の次だ。

私は元の世界で、もうすぐ結婚する予定だった。

その時の年齢も今と同じぐらいで、二十七歳だった。まだいろいろとやりたいこともあったし、シレン、君でも怒るだろ？ちなみに、その時の結婚相手は、どうやら大人になったシレン君だったらしい」

「そんな・・・！」

頭の中がこんがらがった。

なんで未来から？僕よりも先にこの世界に来てたんだから・・・いや待てよ。レイルの場合は「召喚」されてきたんだ。だから、僕のほうが先にこの世界に来てたことに・・・。なら、なぜ僕はここに飛ばされてきたんだ？

賞味、未来の奥さんになる予定だった人が目の前にいても、そっちを全く気にとめることはできなかった。

「君をここに飛ばしたのは、そこにいる龍だ。名前を『源龍』という」

「！・・・異世界へと渡る力！」

「微妙に違うな。【異世界へ渡らせる力】とでも言ったほうがいい。拒否権はこっちにないし、この源龍自身は異世界に行くことはできない」

「・・・」

僕は、源龍を睨みつけた。

この場に及んで、レイルが嘘を言っているとは思わない。

が、一応言っておく。

「おい源龍・・・今の話は本当か？」

「ああ、本当だ」

僕も「人権は大事にしましょう」と言っ
て育てられてきた人間だ。

強制的に、異世界に引きずり込むなんて・・・許せることじゃない。
い。

「おいおい、源龍を恨むのはよせ。こいつは本来なら、【元の世界に未練がなく、なおかつ放っておけばもうすぐ死ぬ運命にある人間】を勇者としてこの世界に召喚させる役割を担っているだけ。ちなみにこいつは一応、この世界の時間を司っている神でもある。でも、もともとお前が来るはずだったんだよね？源龍よ。シレン、お前は元の世界でこんなことを考えてたんじゃないか？『毎日が退屈でつまらない、何か新しく楽しいことがないか』とかな。そして、トラックにはねられて死にかけたそうじゃないか。まあ君が選ばれたのは半分は君のせいでもある」

「いや、シレン君。君はまだあの時点で死ぬ運命にはなかった。それは知っているだろう。ただその原因になったのは、君のいた世界

の神だということは把握していても、それがここに来る前に君が会った、軽薄な感じの男だったことは知らないだろう？

実はあいつがまず、わしの召喚魔法に干渉（邪魔）し、召喚する予定だった【大人になったシレ・・・元の世界の真野優】の代わりに、その妻となるはずのレイルが飛ばされてしまったんだ。

そしてレイルが自分の夢を壊したあいつへの復讐を誓い、見事に果たしたというわけだ。だから今、あの軽薄男は【シレンたちのいた世界とこの世界の挟間】に閉じ込められてしまったんだよ。白い、何もない空間だ。

私が時間をさかのぼって君と軽薄男の会話をのぞかせてもらったが、あそこは神の住む世界の一步手前なんかじゃない。永久に無の世界で生き続ける、いわば檻のようなものだ。

だが腐ってもあいつは、私と同じような能力をもつ神。次元を渡る力こそないが、時間を操ることはできる。

そしてそうだな。君が通る道のトラックの運転手の妻の病気の進行を早めたりしたのかな？で慌てたトラックに君が轢かれて死ぬようにした。

そして君を未来に飛ばし、この世界と君のいた世界の通路が開いた二〇三〇年からこの世界に送り込んだ。途中、自分のいる檻の中に君を引き摺り込んで嘘の情報を流した」

僕はこれを聞かされても驚きはしなかった。驚きつかれていたのもあるが、事前にネルハントから聞かされていたのだ。

そうあの時は、

「ただ一つ言えることは、君はこの世界に来る時に会った『イエス・

キリスト』とやらの言葉を信じすぎだ。そいつがウソをついていたらどうする?」

と言われていたのだ。

「それはネルハントから聞かされていたから知っています」

「やはりな。こいつは・・・いや、やめておこう。話が長くなる。要点だけ話そう。何か訊きたいことはあるか?」

もちろんあるさ。

「なんで、僕たちを攻撃してきたんですか? 特殊能力部隊を送り込んできたりして」

「あれは、私をこの世界に無理やり連れてきたやつをこの手で裁こうと組織したものだ、それをこのネルハントが操っていたのだ。仕組みは簡単。私からの命令だと偽って、部隊全体に命令を流す。それだけだ。だから君が会ったときも、こいつがリーダーだっただろ? 君に何と説明したかは知らないが、人質を取っていることを聞かせているような奴をだれがわざわざリーダーに据えるんだ」

確かに・・・僕でもいつ裏切ってもおかしくないようなやつをリ

ーダーにはしないだろう。

「じゃあ、今シエルやセリア、ガウスが戦っているのは？」

「あれは私が警戒しろと言っていたからだ。済まない。ただ積極的に戦っているのは間違いなくネルハントの指揮下にある兵たちだ。私の部下ではない」

これで一つの疑問が解決した。

僕は全身全霊の力を込めてネルハントを睨みつけた。

「じゃあお願いがあります。今すぐ僕の仲間たちへの攻撃を止めてください！」

「それはできない・・・ネルハントの部下は、もはや私の管理下にはない。こいつのことだ。自分に従わないやつを途中でこつそり殺していくぐらいはしているだろう。もはや敵ばかりだよ。それに・・・もう手遅れかもしれない」

そう言って指をさした先には、血まみれで、息も絶え絶えなシエルの姿があった。

第47話（後書き）

次回、瀕死のシエルの回想シーンになります。

そこにシレン君との恋愛シーンを入れるか悩んでいるのですがどうします？

ちなみに、もう五〇話で終わることになりました。すみません。また気が向いたら続編を書きます。

第48話（前書き）

今回はずいぶん時間をさかのぼって回想シーンに入ります。

もちろん、それだけではありませんよ！

第48話

シエル said

「おい、大丈夫か！誰にやられた！」

「体に銃創がある・・・ネルタか？しかし、あいつはそんなに強くないはず・・・誰にやられた？事と次第によっては私が直々に処分してやるう」

ふ・・・

自分の中の血がどくと流れ出しているのわかる。

「治癒魔法で何とかならないのか？」

「むりだ・・・失った血液はもう戻らない。聞いたことがあるだろう？出血多量だ」

そうか……。シレンなら何とかなるかと思ったが、さすがに無理か。

私は、走馬灯のように流れていく今までの思い出をゆっくりと眺めていた。

1
2
3
4
5
6
7

一番初めに会ったときは、軟弱そうな男に見えた。

実際に戦ってみて、途中で大事なことをぼろつと漏らしてしまったのにも気づかないぐらい、頭が悪いということも分かった。

そして、私はあいつが異世界から来た人かもしれない、とすぐに見抜くことができた。

この世界に、「ガス」というものは存在しない。

だから、「ガス欠」なんて言葉をこの世界の人間が使うはずがない。

私もとつさに「黙れ！」とか何とか返事をしてしまった気がするが、本来なら首をかしげるか、「ガスケツ？」と言わなくてはならないはず。

それからなんやかんやで一緒に旅に出ることになった。

すぐに分かったのが、こいつの持つ実力が半端じゃないということ。

おそらく、この世界に来る時にもらった力なんだろうとは思ったが、それに引き換え、頭の悪さもどんどん露見していった。

こいつの欠点は、防御ができないことなんかじゃない。

「人を信じすぎる」

これ以外にないだろう。

それから旅を続けていき、面白いことなどいろいろ体験し、レイルと一緒にいた頃よりも充実した気分を味わえていた。

そして、武闘会直後、シレンとセリアが昏睡しているときに、ガウスがふと尋ねてきた。

「なあ、シレンってセリアのことどう思ってるんだろっな？」

私に聞くな、と思ったが、それを聞いた理由には心当たりがある。

「私に聞かれても困る。それよりなんでそんなことを？」

もちろん、ワザと訊いてやった。

「べべ、別に何も？特に理由はないぜのだが」

ものすごくあわてているのがわかる。

「はいはいわかったわかった。ガウス、お前が本当に聞きたいことの答えを教えてやる。セリアは、シレンよりお前の方ばかり見てるぞ」

「な・・・・・・・・！？」

とたんに、ガウスの顔が真っ赤に染まった。

おー。今日何回目だこいつ。

「そうか・・・よかったよかった・・・にやあ」

「ニヤけるな、気色悪い」

「き、気色悪いってお前・・・お前も、シレンの方見るたびにやにやしてるくせに!」

「?お前何を言っている?」

「こっちは全く心当たりがない。」

「自覚ないのか・・・」

そんな会話をしていると、ゆっくりとシレンが目を開けた。

そしてセリアが回復すると、ガウスが喜々としてそっちに駆け寄

って行った。

わかりやすいやつ・・・

それから、時がたってネルハントとやらに眠らされそうになった時のこと。

あの話によって、想像通り、シレンの素性が分かった。

もうわかるだろうが、私は大事なことをシレンに隠している。

【自分がなぜこの世界に来たのか、という記憶を失ったシレンと同じ世界から来た少女】

それが、私だ。

気がついたらこの世界に来ていて、レイルにつかまり、異世界から来たことを話したら、なんだか知らないが仲間に入れてくれることになった。

目的は、この世界に連れてきたやつへの復讐。

私はあまり興味がなかったが、元の世界・・・しかも、未来の世界からきたレイルとは話が合った。

そして、レイルの副官が、私が機密情報を漏らさないように、と予防策として口止め用の魔法をかけようとしたが、レイルが止めた。

「魔法で強制はしないが、一応誰かに素性や、こちらの組織のことを聞かれたら、適当な嘘をついておいてくれると助かるな」

もちろん断る理由なんてなかった。

そして内部に自分が上に行きたいと欲を出した裏切り者がいて、魔法使いたちが集まる大会を制圧し、己の言うことに従わせようと部隊を率いて、そう・・・シレンと初めて会ったあの試合会場にいった。

レイルに頼まれて、私は戦いに行くが、裏切り者とシレンを間違えて戦いを挑んでしまった。

だって、大人の刺客よりも強大な力を持ったただの学生なんている

はずがないと思って、とりあえず子どもの振りをした刺客か！と殺しにかかったというわけだ。

そして、シレンの話聞き、不覚にもそのレイルたちが狂信団体だという話を信じてしまった。

おそらくそれを聞かなくても一緒について言ったと思うが、レイルの部下たちが時々怪しいことをしていて、それが何となく犯罪だろうと（レイルはそんなことをしていないとは思ったが）は感じていたため、それを制圧しようというシレンの意見には賛同できた。

今になってそれがネルハントの部下だとわかったが、そこまで私も知らなかった。

そして今になって、レイルの部下たちと戦うことになったとき。

私はレイルと戦う気なんてなかったから、それよりも私が怪しいと睨んでいた部下たちを倒そうと戦いに行った。

初めは楽勝だったが、途中で何人かの戦士に囲まれ、応戦しているとところに魔法封じの結界を張られてしまった。

おそらくは、特殊能力ではないが、対魔法使い戦では強力な戦力

になるため、特殊部隊に入れられたのだろう。そういえばネルハントが結界使いがいるとか何とか言っていたような気もするし、レイル本人からも対源龍戦に役立つ人材を手に入れた！と聞いていた覚えがある。

そうして、魔法を封じられた中でいろいろな攻撃魔法やネルタの銃弾によって、さんざんにやられて今に至る、と。

とりあえず持っていた剣を決壊使いめがけて投擲し、それが命中して結界が壊れたとたん、自分を起点に究極魔法をいくつか瞬間的に発動させて、敵を薙ぎ払った後、飛翔をつかってこの部屋まで来た。というわけだ。

レイルとシレンなら助けしてくれるだろうと思っただけだが、あまりにも出血が多すぎたらしい。

まあ、最後までうつすらと抱いていたレイルへの疑いも晴れ、ネルハントが主犯だったと知ることができたから、良ししよう。

死んだらどうなるか、私は知らない。

でも、異世界なんていうものが存在したんだから、天国や地獄があってもおかしくないだろう。

そこで、シレンやガウスやセリアたちを待っているという。

――

「では、そろそろか。私も口をあけていることすら・・・難しくなってきたからな」

口に血がたまっていくが、よく昔ドラマとかでみたことがある。

大抵死にかけの人間が血を吐いた後は、一秒ぐらいで息の根が止まる。

「おい、まだ助かるからな！」

とかシレンが言っているが、そうでないことぐらい自分でもわかる。

本当に、最後の最後まで甘いやつだ――。

「お前は、嘘が下手だな・・・」

思わずつぶやいていた。

「いや、本当だって！」

とか何とか言っている気がするが、もはや聞き取ることすら難しくなってきた。

耳がおかしいのか？と思ったが自分の意識が薄れてきているからだとわかる。

「また、どこかで会おうな・・・」

「・・・い！・・・る！」

だんだんと目の前が暗くなってくる。

「・・・・・・・・・・！」

突然、私の体がふわりと浮いて、発光し出した。

なぜだ？

とか思う暇もなく、私の体全体が光に包まれた。

そして、声ではなく私の頭に直接何かが響いてきた。

『せめて、元の世界に送り返してやろう。通り魔にやられる寸前の時間にこちらに来たらしいが、まるでそのまま通り魔にやられているかのように偽装することはできるだろう。キチンと両親に弔ってもらいなさい』

身も蓋もない、助かるとかそういうことを全く言っていないが、それでも私は喜べた。

『それができるなら、シレンのほうもよろしくお願いします。車にひかれないように、してあげてください！』

思わず、元の世界にた頃の口調に戻ってしまっていた。

『もちろん。約束しよう』

と、その時、また違う声が頭の中に響いて・・・きそうになった。

が、その瞬間、私の体はコンクリートの上に横たわっていた。

私を切り裂いたということになっている通り魔が、あたりの人に取り押さえられている。

私のもとにも誰かが来ているが、もう助からないのは太鼓判が押されている。

そしてだんだん私の意識がまた薄れていって・・・完全に消えた。

最後の瞬間、私の体がまたひとときわ激しく光ったが、それが何か

確かめる前に、意識が消えた。

そして同じ最後の瞬間に、私は向こうの世界に行くきっかけになった通り魔さんに、ちよつとだけ感謝した。

第48話（後書き）

はい、ここでとりあえず終了です！

49話と50話で話が決着し、そのあと終章があるという展開になります。

長い間本当にありがとうございました。

次の投稿がいつになるかはわかりませんが（この後また続きを書くかも）お楽しみに！

第49話（前書き）

さて、今回がクライマックスですかね

場合によっては、50話が終章になるかもしれませんが、お許しください。

第49話

シレン said

シエルのうわ言が終わった。

本人は言っていないつもりだろうが、そのまま言葉として流れ出ていた。

おかげで、僕はシエルの過去を、今になってようやく知ることができた。

目の前で、血まみれのシエルの体がふわりと浮いた。

そして何らかの魔法陣のほうへゆっくりと動く。

そして、シエルの体が眩しく光って、目を開けた時にはもう、その姿はなかった。

「なにがあつたんだ??？」

「大丈夫・・・ではないが、元の世界に送り返した。きちんと両親に弔ってもらえるほうがいいだろうと思ってな。この世界で死ぬよりは、元の世界でのほうがいいと本人も最後に言っていた」

「そっか・・・」

「君もどうだ？今なら同じ様に元の世界に帰すことができるが」

なるほど。

僕はここにいたっていろいろなことに気がついた。

この魔法陣が、元の世界に帰るための鍵。

そして、レイルは元の世界に帰ろうと、必死で帰る方法を探し続けていた。

源龍の力を奪ったが、それではレイル本人が帰れない。

なら、同じような立場の人間だけでも帰してあげよう、とそういうことだろう。

だが、僕はそれに足を踏み入れなかった。

「あなたの目的は、復讐、でしたね？あとそれにはだれが残っているんです？」

「もちろん、この目の前にいる、最低な野郎だけだ。この屑が！」

レイルが何かの魔法でネルハントを吹き飛ばそうとするが、あらわれた防壁に防がれてしまう。

「ただ、こいつは嘘をついていた。火と光だけじゃない。私とおなじぐらいの魔法の力を使える。普通に戦えば私が勝つが、この転移の魔法と使ったためにあまり力が残っていない。だからこいつを倒してから、私は帰る。遠慮せずに早く帰れ！」

僕は、ニヤツと笑った。

なんだ、意外といい人じゃないか、レイルは。

「神々の終焉！」

それに比べてこいつは、シエルを殺し、ここにいる全員の運命を狂わせた。

「僕も気が変わりました。倒すべき相手は貴女ではありません。・
・この、ただの狂った殺人犯だ！」

547

虹色の奔流がネルハントを襲う。

「ほう、君も協力してくれるのか。なら、今のうちにさっさと倒すか！」

虹色の奔流をまともに食らって生き延びたものはまだいない。

触れた瞬間、触った部分が吹き飛ぶのだ。シールドで防ぎ切るか、飛んでかわすくらいしか対処法はない。

「シレン君。君の技はすでに一回見ている。そんなのにやられる私ではない！」

虹の奔流に対して、斜めに作られたシールドは僕の攻撃を受け流した。

「へえ、ちょっとはやるじゃん。……ぶっ飛ばしてやる」

「じゃ、ちょっと俺もさんせーん♪」

「あたしも、ちょっと手伝わせてもらおうかしら……シエルの敵討ちを、ね」

どこに隠れていたのか、ガウスとセリアが登場した。

「間違えるなよ！倒すのはレイルじゃない、ネルハントだからな！」

「もちろん。俺たちを甘く見るなよ。はじめから、こんな奴は胡散

くさかったんだよ!」

「いやいや、自分敬語使って今にも「サインください!」とか言い出しそうだったよね?

「それに、あたしたちも話は聞いていたわ。私は上から援護攻撃してたから、会話もまる聞こえ♪」

なら話は早い。

「さて、ラスボス狩りといきますか!」

「疾風の乱舞!」

ついに本性を現したネルハントが、風の究極魔法を発動する。

「え?火と光だけじゃないの?—————なんちゃってな!セリア!今だ!」

「了解! 疾風の乱舞!」

ネルハントに近づかせまいと吹き荒れていた暴風と、セリアが生み出した疾風がぶつかり合う。

そしてセリアの風圧を身にまとったガウスが、そのままネルハントに向かって特攻を掛ける。

本来なら暴風に押し返されて終わりだが、後ろから追い風を受け、勢いをそのままに突っ込んでいく。

二つの圧力に挟まれてぺしゃんこになるかと思いきや、ガウスが纏った風圧のおかげで、持ちこたえている。

「おらあ！」

がっ！という音とともに、ガウスの渾身の一撃がネルハントの顎にヒットした。

「てめーのせいでどれだけの人犠牲になったと思ってんだ！」

「知らない！そんなことは私の知ったことではない！」

そういうと、あたりにすべての究極魔法を展開する。

十二色の魔法陣が、僕たちを取り囲むように出現する。

「へえ。まだやる気か。来いよ。ド三流。俺たちとの格の違いってやつを見せてやる！」

セリフとられた——！

一回言ってみたかったのに。

こんな時に何考えているんだ僕は、と自分でもおかしく思ったが、あまりにもショクな出来事があつたせいで、脳が「普段と同じ様な行動」、という気休めを求めたのかもしれない。

「誰が三流だ！私は・・・私は最強の魔術師だ！」

多重展開された魔法陣から、十二の究極魔法が発動する。

轟音と煙が立ち上り、僕たちの姿を隠す。

「ははははは！どうだ、参ったか！さっさと神のもとへ行ってい！」

自分の力を過信したのか、ネルハントが勝ち誇ったような声を上げる。

「いや、そんなことを言われると神なんて大嫌いな僕は、余計行きたくなくなるな！」

「な、何であれを食らって生きてられる！」

「さっきの僕の攻撃、こういうことかわかってなかったみたいだから教えてあげるけど、あれはすべての究極魔法を一つに纏めたものだよ。つまり、僕も十二個以上の究極魔法を同時に展開できるってこと。逆の属性を持つ究極魔法の魔法陣をお前の魔法陣と重ねて出現させて、効果を打ち消した、ってわけさ」

たとえば、火の反対は水。

これは簡単だけど、風の反対は土。暴風を地割れが打ち消すことは不可能。

だから、打ち消したい場合には魔法陣と魔法陣をぶつけて壊すしかない。

「魔法陣が展開されないような、最上級以下の魔法とかを防ぐのは無理だけど、よりにもよって、究極魔法で僕に勝負を挑んでくるなんてね。その時点でもう……お前の負けだ」

「はは！何を余裕こいている？今のは攻撃を防いだけ、それでは私は死なんぞ！」

そう笑っているネルハントの腹に、大きな穴があく。

虹色の奔流がその穴を通過していった。

「僕は十二個以上の究極魔法を同時展開できる、といっただろ？打ち消すだけで終わるはずがない、ついでに言うとな煙や砂埃のおかげでおまえの視界が奪われ、僕のこの 神々の終焉 の予備動作すべてを見逃したね。そして煙が晴れた頃には僕は魔法を完成させて、隙を見て放ったというわけさ。ちなみにさすがにそうそう何発も打てる業じゃないし、さっきの防御と一番初めの攻撃で大分消耗していたけど、お前が教えてくれた条件指定の技のおかげで助かったよ。『火力は人一人分を倒すのに十分な量』って指定できたしな。――

―― お前の敗因すべて、貴様のせいだ」

カッコ良く決めたはずだが、見るとネルハントの腹に空いた穴がふさがっている。

「よくも・・・よくもこの私をコケにしてくれたな。ぶちころ」

「『『『黙れ！』』』」

僕は刀を抜いて、星斬流の技の一つである、合鏡分刀をつかった。

これはまだ僕が成功したことのない技で、普通なら二人に分身するところを永遠に続く合わせ鏡のように、望む数まで増やすことができる。

「さてネルハント。殺人及び偽証罪、傷害罪その他諸々の罪の報いを受けてもらおうか！」

百人ほどの僕の持った刀の先が、ネルハントの全身を覆う。

ガウスは範囲より温度を優先した火球を手のひらに生み出しているし、刀の周りにはいくつもの風の刃と水の三叉矛、雷の剣などいろいろな物が浮いていて、そのさらに回りをセリアの生み出した導

火線がぐるぐると回っている。

そしてレイルは僕の神々の終焉を真似て、すべての属性の魔法陣を一行に重ね、レイルとネルハントを結ぶ射線上に配置している。

その上、物理的な重さを持つ鉄球を飛翔魔法でネルハントの頭上に浮かせ、いつでも加速させながら押しつぶすことが可能な構えである。

もちろんのこと、床はしっかりと補強されているし、転移の魔法陣も消えてはいない。

「これだけの攻撃を受けてまで生きてられるつもり？」

「くっ……」

ここで、皆の心が一つになった。

「俺、僕、私、あたしの怒りのこもった、神の鉄槌を食らいやがれ……」

同時に僕たちがホールドしていた全ての攻撃が炸裂する。

城全体を揺るがすような震動、鼓膜が何枚あっても足りないぐらの轟音、爆発音、目が灼けるような閃光が迸り、あたりが真っ白になった。

それが収まった頃には、ネルハントはいなかった。

代わりに、消し炭と化した殺人鬼の遺体だけがあたりに散らばって残っていた。

刀でネルハントの全身を串刺しにした僕の分身たちは、魔法の巻き添えをくらって、ネルハントと一緒に消滅した。

「終わった……………のか？」

僕たちは、皆一斉に両手を上げて喜んだ。

が、それはまだ早かったらしい。

「はい、どうもこんにちわー ガウス君とセリアさんに会ったのは初めてだね」

あの軽薄男が、目の前の何もない空間に突如できた黒い裂け目から姿を現した。

「レイルさんが封印したんじゃないの?!」

僕たち三人の疑問に答えてくれたのは、驚いた顔のレイルではなく、あの軽薄男だった。

「そうだったんだけど、今さっきシエルさんが元の世界に戻ったでしょー?あれでまた理が歪んで、僕も出てくることができましたー」

「

「そうか。それを狙って、僕を向こうの世界から呼び出したってわけか。レイルを倒せば術は解除されるし、レイルに元の世界に送り返してもらえばまた理が歪んでどのみちお前が出てくることができる……！」

「そのとおり！」

親指を突き出してこっちにウィンクしてくるが、今はそんな軽薄男の動作には吐き気を覚えるだけだ。（昔も大して変わらなかったが）

「そうか……でもお主は一つ忘れておるな。この世界の時間と空間をつかさどっているのは私であってもお前ではない。わしが次元を超えて、向こうの世界に通じる穴をあけるから、さっさと消えてレイルを元の時間帯に戻してやれ……！」

予想外のところから、罵倒の声が上がった。

そう、先ほどからじつと様子を見ていた源龍である。

「存在消去！」

この世界をつかさどっている神だからこそできる技。

この軽薄は殺してはいけならしいが、この世界から存在を消して、ほかの神々のもとへ追い返すことは可能らしい。

目の前で出てきたばかりの軽薄の体が歪んだ。

「いやだ、いやだ！もうあそこには戻りたくないー！」

その声がまだ中を漂っているうちに、バチンという音とともに、軽薄の姿が消えた。

「さあ、シレン。お前はもうこの世界での役目を果たした。本来とは違う形だな。お礼とお詫びをしたいが、わしら神が必要以上にかわることは許されていない。だから謝るしかできないが・・・許してくれと言わん。許されるはずが・・・」

僕は、その源龍の言葉を遮った。

「この世界に來た記憶を、消さないでもらえますか？それだけで十分なお礼になります。この世界での経験はつらいこともあったけど、楽しいことや思い出のほうかはるかに多い」

「そうか・・・その欲のなさ、まさに勇者だな」

源龍が言うが、僕は笑って流した。

「いえ、ただの自分の人生を甘く見ていた、一介の学生です」

「そうか。もう元の世界に戻ったら、人生をしっかりと楽しめよ」

「私の夫になるかどうか、未来が変わった世界ではどうなっているのかは知らないが、ほかにいい人が見つからなかったら、いつでも私のもとに來いよ」

言っと、源龍やレイルがまた笑った。

ガウスとセリアが、旅の終わりを抱き合って喜んでいるのを目の端にとらえた。

「そうだ、ひとつ聞きたいことがあります。僕が元の世界戻ったら、死んだことになるんですか？それともはじめからいなかったことになるんですか？」

一応、両親には帰ると約束して出てきているのだ。

それは聞いておきたかった。

「死んだことになるな。ここで戦って果てたことになる。ただ、ここにいるセリアとガウスだけは真実を知っておる。おおそうじゃ、知りたいだろうから教えてやろう。お前が帰った後、あの二人は普段の生活に戻った。が、学校の誰よりも、先生よりも強くなり、宮廷魔術師としてネルハントの代わりを務めた。——夫婦で」

僕はクスツと笑った。

やはり、今の様子だとあの二人ならそうなりそうだな。

「それでは、最後に一つ宿題をやるう」

「何で????????????」

なんで異世界まで来て、最後の最後に宿題を出されなきゃならんのだ。

「毎日が退屈なんじゃろう？お前の世界にあるものの中で、わしが一番好きな作品の一節を話してやる。『この世の関節は外れてしまった。何と呪われた因果か。それを直すために、生れついたとは！』
・・・今の君の立場にものすごく適していると思わんか？」

僕はまた笑い飛ばした。

「まったく思いません。確かに世界の理はおかしくなってるし、それを直すためにこの世界に生れついたけど、別に呪われてなんかいないし、元の世界に帰ることさえできるなら、こちらの世界に来てもよかったです、と思います」

「そうか。合格だ。あとは暇な時にでも探してみるがよい」

これで、もし漫画とか携帯小説、ライトノベルだったりしたら笑

うぞ。

僕は唐突に閃いた。

「今回のことを、小説として書いてみたいと思うんですがいいでしょうか？」

構想を練ったりしなくても、事実として体験したんだから、すらすらい文章が書けるだろう。

「もちろんいいとも。それを生きがいにも頑張るんじゃないぞ」

「分かりました。レイルも元の世界に戻れるんですね。ならレイルさんの名前を聞いておいてもいいですか？」

「それはだめだ。歴史が変わる。あらかじめ結ばれる予定だと知っていて会うのと、会ってから知るのは大違いだ。知りたければ、この世界の思い出を忘れずに、長生きするんじゃない」

魔法陣が光り出した。

「そろそろじゃ。仲間に挨拶をしていくがよい」

僕は、今だにずっと抱き合って喜んでいる二人に声をかける。

「おい、邪魔して悪いが、最後に一つだけ言っておきたいことがあるんだー！」

はっ！という表情で、ガウスたちがこつちを向く。頭の中から足の親指まで、二人とも真っ赤になっている。

「お前も元の世界に帰るのか。――――じゃあな！」

「おう、またな！」

「思い出として、その杖、もらっていい？」

笑いながらセリアが言う。

「……この杖、もう二度と手に入らないだろう。アドバンスドスリーはもういないしな。」

それをわかっていつてるのだろう。大笑いしていた。

「いいよ。僕にはもう使う機会がないし」

世界に一つしかない最高級の杖を、気安く放って渡す。

実は僕たちみんな、杖なんかなくても魔法がいつも通り使えるのだから、本当に記念品にするつもりなんだろう。

「じゃあ、俺にもその刀をくれ！」

ガウスが叫ぶ。

「いいよ。ほれ」

これまた一級品の刀を気安く投げる。

バシッとキャッチしたガウスが言う。

「で、お前のことはみんなにはなんて言えばいいんだ？」

「死んだことにしておかないとだめだそうだから、決して口を滑らさないでね！」

「ここまででいいのだが、ニヤツと笑って付け足す。

「あ、でもお前ら二人の子どもにぐらいは話してやってもいいんじゃないか？」

また二人の顔が真っ赤になった。

「いなやんであたしがのこんな俺たちはの！そんな」

二人が慌てているすきに、僕は魔法陣の中央へと一歩踏み出す。

「――またな！」

「おう！」

「またねー！」

二人が手を振っているのが見えた。

その瞬間、僕の意識が消えた。

――関節が外れた世界なら、またあの二人に会うこともあ
るかな。こんどはあの二人にこちらの世界に来てもらおう。

目が覚めると、僕は病院のベッドの上にいた。

「よかったー！あなた、トラックにはねられて以来意識がなかったのよ。覚えてる？」

うん。覚えてるよお母さん。その間に会ったことまで全部ね。

僕はゆっくりと体を起こす。どこにも傷はなかった。

「お医者さんもね、何で意識がないのかわからないって言うてたの。本当によかった！」

お父さんも、知らせを聞いて慌ててやってきた。

「無事だったか！よかった！最後にお前に言ったセリフが、『なんだこの点数は！もつといい点取らないか！』じゃ救われないところだったよ」

僕は、その日のうちに退院し、懐かしい家に帰ることができた。

そして、今まで書いていた小説のデータを消し、新しく書き始めた。

両親は、回復&退院祝いにどこかに食べに行こうか、といったが、僕が普通の料理でいい、といったので晩御飯のカレーができるまでの間、パソコンに向かっていた。

タイトルはまだ決めていないが、書き出しだけはもう決めてある。

「こんにちは。僕はどこにでもいる普通の高校生。公立のどこにもある高校に通い、成績も平均的。運動神経も目立っていいわけじゃない。強いて言うなら、日本の武道、剣道が得意なぐらいだろう

」

第49話（後書き）

さて、次回で終わりです！

最後の最後にどうなるか、お楽しみに！

エピソード（前書き）

長い間ありがとうございました。

次回作も、ありましたらまたよろしくお願いします。

この作品とも少しは絡めていく予定？なので

エピソード

<シエル said>

目をあけると、ややオレンジがかった白い世界の中にいた。

「ここが、天国？地獄にも見えないけど・・・」

ふと自分が寝ているものを見下ろすと、ふかふかの白いベッドだった。

横には、輸血用の点滴が置いてある。

「そうか・・・時間を操れるものがいたんだった。おそらくはあの源龍がこの世界と向こうの世界の間に通路を作り、それを軽薄は少しゆがめて、私の怪我が少しでも軽くなり、この世界の輸血で助かるようにしてくれたんだな。向こうには輸血なんてなかったが、この世界ならやや多めに出血しようが、輸血という方法があるからな」

ゆっくりと起き上がろうとしたが、全身に痛みが走る。

はは・・・傷はやはり治っていなかったか。

「大丈夫？あなた！目を覚ましたわよ！」

父さんと母さんがやってくる。

「私をさしたあの人は・・・？」

「大丈夫、今はもうすでに刑務所の中だ。もうすぐ裁判が始まるけど、絶対に勝訴してみせるからな」

「ううん、いい。もう許してあげてもいいかなって思っただけど・・・」

これは事実。いやあ、向こうの世界ではもうちょっと堅苦しい口調でしゃべってたから、ちょっとこの喋り方は軽く照れるな。

だってあの通り魔、何もしてないしね。

包丁か何かで刺されたのは事実だけど、（さっき確認したら、魔法でのやけどもなければ足に穴も空いてなかった。なんでこうなっ

たのかは永遠の謎だ）本当ならもつとひどいけがで死ぬところだったからね。今更あれぐらい・・・っておもうし、向こうの世界でシレンと戦ったときとかで痛みには結構なれている。

「お前はやさしいからな。でも実はあいつは、ほかに何件か事件を起こしてたんだが、証拠がなくてな。でも今は犯罪者として、再発防止にDNAも採取してるし、ほかの事件の遺留品から検出されたのと一致すれば、他の被害者遺族の方や被害者にとってはいいことだろうし、何よりあいつが野放しにされてちゃ俺の気がすまん」

刑事である父さんは、どうやら被害者の家族としても、刑事としてもあの通り魔さんをつまえたいようだ。

まあ、私にもそこまでかばってあげる義理はないし、あの世界に飛ばされる寸前に感じた恐怖の代価としては適当なところだろう。

それから、私は怪我が治った後に退院し、あの世界の秘密を心の中に抱えたまま、普通の生活を送って行った。

担任の教師とかからは、「なにか変わった？」といわれたが（昔は自分で言うのもなんだが、くらい感じだったらしい。生きることあまり執着がなかった昔の私を、一発殴りたい気分だ）きつと死にそうになって変ったんだろうと勝手に解釈して終わった。

そして何人かの男の子に告白されたりもしたが、（これでも一応顔はいいほうなんだぞ！フフフフ）すべて断った。

中には昔好きだった男の子もいたが、なんだか全く魅力を感じなくなっただ。

いやあ。わるいねー！

こうして、私は、ほかの子たち（異世界に飛ばされたりしてない人たち）と一緒に大学まで行くことになった。

途中何回か、夢だったんじゃないかと思うことがあったが、夢なら夢で、いい夢だったな、と思う。

そして大学生になったある日のこと。

――

僕が書いた小説は、あまりネット上では人気が出なかった。

でも、たまたま出版社の方の目にとまって、うちで出版してみな
いかと声をかけられはした。

「もちろん！ありがとうございます」

タイトルは、編集者の方が決めるようだけど、僕は「最強最弱の
異世界魔法騎士」というタイトルで小説投稿サイトに投稿していた。

学校では、みんながいろいろと聞いてきたが、すべて適当に答え
てかわした。

学校の授業にも普通についていけたし、見ていたドラマは一回も
欠かさずに見終わった。

戻ってきた日には、「ひよっとしたらひよっとするかも」と魔法が使えないかなーと試してみたのだが、やっぱり無理だった。

それからというもの、普通に学校生活を送って行った。

ただ、僕がトイレ掃除の当番になったときだけ、毎回トイレが異様にきれいで、箒ではいたりしたほうが汚くなりそうぐらいだった。

途中で女の子に告白されたりもしたがすべて振った。

何となく、というか自分ではもうなぜかはわかってるんだけど断った。

さすがにあの世界に行くちょっと前まで好きだった子なら考えたろうけど、運悪く、その人には無視された。残念。

そして大学まで行き入学して初めての講義のとき。

隣に座った女性が僕のノートを落とした。

「あ、すみませ………」

そして、目が合った時に僕は思い切り驚いた。

ガタン！とイスから転げ落ちて、周りから笑われたがそんなことは気にしていられない。

そう、目の前にいるのは、あのシエルにそっくりだった・・・ていうか本人だった。

「「あ、あのときの！」」

もしかしたら夢だったのかなーと思ったりもしたが、これではつきりした。

あれは夢なんかじゃなかった、って。

「さて、講義を始める。今日はまず、私の愛読書、「ハムレット」についての紹介から始めるとしようか」

ハムレット。シェイクスピアの書いた悲劇だということしか知らない。

「この部分、日本語に訳すところになります。『世の中の関節は外れてしまった。何と呪われた因果か。それを直すために生れついたとは！』」

|
|
|
|
|
|

? s a i d

「おい、お前召喚の儀式にはまだ手を出すなど言っただろうが！」

今僕は、主神であるゼーディンに思い切りどなられている。

普段からグチャグチャとうるさい父親を困らせようと、2つの世界を管理する父親の管轄下で行われた召喚の儀式を邪魔し、軽い混

乱を起こそうとしたのだが……。

「すみません……」

それがばれて、今こうして説教をくらっているわけである。

「まったく。ネルハントなんていない人物のことを信じ込ませるのは結構骨が折れたんだぞ！レイルが来るより先の時間に遡って人に化けた私がネルハントとして宮廷魔術師になり、偽の記憶を与えて、あいつらの恨みの対象をお前からこの私に帰るのにどれだけ苦労したか。源龍に土下座して、あいつらに『神であるお前は殺してはいけない』と言うように頼み込まなくてはならなかった。これで借りが一つできてしまったじゃないか！」

「申し訳ありません……」

シエルという少女のけがは、ネルハントがきっちり治した。

戦闘の時に死んだ証拠である消し炭は、実はネルハント……父さんの服だった。

「罰としてお前は、これからシエルとシレンとレイルの皆が天命を

迎えて死ぬまでずっと、二つの世界のトイレというトイレすべてを掃除し続ける。それがすんだら、一日一時間は私の肩をマッサージしろ。それができれば許してやる。あとで関係者の皆に、夢の中で謝っておけ。ついでに一番巻き込んでしまったシレン、レイル、シエルには宝くじの当選番号でも教えてやったらどうだ？」

「毎日トイレ掃除ですか？そ、そんなあああ」

「やかましいわ！あん？なんならシエルたちの次の世代が死ぬまででも——」

「分かりましたわかりました！誠心誠意、トイレ掃除をさせていただきますっ！」

「分かったらいい。では、わしら神の家に帰るぞ。どら息子！」

「はい……」

――
シエル said

「ねえねえ、お母さん、この本お父さんが書いたんでしょ？」

大学で初めて？久しぶりに？あいつと会ったときから十九年が
た。

お互いに夢だったのではないかと思ってたのだが、あれを機にや
っぱり事実だったんだな、と思うことにしている。

そして、大学卒業と同時に結婚し、今は十一歳の息子と七歳の娘
がいる。

今話してるのが、その息子のほうだ。

レイルには申し訳ないが、許してもらおう。

そして、何の気なしにつけたテレビでは、こんなニュースが流れていた。

「原子力開発、新たな可能性が！平和へ向けての核利用法を、発見したのは・・・」

その記者会見で頭をかきながらちよつと照れた様子で答えていたのは、あのレイルと全く同じ顔の人だった。

「お互い、めでたしめでたし、だな」

「なんのことー？」

無垢な目で息子が見てくる。

「いや、なんでもない。あ。ちなみに今お前が持つてるその本な、お父さんが書いたんだぞ？そしてそこに出てくる超可愛いヒロインが、お母さんなんだから、よくそれを覚えておくように！」

そういうと同時に、今ベストセラーファンタジー小説作家として忙しい日々を送っている、わが夫であり仲間だった人が帰ってきた。

「ただいまー。お、それお父さんの本じゃないか。しかも一番初めにかいたやつだ。懐かしいなー」

ウソつけ。ほんとは今でも何回も自分で読みなおしているくせに。まあ私もだけど。

「あら、お帰りなさい。今、面白いニュースやってるわよ」

エピローグ（後書き）

ありがとうございました。

どうでしたか？おもしろかったと言ってもらえればうれしいです。
シエルさんが生きてたなんて！って言う方に向けて一つ。

「最後の瞬間」とありますが、死ぬんだったら普通「最期の瞬間」
ですからね。

そこにすこしだけ・・・あれ？なんか最終回のあとがきにもかかわらずあちこちからさつきが・・・

というわけで、シエルさんが助かって私も私が助かりそうにないの
で今回はこれで！

そのこの読者の君！私をたすけてくれえええええ！ブシャツ ガタ
ン ゴロゴロゴロ

～作者昇天～

シエル シレン「まったく。人騒がせな作者だな。では本当に今ま
で付き合っていただき、ありがとうございましたー」 the
end（物語と作者の命の両方が）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6680n/>

僕のAnotherStory

2011年9月28日23時26分発行